み。父は郡の㋐胥吏たり、歲々給するに糧を以てす。凡そ客至れば佛法と世法とを論せず、皆瞪目して之を視る。僧あり問ふ、「如何なるか是れ庵主の家風。」忽ち答へて云く、「巖に就いては屋を縛し、澗に掬んでは糜を養る。」問ふ忽ち人あり、西來の意を問はゞ、如何んか祇對せん。懲袂を反へして哭して云く、「苦屈」と。其雅趣を觀、其幽旨を探るに㋒契如の流亞にあらざるか。

石溪の佛海月㋓禪師曰く、「余年三十の時、方に再び㋔南す。聞ならく空叟言ふあり、『二十にして行脚し、此事休也』と。初め此語を得て心甚だ不平なり。二聖を過ぎ、座元の几案間に、窮谷の語、雲門の話墮を擧するを見て、光明寂照の中に於て、便ち歇泊の地頭あり。甌峯に登るに及び、旬日の間、隊を趂ふて入室す。先師擧す、『達磨熊耳に葬在す、甚に因つて隻履西に歸る』と。余答ふるに、㋕『一點の水墨、兩處に龍となる』を以てす。復た一日、㋖龍袖拂開して、面目全く顯る。遂に㋗倒跟すること四載、然して後、江の南北、浙の東西、師友に親しみ、甘苦を甘じ、動轉施爲、未だ曾て向背せず。今に又三十年なり、尙ほ未だ依俙彷彿する能はず。信に

㋐胥吏は出役人、瞪目は目を見張るなり、糜は粥の薄きもの、苦屈は「くるしや」「くるしや」なり。
㋑福州大章の契如、庵主は玄妙の室に預る、小界山に隱れ大朽杉を穿つて居る、身を容るるのみ。
㋒石溪の佛海は掩室開に嗣ぐ、開は松源に嗣ぐ、應庵下。
㋔南すとは南詢するなり、當時禪道南方に盛なり、故に明師に就かんと欲するものは皆南詢す。
㋕昔し吳道子二龍を畫いて睛を點ぜず、人偶々其一に點ずれば忽ち飛び去る、點ぜざるものは尙存す、是れを兩處に龍となると云ふ。
㋗龍袖の龍は籠なり、籠袖は袖をこむるなり。
㋖倒跟猶同意なり、尻を落ちつけるなり。



知る、此事は大に容易ならざるを。休也の二字は、眞に吾の一知識なり。」秀上人に示すの語に見ゆ、今の學者、多く之を見て、之を思はず、悲痛すべきなり。㋘佛智老師、其の錄に跋して云く、「石溪の未だ雲頂を離れざるや、行脚未到の處には、到るべきを要す。既に雲居に見えては、口を開き得ざる處、須らく道ふべきを要す。執侍すること半年、矢弦上にあつて、知つてみづから發たざるが如し。龍袖拂開するに至つて、箭の的中にあり、發つて自ら知らざるが如し。」早年松源に北山下に見ゆ。是れ此の話已に行はる。若し口を開き得と謂はゞ、後方に此の錄あり、腦後猶ほ石溪の一錐を欠くこと在り。烏虖佛海の親しく法門を證悟する、斯に於て見ゆ。語多からずと雖も、大いに㋙控人の入處あり、錄せざるべからず。

王孔大は福州徑江の人、太學博士宗合が猶子なり。年二十のとき、㋚胄發して春官に薦上す、售られず。辛亥の年、毅然として古塔主の風に効ひ、冠を裂いて剪髮し、莆の辟支巖主㋛立堅に依り、杜多の行を修す。已にして人知るものあり、益々絕巔に上り、茆を編んで居る。父母㋜勸勒すれども回らず。甫めて二歲、泉南の明敎忠の法道を聞き、庵を燒きて之に詣り、頌を獻じて云く、「燒却す山頭破草庵、圖らず遊歷して咨參せず。師に

㋘佛智は枯崖の師。
㋙控人入處は人を引きこむ策略と云ふ如し。
㋚宗子を發して禮部の試驗を受けしとき落第せしなり。
㋛立堅前出、妻子を捨てて辟支巖に住す。
㋜勒は止なり歸るを勸め出家を諫止するなり、甫めて二歲は二歲に滿つる時の意ならん。
㋝博飯は又團博飯とも用ひて、めしを食ふ時匙で丸めるなり。
㋞蓋し行路の人に施行せしなり。

依る別に也貪着なし。㋐博飯栽田も又諳ずるを要す。」時に敎忠、風亭通衢に於て、㋑接待庵を開く。孔大、衆底に泯々として、節を折いて服勞す。施主之を聞いて、勸めて大僧となし、名を惟玉と改む。敎忠亦嘗て偈あり、之に示して云く、「老ゆ我が居山已許時ぞ。着衣喫飯只だ宜しきに從ふ。子來つて將に謂へり奇特ありと。笑倒す東家の㋒小廝兒。」後又發明あり、但だ久しく住世せずして寂す。初終㋓祖麟楊道者と略々相類す。烏虖惜しいかな。

西巖惠禪師、衆に示して云く、㋔「彌勒眞彌勒。㋕水銀無假。分身千百億。㋖阿魏無眞。㋗長江子來也。眼に三角を生じ、頭に五嶽を峭す。好は未だ必ず好ならず。惡は未だ必ず惡ならず。布袋頭開くや。㋘隈々隗々たり。骨々董々たり。㋙輕きことは毫毛の如く、重きことは丘山の如し。㋚拈得して便ち擲ち、拏得して便ち用ふ。拂子を竪て〻云く、猶是れ兜率陀天底。只だ彌勒未生以前の如きは如何んか剖露せん。床を擊つて云く、雨聲を收拾して舊樹に歸す。放敎秋色の梧桐に到るを。」五祖六祖の像に題して云く、「恨殺す此の頭陀。山は磨すとも恨磨せず。吾れ今㋛檐頭重く、汝

㋒小廝兒は「こわつぱ」と云ふ如し、或は小丁稚と見るも可なり。
㋓大惠育王に在りし時、楊麟自ら髮を剪りて得度を求む事は靈臥紀談に審かなり、名を祖麟と改む、人は楊道者と呼びしなり。
㋔彌勒眞彌勒、分身千百億、此二句は布袋の作なり。
㋕藥筆銀は似せものなれども水銀には似せものなし。
㋖魏曹操は油斷ならぬ男故、人阿魏無眞と云ふ。
㋗長江子は布袋和尚自ら稱せし名なり。
㋘隈隈隗隗は「ザザムサ」きなり、骨骨董董にはつまらぬものの「ゴロゴロ」するなり、布袋の內には飯の食ひ殘しや雜具などが一緒に入れてある故なり。
㋙布袋は岳林寺の檐下の磐石上



が爲めに、松を種うる多し。」㋝西巖三十餘年、佛鑑の處に所得する底、拈出して人に示す、涓滴の滲漏なし。後の三十年、點眼の藥なり。

丞相鄭公淸之、㋞嘗つて妙峯の善禪師に謁す、坐定まつて、峰曰く、「相公心を此の道に留む、還つて歎喜する處ありや、また無きや。」公曰く、「且坐喫茶。」峰曰く、「不是心、不是佛、不是物、相公作麼生。」公曰く、「低聲低聲。」峰曰く、「也須らく子細にすべし。」公曰く、「描也描不成、畫也畫不成。」峰默然たり。㋟老師嘗て此を言ふ、因つて之を識す。

福州越山の法深禪師は、本州の人なり、未だ落髮せざるとき、已に見處あり、月窟に梅嵓に依つて得度す。浙遊して、雙徑に至る、無準一見して之を器とし、翰墨を掌らしむ。議者其の㋠年抄を以つて、未だ職に稱はずとす。遠上座の爲に起骨に云ふ、「末後の一着、始めて牢關に到る。山遙かに水遠く、火は冷かに雲寒し。啞、是れ獨髏眼活するに非ずや。遮の一步を進むるも、也大難大難。」衆始めて服膺す。里に歸つて梅嵓に居ること十餘年、自ら雲山畊叟と號す。樞相鄭公㋡性之、尙書陳公韡、閑居の日、相與に講道し、郡に白して到して釣臺に主たらしむ。寶祐の間、越山に遷

に死せり、平生大層布袋を辱しめし役人が懺悔の爲に棺を作りしが、如何にしても重く丸で丘山の如くであるから他の布袋信向の人が、別に棺を作り之に移せしに輕きこと鴻毛の如くなりし。
㋚白鹿和尚如何なる布袋と問ひしに、布袋和尚袋を擲つて立つ、又如何なるか布袋下の事と問へば、布袋和尚袋を肩にして去る、是れ拈得拏得なり。
㋛六祖母に事へて孝なり、家貧なりしかば、樵採して母を養ふ、檐頭重くとは是れなり、五祖は破頭山の栽松道者の再來なり。
㋝四巖は無準の法子、無準は破庵に嗣ぐ、破庵は密庵に嗣ぐ、支那にては此系盛なり。
㋞鄭淸之は理宗の朝に丞相となり魏國公に封ぜらる、妙峰の塔銘を撰す。

る、未だ幾くならずして逝く、故に名顯著せず。

祖昌庵主は何の許の人なるを知らず、天目山中に隱る。庵を結んで㋟陳墳に取る、約二十里餘あり、雙徑の榮首座嘗て山中に遊んで、偶ま其庵に至る、荊棘は蒼密し、墻壁は傾斜す。昌頽然として路口に於て杖に倚つて立つ。㋑雪眉霜髯、壞衲弊履、人物畫くべし。且つ欣然として揖入し、共に坐す。榮左右を視るに、瓶に儲粟なく、竈に餘煙あり、心甚だ異しむ。問ふ、「山に居ること今に幾年ぞ。」遂に名を稱して答へて曰く、「年を記せざるなり」と。益々之を奇とし、「粮食は誰れか供ずや」と問ふ。答へて曰く、「給を陳氏に仰ぐも今は無し」と。問ふ、「何ぞ行脚し去らざる。」答へて曰く、「達磨東土に來らず、二祖西天に往かず。」問ふ、「如何なるか是れ隱者の家風。」答へて曰く、「猛虎の一聲山月高し。」遂に㋺屏息して敢へて復た問はず。少焉して昌茗芽を出し、水を掬して之に嚥ましむ。除ろに雙徑歷代の尊宿を叩けば、咨嗟すること之を久しうす。蓋し嘗て㋩典午塗毒に見え來る。若し其の前輩に見ゆるより言はば、翅だに百齡のみに非ず。又曰く、「路遠し、宜しく卽ち歸るべし。」榮明年同道を拉して之を訪へば、已に其處を失ふ。豈世出世間の異人なるものに非ざるか。要するに、當に懶殘西山亮輩の中に於て求むべきなり。

㋟陳墳は人の名、此の人より衣食の給を受くるなり、其の往復の道里二十里程あり。
㋑雪のまゆ霜のひげ破れ衣に切れ草履、畫中の人の如し。
㋺屏息は機鋒俊邁に屏息せしなり。
㋩典午の游、塗毒の策、黃龍派の古人なり。
㋪老師閑遠幽なり。
㋫年抄は年少きなり、蓋し抄は妙眇と同用せしならん。
㋬性之は清之の誤ならん。





溫陵の黃允、字は孚中、晚年に參請を喜び、罪福を知る。嘗て言ふ、「昔し護國主首の爲めに、開堂の疏を撰し、曾て其潤筆の資を受く」と。懺悔の疏を作り、元物を備へて寺に詣り、供說して還謝す。事を叙すること㋭簡核なり。署に云ふ、「諲長老の護國に住する。劉大卿の溫陵に守たる。允や時に㋮計偕に預り、當に省試に趨くべし。開堂の撰疏は府命の嚴を逃れ難く、潤筆の貽資は實に僧儲の有より出づ。昔しは貧の爲めにして受け、今は數の如くにして以て之を還す。二十三年常に懷慚の客となり、七十五年方に了事の翁と成る、」と。聞くもの嗟服す。

平江府開元の別翁甄㋯禪師は、西蜀の人なり。初め閩に入つて、枯禪に見えて、其機用を悟り、後癡絕に從遊して、其至要を得。淳祐の間、衢の南禪に開法す。臘八の上堂に、「世尊正覺山前に、夜明星を見て、忽然として悟道し、乃ち云ふ、奇なるかな、一切衆生、如來の智慧德相を具有す。但だ妄想執着を以て證する能はず」と擧して拈じて云く、「釋迦老子明星を觀ざる以前、人をして疑着せしむるを妨げず、卽に明星を觀るの後、許多の肝五臟摠べて別人に覷破せらる。還つて釋迦老子の爲めに、主となる底ありや、」と。別翁徒だ此語あつて、只だ釋迦老子の心肝五臟、別人に覷破せらるゝを知る。殊に知らず、㋰別翁の心肝五臟も、又

㋭簡要核實。
㋮計偕とは會計を上る吏と偕にすとて、擧人は計と俱に都に上りて試驗を受くるなり。
㋯別翁祖甄禪師は癡鈍に嗣ぐ、癡鈍は曹源に嗣ぐ、源は密庵に嗣ぐ。
㋰不才淨は潔淨ならざるの文字にて「ぢぢむささ」を云ふ、五時八教の寐言なり。
㋱枯崖さんあなたの尻の赤いのも矢張人から笑はれて居はせぬか、さうぢや、さうぢや。
㋲不才淨を說き出し、心

別人に覷破せられ了はんぬ。

# 國譯枯崖和尚漫錄卷の下　終



## 跋

此集の記する所は、皆近世の善知識なり。中間、柔萬庵元雙杉の如きは、皆予の舊方外の友なり。曰く、篠塘の賢辟支の堅は、則ち余其塔に誌せり。㋑悟兄儒を舍てゝ釋に入り、其前輩を敬慕すること此の如し、進々として未だ量るべからず。論ずる所の金華の元首座、㋺前後の話頭已に眼目を具す。大慧の所謂顚倒の禪とは、正に此病を道着す。悟能く是を以て之を求めば、他日此集の諸老と共に、僧寶傳に入らん。㋩竹溪鬳齋林希逸題す。

景定四年夏四月。

㋑枯崖は後出世して興福寺に住す。

㋺前に佛道を答へし時は開くもの皆笑ふ、後に佛道に答へしには傳者皆喜ぶ、悟首座論じて曰く、斯の如く答話を辯驗せば、己靈を埋沒し前輩に辜負す。

㋩希逸官は中大夫に至る、老莊列三子の口義あり、世に行はる。

# 枯崖和尚漫錄序

石谿偃谿愛人物崇風教賢於端嘉諸老暮年靈徑於余尤親密評商述作一語無諱嘗道枯崖仲簡于二老厥後俱掌記徑山簡富於文惜早世而枯崖清苦憤發正宗有聞余居喝石嵓夾路玉簪花一開秋風騷然或笑曰禪和子纔見此花則憂禦寒無計東馳西騖獨枯崖坐破窓怡然每携被嵓上同宿月涼登閣雪霽看山相與胷中耿々余出錦谿報慈歸延平含清數年稍睽間聞枯崖集古成錄偃谿喜其所取機緣皆有控人入處後村謂何時煑茗得重論竹谿謂它時共入僧寶傳枯崖南歸携錄相訪適余遷光孝卒爾過目而別今枯崖瑞世泉南與閑居太白欲刻仲宣孚非庵光艮嵓沂勝叟定諸人舊作及捧黃仕山酬應不韻亦不果枯崖當搜抉其遺繼々彙集俾五燈之後復見一燈光明燭天下豈漫錄云乎哉枯崖名悟福之福清人咸淳八年仲春北山紹隆書于鼓山老禪庵。

昔偃谿佛智禪師、住靈隱、予客臨安、相與往來、神交道契、非一日、知枯崖之名久矣、未曾眉毛厮結、偶寓于泉、因過興福寺、一見、元是屋裏人、恬淡寡言、眞脫偃谿印子、來頃聞、枯崖癸亥歲、歸徑山蒙堂、裒集平昔所聞見、宗宿入道機緣、示衆法語、及殘編短碣、名字未上于燈者、隨所筆、名曰漫錄、其志有在、呈似偃谿、被叱擊下無事閣裏、是歲夏五、忽謂曰、將謂所述者、効紀談雜錄、資談柄耳、今閱之則異、是所收機語、皆有控人入處、已用筆點下、餘則剗卻、且囑、宜珍藏之、予雖欲見是錄、而未暇扣、忽得起座元携元藁、過我、欲爲鋟梓、請信庵一轉語、予詳復數四、雖枯崖得之所聞所見、然編集成傳、或讚或拈、或着語、或紀實、一々自胷襟流出、豈是依本葫蘆、則知枯崖和尚所集者、皆發蘊櫝之美玉、而非鼠璞、佛智禪師所點者、皆選走盤之遺珠、而非魚目、予更贅語、恐反生玉之瑕、而爲珠之類矣、起兄請之力、不獲已、再垂一足、助彼畫蛇、噫漫錄一出、何異揚雄之草玄、取譏於人、雖然後世必有子雲者出、咸淳壬申夏、清漳信庵陳叔震序。

# 枯崖和尚漫錄卷上

圓通宗照庵主、因木庵初到泉南、館是庵、一日具威儀問曰、某甲愚鈍、乞師指箇見處、木庵指面前香爐曰、見麽、照曰見、庵曰見處如何、照曰某甲不會、庵曰又道見也、照悚悟流汗浹背、自此杜門四不出、一衲百結、韻致高古、莫能親疎之。

慈慧祖派禪師、溫陵張氏子、祝髮於開元羅漢寺、參文關西之嗣宗岱餘、宗舉僧問雲門、如何是正法眼、答曰普、又僧問、如何是正法眼、答曰瞎、子作麽生會、派罔措、由此焦慮忘飢寢、一夜坐至子刻、聞山禽叫一聲、省悟、黎明求宗印證、纔入門便喚曰、和尚、宗曰、子來作麽、派曰、東家杓柄長、西家杓柄短、宗曰、子夜來發顛耶、派曰、是和尚顛、是某甲顛、宗下禪床、擒住曰、見什麽道理、派曰、伏惟和尚尊候萬福、宗托開曰、還我前日話頭來、派作女人拜、復呈頌曰、問正法眼、答曰普瞎、萬里清風、一溪明月、今香泥像、留於里之四松、爲緇素欽仰焉。

黃莊定公祖舜、晚尤淡薄、留心禪宗、因觀傳燈、悟入述偈曰、六載留心讀釋書、幾回紙上被模糊、今朝放下都無事、只是從前箇老夫、仕至執政、爲紹興名臣、且能證徹此道、未許裴李專美於前矣。

浙翁佛心禪師、初到雙徑、見大慧之嗣仁公、扣以當時千七百衆、咨決之要、得狗子無佛性話、默領去、過台之報恩、求決於佛照、夜參、聞舉世尊鞭影語、曰、見鞭影而行、非良馬也、言下省悟、

旦日入室、問、不思善不思惡、正恁麼時、如何是琰上座本來面目、曰佛手遮不得、復隨侍證者衲於番陽、聞旁僧商量雲門話墮話云、那裏是這僧話墮處、豁然洞見佛照從前機用、佛照每語人曰、我握拂柄以來、的契吾機者、惟琰爾、後佛照佛心接武住凌霄、法席俱盛、如佛日猶在時也、佛心塔在湖東、詳見誌銘。

興化軍瑞香烈庵主、本郡人、號幻住叟、妙年奇逸、飽叢林、久參等庵、後得東庵、發明心要、歸鄉居虎丘巖、餘十年、有山居小詠、其一曰、客來詢秘密、幽鳥語聲嗔、此意分明甚、何消我再言、嘉定間、郡守以東塔招之不出、及移錫瑞香、得東庵訃、舉哀拈香云、向來信采遊江外、業風吹到明州界、壑着磬頭老拙庵、驀遭毒手相殃害、猛虎出林不足威、蚖蛇當路未爲恠、虛空激拶火星飛、流布叢林惡聲在、死中得活復歸來、冷地思量眞難耐、近聞筋斗已倒翻、且喜昇平吾道泰、炷香聊以表殷勤、償却拳頭竹篦債、大衆只如佛照和尚、既然與麼、且道、只今是雪屈耶、是酬恩耶、說着雖非直半文、誰知却有通人愛、瑞香得處分明、確守其志、不肯應世、伽梨勃窣於水光林影中、想見其高風逸韻、令人意消。

鐵鞭韶禪師、因密庵開堂、直趨前曰、箇是選佛場、心空及第歸、今日相見處、大地起風雷、作麼生是相見底事、庵不答、又曰、十二時中有箇漢、把劒來截將儞頭去、爭奈渠何、亦不答、遂攝一坐具曰、遇這寃家、不打更待何時、亦不答、退身唱三聲喏曰、捉得賊頭袁達李磨、到請鈞旨、庵方竪一拳、示之曰、領鈞旨、翻筋斗便出、庵入室罷、告衆曰、適來有箇漢、牙如劒樹、口似血盆、手把一條垂條、如鐵鞭相似、老僧親遭一下、汝等諸人、切須照顧、自此號曰鐵鞭、六年爲不釐務侍者。

萬庵柔禪師示衆云、有句無句、如藤倚樹、荊棘林中開活路、樹倒藤枯句歸何處、生鐵秤鎚被蟲蛀、泥盤放下笑呵呵、殺人劒與活人刀、若是金毛獅子子、三千里外見諸訛、佛生日云、周行七步、已入邪路、目顧四方、開眼尿床、指天指地、有甚巴鼻、唯我獨尊、猶是兒孫、畢竟浴他、圖箇什麼、良久云、珊瑚枕上千行泪、半是思君半恨君、閱此數語、履霜知氷、踐露知暑矣、密庵雖門戶嚴緊而接人甚盛、豈有吞舟之鱗、能漏網耶。

芥堂璁禪師、預木庵室、一日侍次、忽逢其怒、曰儞在此作什麼、夏制將滿、西來意作麼生會、纔擬答、被劈口打一掌、且厲聲曰、速道速道、纔擬答、又被打一掌、忽省發汗下、禮謝而去、自此諸方、號弘法道者、莫不往參激、晚住吳門聖因、益馳聲譽、白髮垂肩、叢林呼爲璁白頭也。

眞源慧日禪師、字明可、方峻超卓、頗黃龍三關云、我手佛手、糞箕掃帚、拈起便行、誰分先後、我脚驢脚、步步踏着、踏破虛空、一任卜度、人人有箇生緣、屋漏望見青天、昨夜泥牛勃跳、帶累金剛發顚、應庵見之歎曰、眞黃龍的骨孫也、頗竹篦子云、半載出師當古塞、將軍疋馬意崢嶸、不知打破重城了、空把牢關不放行、大慧聞曰、此黃龍兒孫、亦解我楊岐下說話、眞源嘗問僧曰、佛以一大事因緣出見於世、如何是一大事因緣、僧無語、復引諭而謂之曰、如一顆明珠頓在朝天門濶頭市裏、千人萬人、行過不見、忽有一箇漢、遇着便叫云、我快活、只是這箇道理、會麼、初住杭之多福、後住昇之興教、明之香山、乃天台萬年雪巢一村僧嗣、語言宗旨、木水之有本原也、雪巢別帖云、專介之來、收書且喜、被臨安命、遴選出世、仍審、別後新領住持、道體康安、深

以爲慰中間赴長蘆欲得相見知已入院人言多福政在於潛新城深山中只成悵然而已我身畔別無人甚望汝歸來奈何已出佩空王印事要兩全則難矣且勉力向前行道不可恣縱自己令厚却薄他人軟暖淡薄汝亦深悉之今之住院多如此可相信也若到秋間我定要歸天台萬年觀音別院必作長往計無因見汝且自保順世間人情使祖道光顯至祝普灯只載其嗣法法常首座。

愛堂妙湛禪師依水庵於杭之淨慈爲水頭淨頭一日於寺前舉扇化錢忽然猛省因忘縮臂旁僧訶曰獃子扇上有錢了通身汗出掖歸白水庵而印可之亦有頌示之云一堆屎上一尊佛放出毫光照天地鑊湯爐炭裏生蓮只因洗面摸着鼻爲青堂首衆日新福帥王公度遊山與論契合到福以黃檗招之後赴吳門守趙公彥橚承天之請方順寂愛堂安吉人朴野絕文飾間發語言如枯柴人不及見惜哉。

臨安府徑山少林佛行崧禪師生於建之浦城徐氏受業於夢筆峰等覺瑞世於安吉報本嗣東庵道聲四馳未幾起住杭之淨慈上堂舉僧問鹽官如何是本身盧舍那官云與我過淨餅來僧提淨餅至官云復安舊處着拈云鹽官八萬四千毛竅竅竅俱開三百六十骨節節節欲斷可惜這僧如夢相似上堂舉洞山云初秋夏末兄弟東去西去直向萬里無寸草處去後來瀏陽庵主道出門便是草大陽云不出門亦漫漫地拈云同聲相應同氣相求則不無三大老子細檢點將來總是藤蛇繞足且利害在什麼處誰知雲外千峰頂別有靈松帶雨寒上堂云是法不可示言辭相寂滅春葩千萬叢春山千萬疊正與麼時釋迦老子打失鼻孔是汝諸人還知麼喝一喝下座上堂云欲得大用見前直須頓忘諸見諸見若盡昏霧不生大智洞明更非他物遂擧拂子云看看若道見頭上安頭若道不見斬頭覔活畢竟如何良久云洎合錯下注脚喝一喝下座既退席過武康宴山接待寺□寧廟尤重佛法嘉定間再得旨董南山卽詔延和殿登對賜號佛行禪師金襴袈裟寵榮至矣。

臨安府淨慈肯堂充禪師餘杭人嗣顏萬庵風規肅整望尊一時頌卽心卽佛云美如西子離金闕嬌似楊妃下玉樓終日與君花下醉更嫌何處不風流曹山喫酒云販海波斯入大唐先將珍寶暗埋藏却來伸手從人覓爭奈難瞞有當行擧萬庵先師有語云坐佛床斫佛脚不敬東家孔夫子却向他鄉習禮樂拈云入泥入水則不無先師爭奈寒蟬抱枯木泣盡不回頭卓拄杖云灼然有不回頭底肯堂向升子裏禮爾三拜昔大潙佛性謂頌古拈古要奢儉得所如人解使錢不必多也善讀肯堂語者當自知之。

寶峰端庵主久侍佛照見其頌女子出定因緣有悟入處一日造丈室於座左側叉手而立少頃便出照呼來前曰有什麼辨白端又於右側叉手而立照喝端趨出照領之端恂恂如鄙人居小庵無宿給戶外之屨常滿同門如權孤雲印鐵牛致書招之不出。

安吉州烏回月林觀禪師性純誠無嬌飾福之候官黃氏子初爲牧童鞭叱牛有省屏葷血投雪峰忠道者出家謁荆南二聖戒準得度見澧州證老禪獲其法初造室聞擧話云若能轉物卽是如來面前香臺作麼生轉曰築着磕着被叱去復隨侍過饒之薦福看雲門話墮又十年一日繞蓮池行自誦云那裏是這僧話墮處忽大徹塗毒在徑山遯庵在華藏皆有書致之分

座、頌洞山麻三斤云、脣上碧斑賓豹博、舌頭當的帝都丁、頻呼小玉元無事、只要檀郎認得聲、嘉泰間、瑞世吳門聖因、遷承天萬壽、學者輻湊、住烏回、示疾日、猶再鼓入室、且曰、桂花開時、吾將行、俾其徒預結夏制、已而桂花盛開、嘉定丁丑、四月十三日也、參前入室、再鳴鼓普說、衆集定、拈拄杖云、有拄杖與拄杖、無拄杖奪拄杖、衆中莫有會底、出來道看、衆無對、擲下拄杖、危坐書偈而寂、閱世七十五、坐夏五十一、闍維舍利不可計、烏虖命世宗師、處死生如雲行鳥飛、初無留礙、烏回夏中入滅、桂盛開如其言、此尤見其超絕奇瑞明驗處、非荷負大法精一力乎。

曹源生禪師、在信之龜峰、示衆云、從朝至莫、鍾魚鼓板、爲諸人發上上機了也、若信得及、塵沙諸佛、在諸人脚跟下、跱跳、若信不及、龜峰拾得口喫飯、拍禪床下座、眞黃龍所謂、如數世富人一錢不虛用耳。

松源岳禪師、初入閩見乾元木庵、久之辭去、木庵舉有句無句如藤倚樹、源曰裂破、曰琅邪道、好一堆爛柴凝、曰矢上加矢、曰吾兄下語、老僧不能過、其如未在、他日拂柄在手、爲人不得、驗人不得、曰爲人者、使博地凡夫一超入聖域、固難矣、驗人者、打向面前過、不待開口、已知渠骨髓、何難之有、庵擧手曰、明明向汝道、開口不在舌頭上、後當自知、逾年源見密庵於衢州西山、隨問卽答、庵笑曰、黃楊禪爾、後在徑山、聞庵問旁僧、不是心不是佛不是物、忽大徹乃曰、今日方知、木庵道開口不在舌頭上、源生處之龍泉吳氏、開法蘇臺澄照、慶元間、被旨住靈隱、門庭高峻、入者鮮不爲大器、烏虖、松源破庵曹源萬庵、豈非起中峰之道者耶。

大梅止翁祥禪師、無用嗣子、示衆云、瑞岩示衆、絕支離、栗棘金圈劈面揮、直下有人呑透得、更須來喫頂門鎚、語言質直、如其人、住山規模尤過人。

月林覯禪師會中、有一杜多行、明得俱胝一指話、且曰吾老矣、須再來、歸寂後三十餘年、月林在湖之報本、夜夢開室擧俱胝話、見杜多行造室竪一指、明旦室內擧前話、孤峰秀公、時在旦過中、趨入亦竪一指、月林曰、杜多行再來矣。

福唐明首座號寂照、飽參聰敏、久侍空叟於四明玉几、叟感風疾累年、左右相繼辭去、照服勞益勤、叟常囑、以福鮮不宜出世爲人、歸里爲鑑絕照、首衆鼓山、帥李公俊以大雲峰招之、辭以偈云、箇是皇朝無事僧、談禪說道總無能、頹然送日猶嫌贅、敢把虛名玷祖燈、絕照勉其出、復曰、願做閑人、述偈云、恰露半頭原畔立、故人底事又相逢、柴門去此無關鑰、佛若來時却弗容、卽日遁去、後寓閩清白雲、學者景向、又數年、帥趙公希靖、盡禮以雪峰迎請、照以書授小師圓庵主、辭謝不赴、帥封沈香爲供、將以四句云、道人高臥挽不來、凜凜清風起懦頹、太守無由親問道、辨香聊寄小師回、寂照三十餘年、守一破紙被、見地明白、遵記莿而恥表襮、依林藪而安寂寥、始卒不易、使爭競名位、販賣佛祖者、聞其風、亦可以少愧矣。

浙翁佛心禪師、示如璨法語云、本色道流、十二時中、六根門頭、空牢牢地、如一面軒轅寶鑑、胡來胡現、漢來漢現、選甚眞如涅槃菩提煩惱、以至世間虛幻情欲逆順是非、一一照破、直是汙染、不得、若也六根門頭、纔有纖毫異念、便被許多爲障爲礙爲寃爲懟、使得七顚八倒、凡聖之岐、由此而分、然凡聖初無兩種、只是一箇了事人、了底喚作聖、不了便是凡夫、龐居士云、不是聖人了事凡夫、此之謂也、既知得了、更須子細、不可目前輕結裹着、箇裏方要見人咬定牙關、

且崖將去、驀然崖到懸崖撒手處、正好入人爐韝、受人鉗鎚、稱箇本色道流、不爲分外、忽爾時緣所迫、出來與人解粘去縛、內亦無愧、自然綽綽有餘裕也、閱此眞臨濟宗骨髓耳。

常州華藏明極祚禪師、嗣暉自得、嘗舉保壽開堂語、拈云、保壽開堂、爲衆竭力、三聖推出、故園春色、保壽便打、可知禮也、瞎却鎭州一城人眼、三聖重重露肝膽、保壽下座、便歸方丈、千古叢林爲榜樣、喝云、喚作榜樣得麽、明極以大父事宏智、拈提如山濤論兵、闇合孫吳、亦可爲叢林榜樣。

安吉州鳳山資福破庵先禪師、王氏、蜀廣安新明人也、參密庵於烏巨、隨衆入室、見其爲旁僧舉不是風動不是幡動、忽然朗悟、復隨侍過蔣山、五載不自衒鬻、亦未嘗得其許可、遂辭歸蜀、密庵潛乘小肩輿、前詣五里、袖中出語餞之曰、萬里南來川嘉苴、奔流度及扣玄關、頂門歡喏摩醯眼、去住還同珠走盤、破庵住夔府臥龍、始通法嗣書、時密庵在天童、謂育王佛照曰、元來川僧有道義、佛照曰、待爾知得遲了、蓋密庵平生怕川僧、不肯掛搭、而佛照喜川僧、堂中太半是。

妙峯善禪師、住台州惠因、開爐示衆云、翠雲隨例也開爐、撥盡寒灰火也無、竪起拂子云、拈起死柴頭上底、吹云、不知誰是赤鬚胡、高原開之、薦於青山鄭公、公云、見說他住壞人院子、原云、佛法也要人撑拄在、後居臨安永教、公果付下省箚、請住小瑞岩、再見佛照於育王、以風旛語、直箭鋒機、佛照贈之以偈云、今日爲君通一線、斬丁截鐵起吾宗、妙峰劉氏、晚年叢林、以老劉呼之。

衢州報恩百拙登禪師、和州烏江人、族閔氏、應庵晚子、初有見時言、夜半如白晝、示學者曰、道人相見莫週遊、大地都盧是一州、信手拈來信手用、始知大地一毫收、又曰、道人相見勿哆哆、一句可以定干戈、得失是非都拈却、不知那事復如何、住報恩、三夏、賦性絕彫飾、機語皆質直、故有百拙之號。

野雲南禪師、會稽人、表裏端勁、先於無用會中、爲園頭、有契悟、後瑞世、示衆云、霜風落木、鴈陣驚寒、生身父母、露出心肝、觀音菩薩、嗔霍不盡、失却鼻孔、且喜諸人、天下太平、又云、百計推尋、永不見面、一時休去、在處逢渠、長連床上、喫粥喫飯、取飽爲期、我且問爾、常住一粒米、是幾番過手、烏虖、楊岐之道、至大慧大振、語言機辯、胥江八月之濤、莫能遏者也、無用祇以其親切底接人、亦無敢湊泊、晚始得野雲、此等示衆、眞無用親切語、未知孰爲優劣、孰爲孫叔也、不忝爲佛日之子孫矣。

淳庵淨禪師、蜘蛛頌云、立處孤危用處親、一絲頭上定乾坤、渠儂不是誇機變、要與衆生斷命根、爲人所誦、尤能節儉省事、不勞役人、亦如舜老夫炙灯掃地皆躬爲之。

退庵奇禪師、預印別峰室于徑山、別峰纔望見其來、失喜下床接之、不復爲衆舉話、退庵恐妨衆、後惟未至、住金山普說云、便恁麽散去、早是辜負平生了也、那堪更進前咨詢、某甲等爲生死事大、無常迅速、不堪爲種草、若是互爲賓主、成法爲人、却較些子、此爲已徹證者說、或者久在叢林、非不用心、不能得箇透徹者、過在信根不重、半信半疑、似做不做、只是無決定志、又不能全身放下、縱使放得下做得、理路絕處、情識盡處、靜境不戀、鬧境不拘、只與麽

浸在死水裏、分明死了活不得、往往多、只向這裏着到、若能猛烈靠將去、一撞撞着始得、此爲久在叢林打未到頭者說、若是乍入叢林兄弟、信根純淨、諦聽此事、恰似箇白練絹相似、不受他人點汙、得遇明師、發一片誠心、不願出人前、唯只是要參禪學道發明心地、資之勇猛、確然以生死大事爲念、十二時中、時時覷捕、驀然泯慮絕知解、如晴空萬里、不掛片雲、何患日頭不出也、日頭纔出、無不照處、日頭出時、恰似箇什麼、山野老婆心切、向壁角頭、拈出一片陳橘皮、與諸人作樣子、豈不見、壽禪師因普請次、拋下一片柴頭、驀然契悟、便道、撲落非他物、縱橫不是塵、山河及大地、全露法王身、這箇時節、還計較得麼、如人飲水冷暖自知、法眼和尚、也曾恁麼打發一回、便解道、物物到心上、全心物自閑、古今城郭裏、得者住如山、可謂眞語者、實語者、當恁麼時、不用求殊勝、殊勝自然至、非但壽禪師大法眼如此、至於三世諸佛、六代祖師、天下老和尚、皆不出此、若有別證別解、卽是外道法、非是佛法、金山恁麼忉忉怛怛、恰似箇媒人相似、東邊說一歇、西邊說一歇、兩邊說一合、及至到家相見、儞自理會、不干媒人事、儞若實到家相見一回、更不忍捨也、參禪學道、須到不忍捨處、底田地、正好做工夫、如人上山、各自努力、烏虖入大爐鞴、上大鉗鎚、等閑發一機、示一境、自不尋常、此等普說、恰似賣田立契相似、東西南北四至、一一爲人指出、別峰三十餘年、坐曲彔床、只得退庵一麟足矣。

南嶽方廣照禪師、淳素鄙朴、以罵詈爲佛事、學者憚之、有二僧至、照問曰、天寒歲暮、上座何來、僧曰、一家有事百家忙、照曰、相見底是阿誰、僧曰、某甲與和尚、照指香臺曰、面前是什麼、僧曰、香臺、照曰、將謂收番猛將、元來是行間小卒、僧喝、照便打、問第二僧曰、天寒歲暮、上座何來、僧曰、不得氣力祇對、照曰、聞儞攪衆出院是否、僧曰、和尚幾時得者消息、照曰、近前來與儞道、僧吐舌、照便打、且含胡話罵曰、我這裏無米無柴也來亂統、以拄杖趂之、照西蜀人、佛照會中號照白眉者、垂示機語、不在空叟鐵牛之下、

橘洲曇禪師、字少雲、嘉定府人、出峽住明之仗錫、暇日著論、發明佛祖機緣、名曰大光明藏、筆勢宏濶、惜未成全書而寂、論贊丹霞云、刻殿前草、騎聖僧項、天寒燒木佛、三事併案、夫豈他人所能、如衡山之雲、軒豁呈露、遽見突兀、不自爲能也、然時有觀顧悸怖、而喪其所守者、院主是也、等閑放過南陽侍者、而直擒取南陽國師、所謂挽弓須挽强、是此手也、重哀末世疲癃之疾、增損古人必効之方、成大法藥者、宜用元和津嚥下、和平之福、可立而俟也、余見佛智老人、偶閱此且曰、學者亦宜於此用元和津嚥下、洲嘗自撰龕志、略云、初聽楞嚴圓覺起信、復捨去、依成都昭覺徹庵白水庵、挈包南來、從先大慧於育王徑山、後見東林萬庵蔣山應庵、辛苦艱難、始畢平生之願、則知其涉歷尤艱辛、未聞容易而得也。

慶元府天童無際派禪師、嗣佛照、生於建安張氏、慶元四年、開法常之保安、上堂云、說卽無功有過、不說又是罪過、自今各省己過、無以責人之過、拄杖不應放過、也要從頭按過、卓拄杖云、內卦已成、再求外象、又卓三下、占得風山小畜、變成澤風大過、卓一下下座、初預密庵法席、有剪紙塔、戲俾頌、頌云、當陽拈起剪刀裁、七級浮圖應手回、堪笑耽源多口老、湘南潭北露尸骸、一衆服膺、讚船子云、三寸離鉤摵一橈、百千毛竅冷颼颼、雖然兩手親分付、要在渠儂自點頭、讚靈照女云、老爺喪盡生涯後、累汝沿街賣箕箑、不是家貧兒子苦、此心能有幾人知、叢林稱

之、嘉定間、在天童示疾、辭衆上堂云、十方無壁落、四面亦無門、淨躶躶赤洒洒、沒可把、喝一喝云、幾度賣來還自買、爲憐松竹引清風、下座、入丈室端坐泊然而化、壽七十六、臘五十二、佛果下、大慧接人多如馬祖、今獨東庵下爲盛。

螺庵肇禪師、住雪峰日、贊祖師云、德山棒下桶底脫、蟭螟眼裏乾坤濶、坐斷東南第一峯、百川倒流閑聒聒、自題照子曰、陰崖鳥滅槎頭雪、午夜猨啼竹外煙、莫怪住山無伎倆、騎牛踏破水中天、余己酉夏、在石翁玉和尚會中、耆宿猶能言之、今僅憶此二贊云。

金華元首座、剛峭簡嚴、叢林目爲飽參、見等庵於白雲、始了大事、僧問如何是佛、曰卽心是佛、問如何是道、曰平常心是道、問如何是祖師西來意、曰趙州道底、聞者皆笑、後有僧問、如何是佛、曰南斗七北斗八、問如何是道、曰猛火煎麻油、問如何是祖師西來意、曰龜毛長數丈、傳者皆喜、噫若如此辨驗答話、不惟埋沒己靈、抑亦辜負前輩。

蒙庵聰禪師、生福州長樂朱氏、少長不侵侮好狎、年十九依信之龜峰光晦庵、二十七得度、卽告以欲隨衆專一體究己躬大事、免以衆務爲役、庵笑曰、汝要緊參禪耶、佛法在一切作用處、尋常行履處、何懼事務奪、卽今且限一月日、如不了決罰不怨、退以佛法在尋常行履處、寫貼於牕上、脇不至席者半月、庵時時默探之、見其作意太猛烈、私念云、此子若不悟、恐狂去、一日聞搐鼻有泣聲、云啞壞了此子、詢問乃知俗家訃音至、庵擧意曰、這裏好與一槌、卽喚來問曰、汝有什麼事、且道以父亡、聲未絕、庵扭住與一掌、云、許多無明煩惱、甚處得來、又一掌、當下疑滯氷釋、卽禮謝、銜口呈偈曰、了了了徹底了、無端赤脚東西走、踏破晴空月一輪、八萬四千門洞曉、庵曰、這鈍漢、且放三十棒、曰、某甲亦放和尚三十棒、曰、儞看瞎漢、便敢亂統、自此機鋒峻捷、無敢當者、庵臨寂時、付以法衣幷偈、曰、再來毒種、元聰侍者、難耐吾宗、滅汝邊也、且曰、異日不得辜負老僧、曰卽今亦不少、曰恁麼則三十年後、此話大行、曰蒼天中更添寃苦、瑞世龜峰、爲晦庵嗣、後遷六處、被旨住徑山、十四夏而寂、烏虖、蒙庵於晦庵之門、燒尾鱗也、如烏窠得會通、無三登九到之勞、雖曰師資緣合、顯微一貫、如印印空、了無朕迹、非介而勇、願而專者之驗歟。

笑翁堪禪師、初遊方抵明之太白、無用問曰、汝行脚僧耶、遊山僧耶、曰行脚、又問、如何是行脚事、翁以坐具撼之、無用曰、此僧敢捋虎鬚、參堂去、一日室中、擧狗子無佛性話、擬開口、無用起擧竹篦、翁應聲曰、大茶毒鼓、轟天震地、轉腦回頭、橫屍萬里、無用然之、翁平生未嘗以言徇物、以色假人。

自牧謙禪師、西蜀人、溫雅博喻、雙徑蒙庵之嗣、入閩住鳳山、遷鼓山、時高州文學劉鎭叔安、謫居最久、間往咨參、一日問曰、某甲參得禪麼、曰人人有分、曰卽心是佛、如何是非心非佛、曰不許夜行、投明須到、劉因此留心佛法、自牧後在雪峯、室中問學者、雪峯有句子、僧曰、請和尚道、自牧以拄杖趕出、如此爲人、契機者少。

妙峰善禪師、住杭之靈隱、丞相青山鄭公因天童闕人、奉勉其行、答以年踰耄矣、尙夜行不休乎、述二偈辭免、一曰、剝啄敲門定眼開、驚傳鈞諭入山來、倚岩枯木摧殘甚、空費陽和到一回、二曰、鼻繩掣斷已多年、老倒松楸澗草邊、相國恩波如海濶、何妨乞與日高眠、嘗拈魯祖見僧

面壁云、費力不少、瑞岩主人翁云、卽今亦不少、妙峰晚年、足不越限、晝夜惟擁褚衾兀坐、垂示語言、皆發藥人、鄭公題其錄云、師於佛法中、橫騖直貫、曾無留難、如方圓器滿貯虛空、不可執着、如七寶山湧智惠泉、悉具法味、可謂知言矣。

慶元府天童如淨禪師、頎然豪爽、叢林號曰淨長、禮眞歇塔、偈云、歇盡眞空透活機、兒孫相繼命如絲、而今倒指空腸斷、杜宇血啼花上枝、示衆云、心念紛飛、如何措手、趙州狗子、佛性無、只個無字、鐵掃帚、掃處紛飛多、紛飛多處掃、轉掃轉多、掃不得處、拚命掃、晝夜堅起脊梁、勇猛切莫放倒、忽然掃破太虛空、千差盡豁通、宗趣可知矣、有問瑞世嗣誰、曰如淨、問道號謂何、曰淨長、後於太白山、感疾退席、下涅槃堂、始大哭爲鑑足庵、燒香入寂、時侍者告以法堂寶蓋鏡墮於座上、曰鏡枯禪至矣。如其言。

高原泉禪師、令聞素著、瑞世慶元梨洲、有問、囊錐已露、至寶難藏、四衆側聆、願聞法要、曰截舌有分、問恁麼則一句超今古、禪徒息萬機、曰又恁麼去也、問如何是梨洲境、曰猨啼古木、月照高峰、問如何是境中人、曰匙挑不上、問人境已蒙師指示、向上宗乘事若何、曰且待驢年、四衆拭目傾耳。

空叟印禪師、詣育王、時佛照法席鼎盛、頌善財者累紙、空叟有云、童子纔生、河沙福聚、凜然氣字如王、覺城東際、智願已全彰、展轉參尋知識、不移寸步、歷遍南方、無窮事風高月冷、煙水渺茫茫、一聲彈指處、毗盧樓閣門戶盡開張、塵塵頓現、法法圓常、都是夢中境界、惺惺後滿面慚惶、歸來也重遭摩頂、□□雪上更加霜、衆推之、後空叟道益聞著、亦住育王。

浙翁佛心禪師云、空東山答余才茂借脚書、眞閣老子殿前一本赦書也、今之諸方、道眼不知若何、果能受持此書、則他日大有得力處、書云、空本巖穴間人、今雖作長老、只是前日空上座、常住有無、一付知事、豈敢涉私、盜用常住、結好貴人、或用資給俗家、或用接陪知己、今之帶角披毛、償所負者、皆此等人也、先佛明言、可不懼哉、願公勿置我於此輩中、則公之入帝鄉、求好事、前途未易量也、逆耳之言、不知以爲如何、佛心每以此、擧似於人、璨隱山亦云、常住金穀除供衆之外、幾如鴆毒、住持人與司其出入者、纔霑着、則通身潰爛、律部載之詳矣、古人將錢就庫下回生薑、煎藥、蓋可見、今之踞方丈者、非特括衆人鉢盂中物、以恣口腹、且將以追陪自己、非泛人情、又其甚則剜去、搜買珍奇、廣作人情、冀遷大刹、只恐他日鐵面閻老子、與計算哉、因併錄之。

臨安府淨慈退谷雲禪師、初在鐵庵一大禪會中、爲侍者、値其開室、問、國師三喚侍者、谷以手揜其口、又問、侍者三應、又作麼生、谷拂袖徑出、後得佛照印可、且謂其機語如雪堂行、及得旨住明之育王、時佛照居東庵、父子相從之樂、昔未有也、退谷生福州閩清黃氏。

寂照明首座、孤風超絕、生緣福州長樂、多見宗匠、嘗有頌曰、大事未明喪考妣、既明雪上又加霜、曾聞三峽猿啼苦、鐵作心肝也斷腸、晚自浙歸閩幹漏澤園、頌曰、劒及翻身能有幾、無端平地死人多、從頭喚起重烹過、未免依然埋沒他、可見其人矣、不肯出世、終老於白雲古寺閑房中、樞相鄭公性之尙書陳公韡居私第、嘗躬詣而問、道焉瑩雲臥謂臨卭復首座、曾見尊宿來、演祖待以父執、始終一節、亦足以增懿緇林、豈特高踞雄席、然後爲榮哉、吾於寂照亦云。

湖翁佛心禪師、雙徑法席、人物林立、嘗撫膝云、爾向這裏下得轉語、不空過一夏、有云、覿面相呈、更無回互、有云、疑殺天下人、皆被叱、謂不可趂口快、佛智老人、時在侍旁、緘嘿而已、老人後爲拈香云、千鈞上絃、當時遼天索價、一言道盡、不合貼地相酬、只今驀路相逢、諱不可得避、亦無由禮拜燒香、將醋就錯、何故覆水難收、又云、說大脫空、用無轉智、當時打向面前過、驀被以手一畫、三十年悔不可追、恨不可消、曲不可直、只今白浪堆中、我遮一鍬、插香云、莫恠拈出、大宗師家、拈出一絲毫、牽動四世界、更無一絲毫疎漏處、此語皆是相見時話、入道時之因緣也。

泉州法石隱山璨禪師、上堂云、德山棒如雨點、臨濟喝似雷奔、隱山當時若見、一時趂出三門、爲什麼如此、當門不用栽荊棘、後代兒孫惹着衣、佛涅槃云、我佛本不降生、今日何曾入滅、若道非生非滅、也是眼中着屑、汝諸人、瞥不瞥、畢竟喚今朝作甚麼時節、一度風來一度寒、一回飲水一回嘘、請看陌上桃花紅、盡是離人眼中血、垂示類此、隱山泉之晉江人、性褊躁、好貶剝、自謂叢林一害、瑞世下生、嗣涼峰空退庵、此庵乃其大父云。

高原泉禪師、住梨洲荒陋寂寥、無準爲首座、荊叟爲維那、雙杉在會下、原夜坐、舉江月照松風吹、永夜清宵何所爲、荊叟曰、覿着氷河連底凍、雙杉曰、牽來好與頂門槌、原默然、壯歲時、已得奇退庵許與矣。

丞相蔣公芾居建昌、時號莫齋居士、婁詣光孝寺、問道於璨隱山、聞舉狗子無佛性話、擬下語、被喝住、呈偈曰、眼前一座鐵壁、拄天拄地黑漆、今朝瓦解氷消、一段孤明歷歷、又被喝出、後請益、得示以清素侍者語、兜率悅、可能入佛、不能入魔、渙然氷釋、述偈曰、翻着襴衫倒着靴、橫拈堅放摠由他、入魔入佛尋常事、一段風流出當家、又曰、婬坊酒肆飽經過、一曲尊前囉哩囉、打鼓看來君不會、大家把手上高坡、隱山深肯之、卽陞堂告衆、有隱山撾鼓爲證明、千古叢林、一盛事之句。

天目禮禪師、在鄮峰、時佛照開室舉、風動幡動、者僧如何、答曰、物見主、眼卓竪、照曰、不是風動、不是幡動、甚處見祖師、答曰、揭翻腦蓋、印空叟隨、後入室、照復舉前話、叟答曰、貪觀白浪、失却手中橈、照曰、老老大大、作者箇語話、儞看適來後生子、下此一轉語、天目在佛照會中、依止三年、因不受書狀職、過靈嵓時、癡鈍亦舉前話、答亦如前、鈍曰、此語只育王會中用得、我者裏飯水也未到、儞喫在、烏虖、二大老接人如此、宜爲萬世師也。

少室睦禪師、在瑞嵓、偶鳳山礪老持松源像請贊、贊曰、開口不在舌頭上、話墮也、大力量人、擡脚不起、未爲分外、平生用者些兒、却被鳳山捉敗、瑞嵓與麽贊揚、也是送賊入界、少室宗眼端正類此、示人非徒從事於語言之末也。

本眞書記、福唐朱氏子、棄儒依資福山主祝髮、出嶺遍參叢席、有特立操行、晚得天童慈航印記、卽歸里之松溪卓庵居焉、奉己甚約、食僅足而已、嵓谷幽遠、水木清華、眇然絕俗離世、若將終身、有偈曰、茆庵卜築向溪頭、踪跡惟饒野鹿參、昨夜滿簷霜月白、最憐松葉落鬚髮、又曰、高懸櫻拂與節枝、覿面相呈早費辭、此外更無親切句、不知若箇解尋思、豈非高尚其志者歟、或議其不得激發後學爲不幸、予謂、以櫻拂節枝示人、止此足矣、又何必別求語言哉。

秀嵓瑞禪師曰、大慧和尚擧、趙州一日在佛殿上、見文遠禮佛、以拄杖打一下、遠云、禮佛也是

好事、州云、好事不、如、無、頌曰、文遠脩行不着、空、時時瞻禮紫金容、趙州拄杖雖然短、腦後圓光又一重、大圓見曰、妙喜作用、不、減、嵓頭死心、肯來商榷、可、謂光前絕後、今爲改末句、必來、但恐不、得相見、矣、改云、劃破華山千萬重、大慧聞、之、果欲、詣見、而大圓已遷化、只題其錄云、七佛命脈諸祖眼睛、但看此錄、一切現成、二老相敬如此、今無復見其人、氣燄猶迫人、烏虖、二大老故無復見秀嵓亦已矣、因錄而識、之、有、能於筆語外着得隻眼、庶免三人證、龜也。

# 枯崖和尚漫錄卷上 終



# 枯崖和尚漫錄卷中

祖賢首座、撫之金溪人、人品高妙、得法於癡鈍、久留閩、南欲歸鄉、至義江、有感而反、焚綾牒、與歸竟嘉編茅、隱於莆之土囊山、嘉既赴福帥長生之招、卽遷于黃山篠塘、自朽土室、僅容膝、扁曰樂此、遠近者聞、之、始供以粟焉、居二十年如一日、郡侯曾公用虎、高其風、以囊山慈壽虛、席、禮請不赴、嘗譔十不去、以見意、末章云、十不去、止此便爲諸佛土、假饒天子詔書來、向道不、須生事、故、復齋陳公宓、與論持敬二字、答云、敬足矣、何用持爲、遷化後、王堂林公希逸祭以文、畧曰、六經之外、得此良友、余近與方劉諸公、遊石室、晚造其故廬、月色清朗、松聲蕭騷、慨然想見其高標逸致也。

鐵鞭韶禪師、直諒不、窺密、福州縣亭人也、赴溫陵光孝請、開堂祝聖、拈香罷乃云、喚什麼作第一義、莫、有、旁不、甘者、麽、出來道看、時有僧出問、頂顙摩醯眼卓竪、拈拄杖、卓一下云、住住、今日開堂、不、比、尋常佛事、設問答到彌勒下生、鉤鎖連環、盛、水不、漏、也只是鼓粥飯氣、於自己了沒交涉、所以道、問不、在、答處、答不、在、問處、問答交馳、如青天轟霹靂、看者不、容、眨眼、那堪更向言中、定、旨、句下明、宗、大似、緣、木求、魚、守、株待、兎、殊不、知、我宗無語句、亦無一法與、人、這裏徹去、皇恩佛恩一時報畢、其或未、然、更爲錦上添、花、復卓、拄杖、下座、有、八會錄、行、世、審、聲以知、音、審、音以知、樂。

覺庵趙贊府、看釋書有省、休官依翠微、乞名惟覺、裂冠薙髮、具毗尼、後居山、有偈曰、氣衰力憊不堪言、得意濃時便息肩、棄俗棄官兼棄欲、由人由命更由天、飢來爛煮黃粮飯、困後和衣白日眠、山鳥一聲驚夢覺、不知今夕是何年、可謂幽人貞吉、中不自亂也。

破庵先禪師嘗曰、今時兄弟、做工夫不索性、所以不見效驗、我行脚時、密庵住衢川烏巨山、我在彼中、充知客、解職了、往見水庵于雙林、兩廊長、我每夜不睡、從東廊行到西廊、提起話頭、做工夫、行三兩匝了、歸堂中、打一着、上下間兄弟、一似爛冬瓜相似、覷了自思量道、我若不着便、也似者一堂爛冬瓜、討什麼椀子、我在那時、做得些工夫、室中也開得口、只是命根未斷、心下畢竟不穩、遂起單至平江、萬壽僧堂前歇、那時是灯止庵住萬壽、是無鼻孔長老、粥罷打鼓入室、我心裏欺他不去、有同行去入室了、却來問我、儞去入室、也未、我謾同行云、我去入室了、又却自思量道、他是我同行、我謾他、心下未穩當、漸要歸川去、却是如何、如此思量、心中躁悶、遂行入僧堂後去、忽然舉頭見照堂二字、從前疑情頓釋、迤邐上蔣山、再見密庵、室中無不契合、破庵參禪如韓信軍孤在水上、必死無二志、所以勝也。

秀巖瑞禪師、上堂舉、馬祖日面月面、後來水庵頌云、日面月面、胡來漢現、胡漢不來、清光一片、拈云、見馬大師未可、秀巖也有頌、日面月面、磚頭瓦片、踢倒淨缾、減動門扇、舉老宿一夏不與僧說話語、拈云、者僧正是飯籮裏餓死漢、老宿着甚死急、恁麼見解、喚來痛打一頓、趂出三門、爲甚如此、爲人須爲徹、殺人須見血、烏虖、爲拙庵拈出底、木庵處得來、語在叢林、話在人口、雖然要見秀巖、猶隔海在。

江西雲臥瑩庵主曰、徑山謙首座歸建陽、結茅于仙洲山、聞其風者、悅而歸之、如曾侍郎天游、呂舍人居仁、劉寶學彥脩、朱提刑元晦、以書牘問道、時至山中、有答元晦、其略曰、十二時中、有事時、隨事應變、無事時、便回頭、向這一念子上、提撕狗子還有佛性也無、趙州云無、將這話頭、只管提撕、不要思量、不要穿鑿、不要生知見、不要强承當、如合眼趂黃河、莫問趂得過趂不過、盡十二分氣力、打一趂、若眞箇趂得、這一趂、便百了千當也、若趂未過、但管趂莫論得失、莫顧危亡、勇猛向前、更休擬議、若遲疑動念、便沒交涉也、謙嘗從劉寶學請、住建之開善、向與雲臥、同侍大慧、最久、劉朔齋云、文公朱夫子、初問道延平、篋中所携、惟孟子一冊、大慧語錄一部耳。

臨安府淨慈北磵簡禪師、贊茶陵郁云、進步竿頭顛斷橋、太虛凸處水天凹、古今喫顛人多少、不似閣梨這一交、贊靈照女云、屋裏橫機抗老爺、門前斂手揖丹霞、娘生爺養好兒女、也有許多無賴查、叢林多誦之、淳祐丙午三月晦日、書偈云、平生無伎倆、赤脚走須彌、一步闊一步、三更過鐵圍、且曰、翌日可行矣、至期趺坐而滅、中書舍人程公許、奠以文、略曰、踞南山頂、垂綸千尺、湖水渺瀰、魚寒不食、示病及期、體癯神逸、維莫之春、參徒雲集、師顧而笑、吾歸有日、題四句偈、玆爲絕筆、及孟夏朔、泊然入寂、師昔所證、本自緜密、末後一着、乃見眞實、是爲實錄、噫老磵神情秀特、博學强記、而喜爲文、得法於東庵佛照、昔甘露滅瑩仲溫、皆見地明白、其可以文字多之、老磵委順時、尤殊特若此。

參預眞文忠公德秀、與雙徑崧少林、同里閈、相與講道、翰帖往來、無歲無之、一帖云、甲子乙丑年間、在延平、嘗夢至一所、十六羅漢在焉、其中相好端嚴者、忽開目相視微笑曰、得大堅固力、

俄而天樂浮空而至音節之妙絕異世間遂寤今將三十載佩服不忘近於夢筆得閑山一片築小庵其上欲以大堅固力爲銘擬得吾師一偈以開發蒙滯等覺亦舊遊也其能忘情乎余見此帖於徑山三塔庵烏虖西山可謂三十年一夢而覺矣欲銘大堅固力寂語作麼何必佛行重說偈言。

慶元府小靈隱柏巖凝禪師性簡亢無所交接乃息庵法嗣住金文日提綱云盡大地是箇住處不用强安排盡大地是箇當人何須求影迹東邊住喚作東邊長老西邊住喚作西邊長老翻來覆去橫倒竪直一月之間做出許多不唧唧噜雖然儞要見凝上座又却在那邊更那邊儞不要見又却在儞諸人眉毛眼睫上如是而住如是而說一箇舌頭分作兩橛且道那箇舌頭顧左右云了大抵步驟熟如箭雲汗血無蹇態也。

秀巖瑞禪師與無用松源入閩見乾元木庵問近離甚處曰鼓山曰恰欲得鼓山信將得來麼巖展兩手庵曰參堂去俾其執庫務亦不憚勞庵陰奇之洗衣次庵曰作什麼巖提起衣庵曰答話也不會巖擬議庵便掌忽省發後住明之育王爲佛照嗣庵聞之寄以偈曰媽媽年來齒髮疎心心只是念奴奴一從嫁與潘郎後記得從前梳洗無余昔預石門會和尚法席於九峰聞其言如此。

鐵鞭韶禪師剛正孤硬以大法爲重任住吳門承天廣架僧堂以延衲子室中舉狗子佛性話驗之少有契者元雙杉時在會中投偈云狗子無佛性一正一切正寰中天子勑塞外將軍令鐵鞭領之。

289598

笑庵悟禪師周氏居蘇之常熟久侍才無等復與松源同扣密庵密庵曰爾平生見處試語我來隨通所見曰未在參堂去笑庵後於僧堂中見剔燈省悟室中橫機無所讓頌德山入門便棒云倒嶽傾湫與麼來小根魔子謾疑猜神駒一躍三千界空說門前下馬臺密庵聞而喜昔松源在衆時疎於世事笑庵微細皆任責及源住靈隱庵在里之靈巖具舟抵杭訪之到門三日方得相見無慚色後源赴法華招又以靈隱力舉自代前輩所見異於流俗與今人一語或訛終身爲恨者大有逕庭也併書此爲後來龜鑑。

笑翁堪禪師門風壁立氣蓋諸方初住台之報恩台舊無律宗師與郡守齊公碩議合十寺爲一築壇唱南山開遮持犯之法風厲後學及遷平江虎丘閩帥王公居安復以雪峰招之且貽書廟堂謂南方佛法不競須賴作興得　旨乃行未幾詔住杭之靈隱忽僧持釋迦出山像請贊即書云半夜逾城全無背重端坐六年久靜思動衲卷寒雲下雪山與人相見又何顏。

松源岳禪師由虎丘遷靈隱老而聩叢林呼爲老聩翁以所傳白雲端和尚法衣亟欲付人垂三轉語云開口不在舌頭上大力量人爲什麼擡脚不起大力量人爲什麼脚根下紅線不斷而無契者留衣塔下曰三十年後有我家子孫來住此山以此付之遂告寂石溪後亦由虎丘奉　旨而至徑拈衣云大庾嶺頭黃梅夜半爭之不足讓之有餘而今公案現成不免將錯就錯捧起衣云敢問此衣白雲傳來松源留下明什麼邊事惱亂春風卒未休今佛海留於雙徑傳衣庵其復有所待耶。

絕照鑒禪師初住里之乾元佛生日上堂云老鼠雖無三寸光徧天徧地起災殃命根落在乾

元手、消得當頭一杓湯、由是名播叢林、後遷鼓山、學者瀾趨雲萃、晚年玉几論薦、惜乎命將下而寂矣、絕照福州人、嗣訥庵。

肯庵圓悟禪師、建寧人、天姿閑暇、居武夷山、餘十年、因聽牛歌悟道、嘗有偈云、山中住不識、張三幷李四、只收松栗當齋粮、靜聽嶺猿啼古樹、瑞世於福唐大目禪苑、嘗授儒學於晦庵朱文公、與師辛公棄疾爲同門友、因以黃檗延之、入寺有讒其行李數十檐、辛聞之、蹙然不樂、後過都運黃公瓌、同訪之、且曰、有道之士、三衣外無長物、多多益辨、不爲道人累乎、庵笑不答、徐而共觀諸老手帖、因盡揭籠篋示之、皆古德墨蹟、紫陽書翰、辛有慚色。

寒齋高士林公公遇字養正、棄官無經世意、惟與山林負大法者、講明此道、寄竹溪林公希逸云、此事何須向人說、有耳如聾眞祕訣、此事何須向人語、有口如瘖眞活句、盲聾瘖啞是仙方、箇中別有長生路、長生路、亦無朝亦無暮、亦無今亦無古、亦無萬象與森羅、亦無山河幷國土、長生路在何許、不待丹成自輕舉、只在目前無尋處、要尋只在無尋處、寒齋所著述、心鑑錄有補於吾敎、後村劉公銘其墓云、猗公所立、與天壤俱、起乎晝前、復于性初、以爲釋耶、則踐乎實、以爲老耶、不放乎虛、探千古之祕寶、而獨得叢一世之苦淡、以自娛、余所述者、迹之區區、若君之心、不可擬摹、有欲求之、于君之書、此名言也、勿問元吉。

東山源禪師、初在癡鈍室中、聞舉如何是大道之源、下一喝、述偈曰、大道之源、立問端、老魔徹底自欺瞞、誰知家醜難遮蔽、一喝當陽雷破山、久從老佛心於徑山、證徹閫域、歸閩投以偈曰、揭翻腦蓋笑談間、槃走珠兮珠走槃、一段風光攔不住、堂堂擺手出長安、時凌霄會中、人物如林、清鐵脚、阡都寺、咸在焉、皆趂韻餞之、後出世嗣佛心、東山與參與徐公清叟爲方外友、公帥閩日、以雪峰招致、離蘇之虎丘、至建上、順寂于光孝、悲夫。

雙杉元禪師、戒行嚴潔、住秀之天寧、小參舉應庵室中問密庵、如何是正法眼、庵云、破沙盆、拈云、者些說話、如三叉路口多年一條爛木頭、風吹日炙、誰敢覷着、忽被箇健兒耿將去、上面元來有官印、且道印文在什麼處、五陵公子少年時、得意春風躍馬蹄、不惜黃金爲彈子、海棠花下打黃鸝、薰石田特稱之、雙杉生於福州福清鄭氏、先有溫蘿庵、後有密庵、繼而遂僻雙杉也、遂僻卽其俗門叔父、法門落髮師、清如源者、見趣操行、尤卓然、鄭氏所出尊宿、可謂盛哉。

枯禪鏡禪師、清苦古朴、太師史衞王、尤致敬之、初接見、卽問曰、疎山曹家女、始末如何、枯禪厲聲曰、相公與麼問、失却一隻眼、然則祖師垂示、可得而箋注耶、左右愕然、王笑而已、遂進席徵詰論辯、至夜分、方散、惜當時無人與記錄耳、枯禪每見求掛搭者、則先令撤去白領、剪除濶袖、方許相看。

鼇峰定禪師、福之長溪人、嘗過毗陵時、思庵依無　值開堂、擧釋迦彌勒是他奴、他是何誰、定曰、不會、又擧似之、又曰、不會、無際擕住曰、一不會二不會、定失聲答曰、泥團土塊、後於永嘉龍翔文絕象會中分坐、無際在明之大白、詒書趣歸、昔佛智老師、亦侍無際、故嘗言之。

安吉州道場別浦舟禪師、師事老佛心、後爲空叟嗣、佛成道上堂云、釋迦老子二千年、摩竭陁國自云、明星見時、豁然悟道、胡人多詐、知他是實是虛、後來眞淨道、今有克文比丘、於東震旦中、赫日見時、又悟箇什麼、關西人沒頭腦、爭知是有是無、川僧開口見膽、一句是一句、拍床云、

是那一句、曾經巴峽猨啼苦、不待三聲也斷腸、又云、百丈三日耳聾、馬祖有過無功、臨濟三遭痛棒、黃檗有始無終、虎丘不行棒不行喝、成蛇底成龍、拍床云、不見道、鶯遷楊柳岸、蝶舞海棠風、見處穩密、拈出示人、如春行花、月在水、了無朕跡、空叟之門、嶄然而絕出者也、老藏云、別浦嘉定間、與癡絕並驅爭先、惟壽不及癡絕、烏虖惜哉。

雙杉元禪師、乃柔萬庵之嗣、國史陳公貴謙與弟參預文定公貴誼、於武康龍山、瘦雙杉庵館焉、答國史公編宗鏡書云、正欲詣台屏、恭致問訊、藻翰寵臨、伏審深入宗鏡三昧、辯才機用、恣無畏、就揭所錄數板、聯珠貫璧、眞擇乳鵝王眼腦、深用降歎、但恐日新之證、將棄舊習、於此去取或未一定、如欲啓發多聞强識、使知聖賢地位、不容以智力可挾、用此爲致道之具、求無入非自得之妙、康時濟物、浩然無窮、是以用佛爲眞儒之効也、世有局於見聞者、主張門戶者、心是而口非之、不得其詳、意在愚人、而不知其自欺、眞所謂可憐憫者、觀此亦可意解也、室中三轉語、禪和子窮平生工夫、如應舉三場文字、相似、通日夜爲之、猶恐未暇、豈是好趁難而捨易、棄彼而取此、蓋不專工體究、未到大休歇田地、徒成知見解會、障自己眼、倒行逆施、前輩有言、若眞箇要打透此事、切不可看此錄、將來意識先行、未舉便會、更無可疑、失佛方便、則無入頭處、雖曰利之、其實爲害、陳操尚書、是个參禪樣子、對雲門敎意、尚自拈出、口欲言而詞喪、心欲緣而慮忘、被雲門一期籍沒了、家財是也、今居士要爲法施大檀越、須金圈栗棘鐵酸餡子、用事勿引人入草窠、反增其粘縛、如何、因筆忉怛、稍暇當請、拄杖以謝多口之罪、國史公、因此開悟。

西山亮禪師、頌趙州勘婆子云、飢時定聞飢、飽時定聞飽、婆子在臺山、趙州勘破了、遯庵可之、出世金陵清眞、提唱語言、發若機括、寄天童癡絕云、潦倒西山百不能、隨身賴有一枝藤、東撐西拄消閑日、甘作荒山小院僧、住四明小靈隱而終、西山蜀人、性方雅不喜、與俗流交、無準叙其語、稱爲本色宗師者也。

無準佛鑑圓照範禪師、少穎悟、以機辯自將、謁蒙庵于雙徑、庵問、何處人事、曰劒州人、問還將得劒來麽、佛鑑下一喝、庵曰、烏頭子、也括噪人、佛鑑髮黑、時呼爲烏頭、後隨侍破庵、因謙道者入方丈、請益、躡蹤而往、破庵見謙至、便問、近日胡孫子如何、謙曰、胡孫捉不住、破庵曰、用捉作麽、佛鑑聞之、胷次豁然。

井山密禪師、至節小參云、正令全提、十方一團鐵、冥樞坐斷、大地絕行蹤、不是禪、不是道、摩竭提國三七日中、鐵壁鐵壁、少林山下、九年冷坐、浣盆浣盆、自餘臨濟德山、摠是衆盲摸象、一向與麽、荒草連天、拂子俯徇、時宜曲開方便、以拂子劃云、一劃爲陽、又劃云、一劃爲陰、陰陽交感、歲功乃成、忽若乾坤窄、乾坤窄、日月星辰一時黑、且道是陽耶、是陰耶、擲下拂子云、待石筍抽條、卽向汝道、井山乃枯禪俗門之姪、法門之嗣子也、自幼至長、羽翼之、如鷹兒出窠、便有沖天志、明師出賢資、信矣、恨不能盡其設施、而早世。

建康府保寧卽庵覺禪師、嘗與無準同參破庵、後因無準山居、寄以偈云、吸松風飽山色、浩養未妨清徹骨、夢覺千嵓杳靄分、與來一笑乾坤窄、霽霞凝雪翠滴滴、泉瀉斷崖聲瀝瀝、故人斯樂我何知、遐跂白雲抱幽石、送高源往梨洲云、小玉聲中認得些、至今兩眼尚眯麻、阿師不雪

鄉人耻、鼎鼎敎誰辨正邪、蜀諸老如高源、卽庵、石田、無準、道價皆爲一時之重、猗歟盛哉。

慶元府雪竇無相範禪師、參松源、開法焦山、龍象駢集、爲新雪竇、無準上堂、擧楊岐和尙出世、陞座罷、九峯勤和尙、握其手曰、且喜得箇同參、岐云、如何是同參事、峰云、楊岐牽犂、九峰拽耙、岐云、正恁麽時、楊岐在前、九峰在前、峰擬議、岐云、將謂同參、元來不是、頌云、楊岐左眼半斤、九峰右眼八兩、一對無孔鐵鎚、至今收拾不上、叢林咸以大範呼之、蓋與無準行道同一時也、赴雪竇請、遂遷寂、先是紹定辛卯歲旦上堂云、春來萬彙悉皆新、一段風光畫不成、無事妙高行一轉、不知誰是境中人、明日齋退巡寮、登妙高峰、且云、會吾意否、又明日赴堂喫粥罷、索湯沐浴、端坐而寂、衆議峰頂建窣堵波、見於佛鑑所記云。

平江府雙塔無明性禪師、性端潔疾詖謬、頌開口不在舌頭上、云、明脩棧道、暗度陳倉、刻舟猶覓劒、夜雨過瀟湘、大力量人、擡脚不起、云、只許老胡知、不許老胡會、白雲盡處是青山、行人更在青山外、大力量人、脚下紅線不斷、云、放兩拋三、瞞神譸鬼、換盆換盆、誰不識、頌趙州見二庵主云、南枝向暖北枝寒、一種春風有兩般、寄語高樓莫吹笛、大家留取倚欄看、松源首肯之、無明一生眠食、不離淸衆、老益精進、惟此一節亦可書、況衲子資其決擇乎。

柏岩山禪師、福之玉融林氏子、飫遊叢林、所至輒前席、題畫水波壁云、波浪鼓時無點滴、風濤息處卽瀰漫、明牕紙罅休尋覓、壁上行船方好看、同輩皆稱、歸里住洋嶼雲門、嗣息庵、砥節礪行、衆所畏服。

中巖寂禪師、天性孤高、示衆云、過去諸如來、塡溝塞壑、現在諸菩薩、裩無頭褲無口、未來修學人、推不向前、拽不向後、若也會得、同坑無異土、若也不會、君向西秦、我之東魯、又云、行亦禪坐亦禪、終日擧頭不見天、出乎爾反乎爾、認着依然還不是、拈起則充塞太虛、放下則纖塵不立、不拈起不放下、鎭州蘿蔔頭、趙州索盡遼天價、又云、今朝七月旦、夏制將垂滿、更上曲彔床、擧。則舊公案、擧得全、鼻孔沒半邊、擧不全、舌頭拄梵天、啞、胡亂了也、還我這則公案來、卓拄杖云、切忌咱啄、此數語如含沙工於射影、吾恐見之不中其毒者幾希。

天目禮禪師、訪同參不值偈云、庭前一樹紫荊花、老子何嘗不在家、若謂弟兄相見了、先師門戶隔天涯、爲叢林誦、頌野狐話云、墮落知何處、憑君子細看、潮來無別浦、木落見他山、爲癡鈍喜、嘗與北澗同在佛照會中、相與提衡、故有簡川禮竅之呼、余景定間、寓保寧、始見全錄、天目預老職許可、豈苟然者哉。

短蓬遠禪師、平生不設臥具、晝夜枯坐、得遠鐵檄之稱、開法餘杭永壽、爲明極嗣、中秋寄同輩云、一點孤明徹太虛、體無盈缺任方隅、光含萬象珠懷蚌、影落千江井覷驢、馬祖翫時迷向背、長沙用處絕名摸、衲僧直下忘標旨、吐七呑三總自如、不害筆墨遊戲、後住吳門承天、一日上堂云、承天一句、言前分付、達磨不會、隻履歸去、越宿無疾坐逝、時光東谷亦道行、一力起洞上之宗、無謂無人。

石田薰禪師、眉山彭氏、嘉定間、出世高峰、屋老僧殘、先是高原、無準、卽庵、中嵩、石溪諸老徐之、然後請從、開爐上堂云、高峰門戶如灰冷、多謝諸公有歲寒、些子死柴頭上火、大家着力試吹看、石田住吳門高峰、寥寞荒寒、過於法昌在分寧、時開爐高原宿德咸集、又差勝、以一力撾鼓

爲十八泥人說法也。

臨安府淨慈混源密禪師、天台盧氏子、遊泉南參教忠光晦庵、乃大慧所謂禪狀元者、久而盡得其道、後有示衆云、恁麼恁麼、掘地覓青天、不恁麼不正法眼藏、分付摩訶大迦葉、生錢放債、換水養魚、世尊傳金襴外、別傳何物、倒却門前刹竿着、不行官路、只販私商、內外中間、覓心了不可得、與汝安心竟、家財俱籍沒、磉下獲黃金、德山棒臨濟喝、官拗不如曹拗、情親不如義親、腰間曆日已多時、不用攢龜打瓦、楊岐三脚驢兒、入爾諸人鼻孔、雲門以黑漆竹篦、斷衲僧命根、東勝神州、火發燒着帝釋眉毛、西瞿耶尼人、忍俊不禁、連聲叫屈、初三十一、中九下七、掛起鉢囊、放下柳樑、山河大地、日月星辰、三月安居、諸佛菩薩、畜生驢馬、九句禁足、以大圓覺爲我伽藍、寂滅現前、據款結案、去年梅今歲柳、顏色馨香、依舊、喝但願春風齊着力、一時吹入我門來、閱人語句、須是眼正、究其密說顯說直說曲說、如恒山之雲、開遮自在、須是同一眼觀、同一意見、方不辜負前輩、混源出處、已備于嘉泰普燈、此數語未載、石田謂、受虛中只能詳類事跡、愚謂、聯燈去取、眞不放過也。

國史陳公貴謙、答舍人眞公德秀書曰、承下問禪門事、仰見虛懷樂善之意、顧淺陋、何足以辱此、然敢不以管見陳白、所謂話頭、合看與否、以某觀之、初無定說、若能一念無生、全體是佛、何處別有話頭、只緣多生習氣、背覺合塵、刹那之間、念念起滅、如猴孫拾栗相似、佛祖輩不得已、權設方便、令咬嚼一箇無滋味話頭、意識有所不行、將蜜菓換苦胡蘆、陶汝業識、都無實義、亦如國家兵器、不得已而用之、今時學者、却於話頭上、强生穿鑿、或至逐箇解說、以當事業、遠之遠矣、稜道者二十年、坐破七蒲團、只管看驢事未去、馬事到來、因卷簾大悟、所謂八萬四千關捩子、只消一箇鎖起開、豈在多言也、來教謂、誦佛之言、存佛之心、行佛之行、久久須有得處、如此行履、固不失爲一世之賢者、然禪門一着、又須見徹自己本地風光、方爲究竟、此事雖人人本有、但爲客塵妄想所覆、若不痛加鍛煉、終不明淨、圓覺經云、譬如銷金鑛、金非銷固有、雖復本來金、終以銷成就、蓋謂此也、來教又謂道若不在言語文字上、諸佛諸祖、何故謂留許多經論在世、經是佛言、禪是佛心、初無違背、但世人尋言逐句、沒溺教網、不知有自己一段光明大事、故達磨西來、不立文字、直指人心、見性成佛、謂之教外別傳、非是教外別是一箇道理、只要明了此心、不着教相、今若只誦佛語、而不會歸自己、如人數他珍寶、自無半錢分、又如破布裹眞珠、出門還漏却、縱使於中得小滋味、猶是法愛之見、本分上事、所謂金屑雖貴、落眼成翳、直須打併一切淨盡方有、小分相應也、某向來雖不閱大藏經、然華嚴圓覺維摩等經、誦之亦稍熟矣、其他如傳燈、諸語錄、壽禪師宗鏡錄、皆翫味數十年間、方在屋裏着到、却無暇看經論也、楞伽雖是達磨心宗、亦以句讀難通、不曾深究、要知吾人皆是誠心、非彼世俗自瞞、以資談柄而已、姑以日用驗之、雖無濁惡麁過、然於一切善惡逆順境界上、果能照破、不爲他所移換否、夜睡中夢覺一如否、恐怖顚倒否、疾病而能作得主否、若目前猶有境在、則夢寐未免顚倒、夢寐既顚倒、疾病必不能作得主宰、疾病既作主宰不得、則生死岸頭、必不自在、所謂如人飲水、冷暖自知、待制舍人、於功名鼎盛之時、清修寡慾、留神此道、可謂火中蓮花矣、古人有言、此大丈夫事、非將相之所能爲也、又云、直欲高高峰頂立、深深海底行、更欲深窮遠到、直到不疑之

地來教謂無下手處只此無下手處正是得力處如前書所言靜處鬧處皆着一隻眼看是什麼道理久久純熟自無靜鬧之異其或雜亂紛飛起滅不停却舉一則公案與之厮崖則起滅之心自然頓息照與照者同時寂滅卽是到家也某亦學焉而未至也姑盡吐露如此不必他示恐儒釋不誣者必大恠之待制舍人他日心眼開明亦必大笑而罵之國史公多見宗匠。

大川濟禪師荷法爲事狷介無當意者在四明寶陀有三句語曰寶陀一路來來去去撞着聾頭風波無數曰寶陀一玄掣臂揎拳打失鼻孔蒼天蒼天曰寶陀一妙無人能到喫飯着衣阿屎放尿住冷泉示寂遺囑撒骨不造窣堵說偈曰地水火風先佛記冷灰堆裏無舍利掃向長江白浪中千古萬古第一義眞一代宗師之模楷起澗東之道者也。

山陰淸首座得心法於無用有椒頌云含煙帶露已經秋顆顆通紅氣味周突出眼睛開口笑這回不戀舊枝頭諸方猶能誦不知爲淸所述或載爲無用作非也。

夢堂升禪師舉雪竇示衆云立賓立主好肉剜瘡舉古舉今拋沙撒土直下無事正是無孔鐵鎚別有機關定入無間地獄拈云這般漢須是具緇素眼始得活句下明得堪與佛祖爲師死句下明得自救不了且道雪竇恁麼說話是活句是死句待雪竇出地獄卽向汝道又云達磨倫之有周孔鱗羽之有龍鳳晚年閉戶不喜交接衲子見之如登龍門昔雲蓋智炎禪林便軟暖道心淡薄來參者掉頭不納聞其容入室則堂室爲滿夢堂有之矣。

石田薰禪師曰破庵老和尚言禪和子室中下語總是知見解會如何了得須是向言句外臨時別有意智去離泥水方得我舊時行脚歸去與一同行在合州釣魚掛搭彼中亦是一員前輩尊宿我去入室再三免我不肯舉話及至同行去却不免他但拊膝一下云儞向這裏下轉語看同行無語番番入室只是如此問他同行云難耐這漢番番只如此問我無可應他儞爲我下一轉語老和尚云儞待他今番又如是問儞但將兩指夾鼻聲他一聲便出同行果去入室依所教尊宿云有人教壞儞了信知此事得底人如兩鏡相似自然彼此不相瞞做工夫須是省要處做令到這般田地方堪爲種草。

笑翁堪禪師行丐到泉南休于洛陽與一僕夫山行偶至下生院古屋數十間廊卷風葉寂無人聲惟見一老僧雪頂厖眉負暄于殿陛徐起止客坐於僧堂前破木床曰何所而來翁曰來無所來僧曰因什麼在遮裏翁曰早晨喫白粥如今肚裏飢僧曰不是遮箇道理速道翁指屋角樹曰好一株木得恁麼蒼翠二人大笑相就語移刻始知老僧嘗見無用來雪峰玢侍者言此甚詳惜乎老僧偶忘其名爾。

鐵牛印禪師曰正堂辯和尚與日書記書云若要道行黃龍一宗振舉切不可絺章繪句晃耀於人禪道決不能行古有規草堂近有珪竹庵更有箇洪覺範至今士大夫只喚作文章僧其如奈何如公頌三日耳聾與女子出定非徹見淵源何爲至此勿以小小而礙大法道不獨明辯一己之私諸方宿老皆如此議知我罪我在于此書萬萬察之此語切中今時之病學者不可忽也鐵牛紀載誠有補於後學所謂草堂諸老者見處非不穩當當時亦未免有此議嘉定間薰石田博學能文痛自掩抑以此故也璨隱山初見元城語錄喜甚携歸閱之未竟卽掩卷、

侍僧曰、何初喜之遽棄之、曰衲僧家、念念常在乾屎橛上、尚爲雜用心、況世間議論文章乎、此亦堤防之法、當如是也、先德云、學者漁獵文字語言、正如吹網欲滿、非思卽狂。

閩山居士俞景賢、入浙遍參知識、後見鄧峰用首座問、如何是祖師西來意、用曰、我欲向汝道、汝還信否、士曰、請師道、安敢不信、用曰、汝要緊參禪、不可問西來意、士曰、何也、用曰、西來有甚意、士豁然了解、拂衣便出、用復召曰、見什麼便出去、士回顧、而用喝一喝、士曰、住住、便行、自此歸里、割棄親眷、顒顒獨居嶼上別墅、述偈曰、錯脚游洪歷浙歸、更無一法可思惟、柴門高掩長江上、誰管風濤鼓是非、用見誰庵。

長樂珪藏主曰、向在南北山、與元雙杉同住、見其清約介靜、四威儀中、不忘究竟、己躬大事、日間偏要尋僻寂去處、孤坐兀如枯株、夜間睡夢、亦提起古德話頭、若嚼語喈喈略可辨、可見其做工夫精專純一、那時便知、其必爲法門大器也、每思其人、未嘗不面熱汗下、見於斷橋答雲谷手帖。

嘉興府光孝石室輝禪師、僧問、明招見勝光、纔跨門、光垂一足、意旨如何、室曰、乞兒弄飯椀、問只如招云伎倆已盡、拂袖便行、又且如何、室曰、鈍鳥逆風飛、室久侍明極、後嗣無準、性介烈、貴勢不敢干以私、住慶元彰聖、官府科擾無節、棄去、府公聞之、雖勉留不回矣、嘗掛牌首衆徑山、其語穩實。

國史陳公貴謙、嘗在烏回、與月林觀禪師夜坐、林曰、如何是賓中主、公曰、頭腦相似、林曰、如何是主中賓、公曰、橫按鏌鋣行正令、太平寰宇斬癡頑、復隨聲曰、如何是賓中賓、月林舉手而笑、噫公之機辯、猶可想見也。

無量壽禪師、撫州人、答太師史衞王云、佛法在一切處、奏事書判處、着衣喫飯處、致君澤民處、納士用賢處、第一不可擬心尋覓、纔是如斯、又不得也、嘗首衆鄱陽刁峰、太師以京口金山招之不出、卽遁于隆興咸山、晚年始赴台之瑞嵒請、是亦不失爲比丘之大體者矣。

石田薰禪師曰、既入佛門、喫佛飯、潑天門戶、要人扶持、亦須是箇漢始得、況稱長老、名既如此、實當如何、具向上眼目、得大機用、可以開鑿人天、饒益後學、方不孤負出世二字、就中下機、言之、亦要識因果、勤香火、早晚禪誦不懈、剏新補舊、一切處運眞實心、方有少分相應、不可坐方丈領見成、勞者責人、逸者歸己、瞬息之間、頭白齒黃、前頭大有事在、前輩長老、時節因緣、既至不奈何、劈破面皮、多是住院後、却進得一步、蓋不問院之大小、衆之多寡、千人萬人叢中亦如此、單丁去處亦如此、二六時中、專以此道爲懷、長久工夫不間斷、故能打發、石田此語、可謂毒藥苦口、利於病也。

潭州石霜竹嵒印禪師、隆興府人、道味苦嚴、見者莫不肅然心服、抑齋陳公韡、帥潭日、以龍牙福嚴招致皆不赴、後以石霜請、不得已而應命、僧問、如何是和尚家風、嵒曰、問家風作麼、問、如何是佛法大意、嵒曰、湘潭雲盡暮山出、巴蜀雪消春水來、同門秀孤峰開無門、皆推遜之、平生機鍵縝密、語言粹夷、豈非親見月林之力歟。

大川濟禪師、嘗與弃山侍老佛心、弃山偶外幹、不及請假、洎歸佛心曰、阡兄兩日何往、答曰、未嘗出入、大川適在旁、叱曰、參禪人、何得妄語、弃山面赤汗下、自此尤謹語言、昔昭默受死心責、

亦類此、湛堂歎其皆良器也。

平江府虎丘坳堂濟禪師曰、毛髮爪齒、皮肉筋骨、髓腦、謂之地、唾涕膿血、津液涎沫、痰淚精氣、大小便利、謂之水、暖氣謂之火、動轉謂之風、此四緣假合、而成幼身、須有主宰、始得、何謂主宰、試道看、坳堂蜀人、嗣息庵、與別浦癡絕、頡頏一時、惜壽俱不及癡絕也。

枯崖和尚漫錄卷中終

# 枯崖和尚漫錄卷下

蒙庵聰禪師、嘗歸福州、謁木庵於乾元、木庵問曰、莫是聰侍者麼、蒙庵稱名未竟、木庵曰、此事非聰明智慧之所能辯、如何、蒙庵曰、通身是口吐不出、曰中毒了也、蒙庵曰、莫掩彩他、曰且坐喫茶、茶罷木庵又曰、須知此事不在方冊上、不在口皮邊、蒙庵曰、畢竟在什麼處、曰鐵蒺藜當面擲、蒙庵曰、大好不在口皮邊、庵便打、蒙庵喝一喝而出、蒙庵既得法於其落髮師、光晦庵、以大父事雪堂、復謁木庵於乾元、見密庵於烏巨、水庵於淨慈、誰庵於高亭、始深徹淵奧、是未嘗一日無師友也、欲其法道不昌得可乎。

無準佛鑑範禪師曰、木平參洛浦、便致一問云、一漚未發時如何、浦云、移舟諳水脈、舉棹別波瀾、平不契、却往問盤龍、一漚未發時如何、龍云、移舟不別水、舉棹卽迷源、木平便悟去、後來雲峯悅和尚拈云、木平若向洛浦言下悟去、猶較些子、後來不合向盤龍死水裏浸殺、住後有問、如何是木平、平云、不勞斤斧、果然只坐在這裏、爾道、他恁麼說話、意在於何、多見兄弟往往商量、移舟不別水、舉棹卽迷源、便是死水、如何是木平不勞斤斧、所以坐在遮裏、若恁麼會去、驢年也未夢見、在遮裏須覷見他古人一些子得、人憎處始得、佛鑑此語、發藥學者不淺、晚年唱中峯之道於雙徑、機用迅駛、如擊石火閃電光、卽此語也、不惟英雋鱗集、今上皇帝、亦思問道、紹定六年七月十五日、御修政殿、引見說法、賜徽號金襴、亦此語也、豈有他術哉。

伊嚴玉禪師、嚴州人、初稱名儒、有篤行、中年厭習舉業、專究洛學、忽曰、是不可以了吾事、遂裂縫掖、薙髮學出世法、登徑山謁老佛心、而師事之、久無所契、復往見癡鈍于雪竇、依止三年、一日忽明得卽心卽佛話、故有無毛鷂子貼天飛千山萬山高突兀之句、嘗看劉元城語錄云、所謂禪一字、於六經中有此理、但不謂之禪爾、及達磨西來、此話大行、據此事不容言、則夫子不答是也、且西來意不必問、而話亦不必答、向上老和尚、好玩弄人、故以不答答之、所謂柏樹子者、乃繫驢橛也、後人不知、只守了樹、尋祖師西來意、可一笑也、讀至此處曰、若是當時、得聽此語、這裏正好與一錐。

眞源日禪師曰、馮侍郎濟川、張侍郎子韶、問道於徑山妙喜禪師、師問、隔物不見道時如何、子韶對之曰、今日親覩慈顏、妙喜云、隔、子韶云、雖然如是、瞞他一點不得、妙喜却問濟川、對之曰、不較多、妙喜曰、二公對答、非不親切、但未見道、如有一物、頓在臥房裏、只隔一重壁、爲什麼不見、禪和子說道理、便道、十方無壁落、四面亦無門、隔箇什麼、饒爾眼似銅鈴、也須是悟始得、又曰、禪和子檐板纔下、得轉語、未能依稀彷彿、便言我百了千當、余頃見佛智老人、亦曰、妙喜橫說豎說、切中今時之病、近來欺世盜名、未得謂得、遞相狐媚、更相印受、視東山直下、不爲佛法罪人者幾希、斯言學者並宜識之。

東山源禪師曰、往年出嶺、初上徑山、其時枯禪做首座立僧、破庵西堂掛牌、一時龍象畢集、如石田無準、皆同在衆寮、破庵尋常室中偏愛、擧經行及坐臥、常在於其中、如何是其中事、亦曾去請益他、一詞不措、臨起單却作一頌相送云、換骨抽筋一句、只缺點頭自許、若能自解知非、便見平呑海宇、箇便是爲人、抽了釘拔却楔、自此過平江靈巖、見癡鈍、時茂業海做前堂立僧、今大慈笑翁育王大夢、皆在彼中、同住叢席甚盛、癡鈍常云、詢佛燈四十九日夜、抱露柱悟去、次上蔣山見浙翁、因室中擧卽心是佛、下語云、抱橋柱澡洗、翁云、有什麼快活、下語云、請和尚放下着、披他打出、後復見巖雲巢皎中庵、上衢州祥符、見殺六巖、歷扣二十餘員知識、看來無出應庵下兒孫、直截緊峭、所以宗枝繁衍、烏虖東山於悟門、雖大廓徹、猶如先聖得一善、則拳拳服膺而弗失之矣。

眞源日禪師曰、雪巢和尚入室、問僧不是風動、不是幡動、仁者心動、爾向甚處見六祖、又云、不是風動、不是幡動、仁者心動、是什麼動、發明臨濟之奧旨、證驗衲子之眼目、如運斧臨風之手、其妙在於一斲、爾雪巢當金虜之亂、曾與大慧同渡江者、大慧笠中藏一金釵、爲路費、時時視之、雪巢伺其不意、取而投諸江、大慧愧謝、與之結交、眞源嗣雪巢、以草堂爲大父、故平生語言挺拔有父祖風烈。

隆首座號南山叟、淸源南安人也、壯歲游方、多見尊宿、罷參後禮業海塔、偈曰、業火煎熬業海乾、尙餘劫石影團團、我來笑罷呑聲哭、昔日船從此處翻、掃癡鈍塔、偈曰、生茗帚柄背時貨、樹倒藤枯舊陣圖、一代年來低一代、灼然邪法實難扶、南山與無隱雙杉荆叟、同侍癡鈍爲最久。

西蜀保福晦嵒暉禪師、通泉白氏子、嘗與肇諾庵、道谷源、開掩室、同參松源、密契眞要、歸里三主道場、遠近敬鄉、道化益盛、散夏小參云、大智洞明、十方融會、騎聲蓋色、邁古超今、不可以寂默通、不可以語言造、是以大覺世尊、於摩竭提國、三七日中、無啓口處、及至四稜蹋地、盡力提

持、只道得箇是法非思量、分別之所能解、又道、是法不可示、言辭相寂滅、恁麼揭示、譬若斷崖落石相似、看者不容眨眼、除是一念知非、前後際斷、全體擔荷得去、是眞精進、是名眞法供養如來、一會靈山儼然未散、如是時時禁足、念念護生、又何必九十日中、無繩自縛、然雖如是、衲被蒙頭萬事休、此時山僧都不會、語悉類此、癡絕在蔣山題其錄云、大隨和尚道、我參七十餘員善知識、其大眼目者、只得一二、其他皆具正知見、予三十年前、在叢林中、與晦嵒游、當時具大眼目者、惟老松源一人而已、歲次庚寅仲秋、其徒寶日、携主東林提唱之語、乞予編次、由是開帙縱觀、一字一句、造次顛沛、皆有從上大眼目體裁、非徒從事於語言之末、是知松源之道盡在是矣、烏虖、去古既遠、師法益壞、正知見者、艱其人、大眼目者可知矣、晦嵒雖話行於吾蜀、此錄流播江湖、是可爲斯道之歃盟、若善觀者始信、吾言之不妄、癡絕亦有所激而云。

福州聖泉昌翁淳禪師、天姿軒特、嘗坐夏雪峰、値重架鼇山閣、作偈曰、夜半天崩地陷休、一莖草上現瓊樓、儂雖先後不同步、月幌風櫺一樣愁、時競傳誦、雲巢無準、向嘗與同行、皆誠敬心服、叢林間、禪者與決可否、議論鋒發、戲以禪判官呼之。

潭州大溈泉山初禪師、字子愚、泉州陳氏子、始業儒、稱鄉先生、後因看趙州語有省、剃髮受具、遍參知識、爲永木庵高弟、嘗記里之承天寺僧堂云、承天大僧堂再造、百餘歲、外嚴中蠹、人莫知者、住持了空、揣其壞而新之、施者樂役者悅、不半年而成、擁以照堂、明樓在前、任其勞者道本從賁、經始於秋、迄事於冬、了空於是涓辰率徒、入而居焉、寔嘉定六年、十二月十九日也、比丘太初記、僅九十二字、西山眞公典是郡、見而喜、後在湖南、專書招之、住溈山二十年而寂。

嘯巖蔚禪師示衆云、一年三百六十日、今朝恰是結交時且道、天衣將甚與人分歲、拈拄杖云、一不做二不休、爛烹石虎、活剝泥牛、已是滿盤釘出了也、卓拄杖云、三德六味、施佛及僧、法界有情、普同供養、若是粘牙帶齒漢、應笑家風冷淡、一咬見骨底、自然樂以忘憂、雖然如是、明年更有新條在、惱亂春風、卒未休、嘯巖語言、如毬康長七尺八寸、美音氣好容色、土木形骸、不自藻節、人以爲龍章鳳姿、天質自然也、烏虖、可不敬哉。

癡絕冲禪師曰、予紹熙壬子出峽、夏於公安二聖、時松源倡密庵之道、於饒之薦福、旱暵艱於着衆、適西湖妙果虛席、松源舉雲居首座曹源應選、亦密庵之嗣也、聽其入門提倡有省、遂投誠而住、未幾歸侍司、甲寅夏、曹源有信上龜峰之命、復從其行、留三年出、淛松源由虎丘而遷靈隱、遯庵住華藏、肯堂住淨慈、皆往從之、松源在靈隱、門庭孤峻、八閱月而後得歸堂、凡求掛搭、必呵斥不得親、一日忽曰、我八字打開掛搭他、自是蹉過了、當下始知、昔在龜峰三年、曹源怒罵嬉笑、皆爲人之方便也、自此不疑天下老宿、到與不到瞞我不得、已而隨緣放曠、曹源順寂後、二十年、爲人推出、瓣香不敢忘、凡六處所聚、兄弟不可謂無、只是用翳睛法者少、苦哉吾宗喪矣、今年八十二、時節將至、扶病執筆、直叙得法之由、刻諸龕陰、以昭至信、淳祐十年庚戌歲也、烏虖、癡絕世謂其機用、如盤珠者、且能益鏟光彩、於其師歿後二十年、方瑞世、眞所謂色斯擧矣、翔而後集、搏九萬、可立而竢也、名字不肯入他人夾袋中、其識又過人、所以聲轟一世、起中峯之道、亦驗在此矣、晚以吾宗喪矣爲憂、聞此得不爲痛心者哉。

絕照鑒禪師、因淛歸者、上堂云、相別一何久、相逢只舊時、眉毛分八字、鼻孔大頭垂、諸方鍋兒

大小、杓柄短長、直是瞞他、一點不得、且道、鎮州蘿蔔頭、無底籃盛得幾箇、喝一喝、放待冷來看、上堂云、古佛與露柱、相交第幾機、南山起雲北山下雨、金剛與土地神、揩背一擦骨出、可謂家貧猶自可、路貧愁殺人、汝諸人仰面看天、開口取氣、無非這箇消息、因甚不覺不知、若也知去、三世諸佛、無容身之地、苟或未然、乾元留取口喫飯、卓拄杖下座、大抵宗師家、吐露自是迥別、雖然須是離言說相、方見老絕照用處。

石田薫禪師、初到潭州、禮石霜雷遷塔偈曰、一念慈容元不隔、何須特地肆乖張、平高就下婆心切、惱得雷公一夜忙、名由此彰、見破庵於蘇之穹隆、開室中擧世尊拈花、答曰、焦塼打着連底凍、赤眼撞着火柴頭、庵奇之、石田嘗拈僧問馬祖、如何是西來的的意、雲巢癡絕爲擊節、傳至徑山老佛心、亦云、老僧只得避路。

眞淨大師德英、建溪楊文公億五世女孫、性聰善傳會、依達庵於其四威儀中、有悟入、徑上徑山、投佛照、應對如飛蓬隨風、照許以爲再來毒種、後說法於蘇之朱明、委蛻于常之淨惠、自讚云、自贊贊不出、自畫畫不成、有箇本來相、如何呈似人、活潑潑本無生、鼻孔依然搭上脣、叢林傳之、癡絕歎其錄行世。

月窟清禪師、福州福清人也、少長因覩鄉閭者焚化、乃曰、我願作佛、終不爲猛火所燒、父母訝之、十四歲許以出家、往湖州何山、復庵知爲法器、俾落髮受具、久無所證、不皇寧息、一夜見僧堂中放琉璃燈、省徹、述偈曰、琉璃放下又放起、一點光明常不已、若人識得這光明、姐姐元來是阿姊、謁遯庵于華藏、値開室、欣躍而進、復旋踵曰、我是無罪人、不入這地獄、後與遯庵酬酢、



水乳相合、嘉定間、江右憲使陳公貴謙、以臨汝天寧延之、及赴何山請、道聲益著、平生氣尚剛介、厭諛合苟容、多面折人、叢林爲之肅整、此衛護大法者所當然也。

清烈庵主天台人、居臨安餘杭縣湖西山淡氏庵、年已九十、昏瞳氏瞀、晝夜惟枯坐、將示寂、具蔬飯、會村落百餘人、叙相訣語、同詣山頭、引手長揖、入龕趺坐、說偈云、這漢無知、說是說非、拳頭豎起、佛也難窺、化火自焚、由頂兩肘兩膝、五處熾然而起、三昧火光、五色璀璨、堅固舍利、不可勝計、寶所山主、能詳言之、烏虖、淨性心宗、常光熾然、無壞無雜、周遍法界、故烈公遊戲死生之際、如此奇特、豈非平生履踐之明驗歟、抑提多迦、婆須蜜之發現歟。

諸庵元肇禪師、師範有規、精一於道、因雪上堂云、普賢昨夜呈醜、一片寒光如畫、可憐妙用些兒、引得石人失笑、且道、笑箇什麼、金烏飛上欄干、看儞一場漏逗、頌仲冬嚴寒年年事云、野老年來解放懷、兒孫更以酒相陪、只知好景長時在、不覺老從頭上來、無愧於師矣、昔諸庵與開掩室結伴、參松源、源亦不倦、針箚、故盡得其妙、是不可無賢師友也、足爲後學法。

漢陽軍鳳棲古月祖照禪師、生緣東川廣安趙氏、禮祥甫山主爲落髮師、敏而疾見、遍遊講肆、所至奪席、忽棄所習、歷閩而浙、依肯堂、明得狗子無佛性話、後入破庵室、見其作直視勢、乃咄云、野狐精、破庵劈耳一掌云、畢歷不是者箇道理、又應聲曰、野狐精、破庵又與一掌、示以偈云、一掌幾曾知痛痒、回頭轉腦口喃喃、直饒舌似風雷疾、也落機前第二三、照嘉定間、出世唐興聖果、後在鳳栖、室中垂三句驗學者、一、和煙釣月句、頌云、煙水茫茫釣艇橫、日盈月昃未容分、謝郎不是絲綸客、爭免時人錯見聞、二、截水停輪句、頌云、正眼豁開天地窄、機輪停處海濤乾、

等閑拶出驪珠現、無限邪魔心膽寒、三、不入驢耳句、頌云、儂家一句分三句、見馬逢牛舉似伊、只此更無親切處、眼中聞得始應知、順世時、以後事囑侍郎楊公恢曰、微子孰有知予之心者、楊公爲之、嗟嘻輟食、特敘其語、謂、脊骨之硬、不減破庵、

寒齋林公公遇、晚年遺外世俗、造入宗門、齋傍有隙地、架草庵、以延少林誠公、而風日佳時、必過之、二子同合侍立、聽其談論、余間與果藏主、到庵、亦竊預焉、淳祐丙午九月、公以疾卒于家、且書偈云、五十八年熟睡、且喜今朝瞥地、試將老眼摩挲、只這阿底便是、張橫渠亦云、學者但養心識明淨、自然可見、生死存亡、胷中瑩然無疑、寒翁得之矣、

龍溪聞禪師、初遊方到南康、詣雲居、至半嶺、笠頭爲風掀、沿嶺而下、尋至笠所、有省、住常之保安、孤硬清約、僧問、如何是和尚爲人底句、溪曰、鶉鳩樹上啼、僧曰、某甲不會、溪曰、皷已響堂前、喫飯去、無準謂、徑而直、簡而峭者也、頃龍溪道重一方、衲子嚮臻、堂中被位鱗次、夏丁旱、未解制多起單、溪曰、莫道諸人拄杖子跨跳、後五日、山僧拄杖子、亦跨跳、越五日、沐浴陞堂、歸方丈、坐亡、茶毗迸設利、五色者莫計、保安者宿云。

呂翁、淳禪師、福之石呂人、賦性好奬、稱人善、晚進必悉力薦藉、未開法時、妙語已遍叢林、住慶成踞室云、這裏打開那邊塞路因、甚如此、活膏肓起必死、謝道舊云、劍池邊松峯下、幾回同步至懸崖、牽得驢兒喚作馬、喝云、是何語覇、又云、二月初一、好箇消息、桃花煞紅、李花煞白、劍池邊楊大伯、笑中打失攔腰白、直至如今尋不得、喝云、有甚交涉、又云、冷坐守枯椿、沒轉身底多是違時、失候、一回寒徹骨、親暢快底、十分和氣春風、衲僧家兩眼如鈴、嗔斗昨地、翫弄神機、風雲自異、儘教酹酒燒錢、低頭賀歲、風蕭蕭葉飄飄、墻頭桑條動、柳條最苦、北禪唱村田樂、烹露地牛、波波挈挈、怎奈伊何、惹得人收皮角、笑裏藏刀、咄、清平世界不用干戈、誦此如飲玉粃、自然使薄漿苧、於戲枯禪可謂得其傳矣、了知法乳一源、無異味也、

辟支巖主立堅、三山漁溪人也、初以雙線爲活、倏省覺入應林山中、休粮居于大樹下、妻子追捕之急、遂剪髮過莆之囊山、辟支巖遁焉、後亦從檀施爲僧、淳祐間、郡守林侯希逸、延以龜山陳沈二禪道場、迫而後就、未幾思舊巖、與同道書云、夫稱住持者、作衆楷撫、代佛揚化、素無道德言行之譽、未知仁義禮法之由、草座麻衣、木食磵飲、且以爲愧、推向人前、實何以堪、拂衣徑歸、堅之出處、於緇林、亦有助云。

東谷光禪師、風神清拔、有精識、見祚明極、與實齋蔣公、爲法喜之遊、蔣錄西庵三偈以寄、和酬云、莫道西庵小、了無邊與表、還他親到來、一一方分曉、莫道西庵靜、鐵牛吼聲震、露柱與燈籠、點頭相共應、莫道西庵窮、吞空復吐空、相逢金粟老、臈月皷春風、住靈隱已、罷勸溢然矣、東澗湯公漢、祭以文曰、維東谷師、昂然鶴質、作冷泉主、曾不多日、示病已早、示滅何疾、我雖乍識、開口吐實、問訊殷勤、迹疎情密、忽遣手書、古畫名筆、聿來告行、覽之自失、諦觀點畫、宛然逍遙、是過量人、生死齊一、而我凡情、悲涕爲出、雪滿湖山、羸馬難叱、聊持辨香、往弔其室、一時講道相往來、皆名公卿、是曰同人于門。

蒺藜曇禪師、初居湖州普濟、荒寂如傳舍、夙夜自對聖僧坐禪、凡九年、後住蘇之穹隆、門風愈高峻、尠有入者、室中常云、穹隆有句子、衲子下語不下語、一例打罵、無準時在會中、爲藏主、少

忤被趂出、且曰、教他住徑山、却來見老僧、後無準住徑山、因遺漏行丐吳門、蒺藜猶在虎丘、二老相見、撫掌大笑。

鎮江府金山掩室開禪師、成都人也、遍歷講肆、忽然不樂、欲出嶺了大事、樞使安公、亦勉以偈曰、吾有大患爲有身、是身假合亦非眞、維摩示病元非病、好向南方更問津、室抵番陽東湖、値松源開室、聞舉明眼衲僧因什麽失却鼻孔、言下領解、一日連案僧見其看經、問曰、向後得座披衣、如何爲人、室將經度與僧、僧將經擲于案、室復取朗聲誦、僧休去、嘉泰辛酉、始赴廬山雲居請、未幾剏補金山、如藍田法語、皆參禪捷徑、平生所接人、獨得佛海、大昌松源之道。

雙杉元禪師、蹋室云、報恩方丈、百無一有、贏得爲人、推門入曰、示衆云、衲僧家、不知月之大小、歲之閏餘、喫着三角粽子、便道是端午、忽被報恩移上一日、背他只管半疑半信、今朝依舊點盞茶、與伊濕口、驀然咬破菖蒲、出身冷汗、失聲道啞、福建子、激惱殺人、大衆這箇豈不是通靈藥、三十年後、切忌拈却、嘗入三門、云、鬧市門頭、有箇入處、只爲諸人、見頭了也、新長老、因行不妨掉臂、顧視大衆、云、隨我來也、雙杉只據目前、信手拈來、無非耆黃妙劑、換骨法、起死方、何必他覓哉。

荆叟玨禪師、作夏靈巖、時癡鈍俾其看狗子無佛性話、言下領旨、因與潛無隱通吐、無隱曰、是則是、只是命根未斷、更須出去見人始得、且囑其謁淳庵、叟至華藏、半年無所得、一日忽聞火板響、凝滯釋然、告於淳庵、庵卽鳴鼓開室、叟趂入、庵問、如何是佛、叟曰、野花開滿路、問、如何是法、叟曰、私酒醉人多、問、如何是僧、叟曰、鉢盂口向天、庵曰、未在出去、後叟在癡鈍室中、聞舉如何是佛、震聲答曰、爛冬瓜、且述偈曰、如何是佛爛冬瓜、咬着氷霜透齒牙、根蔕雖然無窖子、一年一度一開花、荆叟處衆時、得無隱雙杉力尤多。

福州雪峯北山信禪師、本州人、性方嚴、機迅敏、初學見之、應對多失、次在鼓山、時有僧相看、山問、近離甚處、僧曰、西禪、山曰、西禪有何言句、僧曰、話墮也、山曰、儞甚處學得遮些子來、僧曰、今日不合觸忤和尚、山拈拄杖便打、僧奪拄杖、軒渠大笑而出、遂請喫茶、傳是老宣首座去矣、初北山同月窟過浙、見遯庵於華藏、月窟先有契證、故山得咨決之後歸里、訪明晦堂、分座鼓山、漳守趙公以夫聞其道、以南寺招之、山遜謝曰、公聞之過、使三反、乃行開堂、爲同行月窟拈香、時論高之。

枯禪鏡禪師、天資淡薄、一無嗜好、惟與衲子、提撕敲磕不倦、有問如何是祖師西來意、枯禪拍禪床一下、今人吐露語言千百、皆不能得到前輩地位、且利害在什麽處會麽。

癡絕冲禪師、嘗赴福州雪峰請、與尙書陳公韡有宿素之雅、招飯私第、以項王像求讚、卽拈筆書云、拔山非力、蓋世非氣、八千子弟、同謀共濟、人皆謂天下大器、不可以力爭、必先仁義、殊不知、天假其手、以誅暴秦、然後使寬仁愛人者之爲帝、吁、其亦有補於斯世、公大奇之、癡絕慧辯恢廓、此特緒餘爾。

介石朋禪師、秦溪人、性高簡、僧曰、寶劍未出匣時如何、答曰、杜鵑啼處花狼藉、僧曰、出匣後如何、答曰、令人長憶李將軍、僧曰、出與未出時如何、答曰、劍去久矣、汝方刻舟、解夏夜參云、九句禁足、網禽宿巢、三月安居、驅狐守塚、向生殺不到處、見三頭六臂掀翻圓覺伽藍、猶是抱樁打

泊浮雲黃山前雙檮樹下、九十日內、風以時雨以時、二六時中、少不添多不減、一年三百六十日、日日安居、時時自恣、圓者自圓、方者自方、長者自長、短者自短、未免淨地揚塵、畢竟如何、大鵬展翅天路遙、巨鼇轉身海水窄、示衆類此、晚年寓杭之冷泉、扁其室曰青山外人、景定間、丞相秋壑賈公、尤崇敬佛法、與奏得旨住淨慈、後淮海亦繼其席、皆起於潤東。

石田薰禪師曰、薰上座住靈隱、亦是不奈何、被人東拶西拶、拶到禪床角頭、回避不及、只得爲祖師、有箇門戶、劈破面皮出來、喚作此地無朱砂、赤土以爲上、雖然看却今時、漸漸赤土也無了、漸漸食泥食土、說着眞箇令人寒心、噫、志於道者、聞此當如何哉。

雙杉元禪師、嘉熙間、乃石田堂中第一座、上丞相書言、朝廷新指揮、買師號金環象簡、不便書云、正月十三日景德靈隱禪寺前堂首座、前住持嘉興府天寧寺僧中元、謹薰沐獻書樞使大丞相國公、竊以爲佛老之教救世計也、其所以與儒道相參於天地間、以能開悟性眞、不墮邪見、其功未易量也、我朝　太宗皇帝嘗曰、釋氏之道、有補教化、　孝宗皇帝亦曰、以佛修心、以老治身、以儒治世、斯可也、張文定謂儒道淡薄、一時聖賢盡歸釋氏、而關洛諸公、亦必玩味釋氏之書、而後能接續洙泗不傳之秘、然教必有主、必有師、國家以度牒、許人承買、凡有僧者各尋師以爲依歸、師苟有道行、則可使迷者悟塞者通、其裨助世教、要非小補、近世貨賂公行、求爲住持者、吾教之罪人、若以例傳、天下之賢者、必深藏遠遁而已、其肯出而爲師、夫師廢則正法微、正法微則邪法熾、以清淨之門、而爲利慾交征之地、非國家之福也、譬如家塾黨庠、不能無師、不求其能傳道、觸惑者爲之、而惟賄是視、則弟子何以仰、孔門之教、亦幾乎熄、佛老之道、何以異是、若謂佛老之徒、身居大厦、日享膏腴、不蠶而衣、不耕而食、爲世所嫉、然天下之人、有無用於世而坐享膏腴之奉者、尤衆、何特僧道、寺觀創立、常住供養、非官與之也、以衆人樂施而與之也、寺觀有田、稅賦尤倍、又有非泛不時之需、正與大家相似、今既買度牒、以錢、免丁又增以錢、官府無絲毫之給、而徒重責其利於無窮、則僧道可謂不幸矣、國家愛惜名器、泛濫、何以勸勵天下、僧道、若以賄得金環象簡、得諸處住持、則囂頑無賴之徒、皆以賄進、何以整齋風俗、況寺觀雖多、其常住闕乏者甚多、縱使此令一行、第能率斂寺觀之大者、其小者亦豈能應其求、如此則所得能幾、況僧道非能自出己財、求爲住持、必將取之寺觀、師徒相殘、常住必壞、所謂膏腴、將見蕪穢、所謂大厦、將見爲丘墟、所謂溫飽、將見爲凍餒、部雖有牒、誰將請之、歲雖有丁、誰將輸之、今日軍需糴本秤提諸劵、無非鬻爵、鬻爵之者、或累於國、牒之多者無病於官、乃循一時不卹之事、剗喪千萬載之利源、殆非理財之長策也、伏覩、近降旨揮、增錢鬻爵、識者病之、事不果行、總所今來陳請、正亦類此、伏望、鈞慈詳酌利害、特有敷奏盡行、寢罷服號之命、令僧道不勝幸甚、伏惟鈞慈俯賜鑒念、不備、時江西粲無文亦有書、先是朝省因總領岳柯奏、乞降紫衣師號二等、賜金環象簡并四字禪師法號、以住大寺觀、每賜服師號綾紙、出賣三百緡、仍附品官條制、非有官不得差注、非有賜服不得住持、此書上事果寢、豈非祕護大法者之用情乎、雙杉住山、能極枯淡、專一行道、若機簡堂、私居雖處暗室、如臨大賓、似證老衲、此亦哲人律己、又見於微細者也、賢矣哉。

枯椿曇禪師、淸介寡言、瘦坐竟日、開法越之大禹寺、亦出潤東、僧問、和尚未見佛心時如何、答

曰、人貧歸道、問、見後如何、答曰、色窮歸皂、嘗舉、現成公案、道得也三十棒、道不得也三十棒、侍僧曰、望師慈悲、開箇方便、答曰、將謂儞是箇出厩良駒、僧有省、枯椿闘人、後住姑蘇虎丘、緇素翕然宗之。

雲巢巖禪師、訓學無倦、且能折節下士、慰藉良厚、儁彥歸之、開爐日示衆云、是句亦刻非句亦剗、雪峯輥毬、睦州檐板、惟有趙州老漢、向火爐頭、拈起香匙火筯、東撥西撥、忽撥得一塊、恰是饒州景德、人家壁角頭、多年破磁碗、三世如來、只管看、運庵曰、此語酷似父翁松源。

南翁明禪師、初入衆時、便能決志參禪、嘗宿天台石橋、遇異僧、指令其見老佛心、翁至太白、投誠預其法席、然室中纔開口便被叱、私自念曰、今生不了、則有來生、已而泪下交頤、後在癡鈍會中、爲侍者、晚參侍立聞鐘鳴、鈍曰、什麼聲、翁曰、鐘聲、鈍曰、聲來耳畔、耳往聲邊、翁薄遽未答、被大叱、汗流浹體、始自語曰、元來浙翁平日叱罵我、皆是徹骨徹髓、鈍尋常只令其看百丈野狐話、一日鈍曰、不落不昧時如何、翁應聲曰、不落不昧鴛鴦一對、水上浮沉、如意自在、鈍撫而印之、翁泉州黃氏子、與隆南山同出嶺者、歸里住溪上、敎忠、至住莆中囊山、方入寂。

西山亮禪師、福州人、枯硬儉約、嘗蓄紙被一張、補粘殆遍、寒暑不易、由鼓山首座寮、赴雲門請、及遷黃檗、未嘗別換、侍僧一夜、潛以絹衾易之、亮驚叫責曰、我鮮福、平生未嘗敢服縑素、況此被相隨三十年矣、其可棄乎、聞者謂、其住山有古人風、後退席入永陽鴈湖山中、與道者刀畊火種、莫知所終。

平江府萬壽訥堂辯禪師、寄同參偈曰、猿與龜交割不開、兄呼弟應似忘懷、及乎話到諸訛處、却道心肝不帶來、時亦稱之、後八坐道場、提倡如阪走丸、眞不忝爲巖獃之子、岳聾之孫也。

介石朋禪師曰、別蜂珍和尚、退鼓山、詣育王、候見大慧、一蒲團於佛殿後、坐七十九日、因秦國太夫人、請大慧陞座、私自喜曰、今日得見必矣、果得一見、語合室中、復投三轉語而去、大慧大奇之、遂與宏智同舉之、住岳林、今寺中有塔存焉、別峰徧身有長毫、時號珍獅子、介石題其墨蹟、略言如此、別峰既得法於佛心才、高踞雄席、道顯著矣、復勇於求、見妙喜、其意謂何、不可與璞懿遲遲其行、同日而語、此所以爲一代宗師之標準也、噫今只欲一後學七十九日俟見尊宿、亦難矣。

守懲庵主莆人、滿年具戒、居囊山下巖、就巖縛屋、聊蔽風雨、父爲郡胥吏、歲給以粮、凡客至不論問佛法世法、皆瞪目視之、有僧問、如何是庵主家風、忽答云、就巖縛屋、掬澗煮糜、問忽有人問西來意、如何祇對、懲反袂哭云、苦屈、觀其雅趣、探其幽旨、非契如之流亞歟。

石溪佛海月禪師曰、余年三十、方再南、聞空叟有言、二十行脚此事休也、初得此語、心甚不平過二聖、座元几案間、見窮谷語、舉雲門話墮、於光明寂照中、便有歇泊地、頭及登甌峯、句日間趂隊入室、先師舉、達磨葬在熊耳、因甚隻履西歸、余對以一點水墨兩處成龍、復一日龍袖拂開、面目全露、遂倒跟四載、然後江之南北、浙之東西、親師友、味甘苦、動轉施爲、未嘗向背、今又三十年、尚未能依稀彷彿、信知此事大不容易、休也二字、眞吾之一知識也、見於示秀上人語、今學者多見之、而不思之、可悲痛也、佛智老師、跋其錄云、石溪未離雲頂、行脚未到處、要須到、既見雲居、開口不得處、要須道、執侍半年、如矢在弦上、知而不自發、至於龍袖拂開、如箭在的

中、發而不自知、雖然早年見松源于北山下、是此話已行、若謂開得口、後方有此錄、腦後猶缺石溪一錐在、烏虖、佛海親證悟法門、於斯見矣、語雖不多、大有控人入處、不可不錄。

王孔大福州徑江人、太學博士宗合猶子、年二十發胄薦上春官、不售、辛亥歲、毅然効古塔主之風、裂冠剪髮、依莆之辟支巖主立堅、修杜多行、已而人有知者、益上絕顛、編茆居焉、父母勸勒不回、甫二載、開泉南明敎忠法道、焚庵詣之、獻頌云、燒却山頭破草庵、不圖遊歷不咨參、依師別也無貪着、博飯栽田也要諳、時敎忠於風亭通衢、開接待庵、孔大泯泯衆底、折節服勞、施主聞之、勸爲大僧、改名惟玉、敎忠亦嘗有偈示之云、老我居山已許時、着衣喫飯只隨宜、子來將謂有奇特、笑倒東家小厮兒、後亦有發明、但不久住世、而寂、初終與祖麟楊道者略相類、烏虖惜哉。

西巖惠禪師示衆云、彌勒眞彌勒、水銀無假、分身千百億、阿魏無眞、長汀子來也、眼生三角、頭峭五嶽、好未必好、惡未必惡、布袋頭開也、隈隈隗隗、骨骨堇堇、輕如毫毛、重如丘山、拈得便擲、拏得便用、竪拂子云、猶是兜率陁天底、只如彌勒未生已前、如何剖露、擊床云、收拾雨聲歸舊樹、放敎秋色到梧桐、題五祖六祖像云、恨殺此頭陁、山磨恨不磨、吾今檐頭重、爲汝種松多、西嵒三十餘年、佛鑑處所得底、拈出示人、無涓滴滲漏、後三十年、點眼藥也。

丞相鄭公淸之、嘗謁妙峰善禪師、坐定、峰曰、相公留心此道、還有歡喜處也無、公曰、且坐喫茶、峰曰、不是心、不是佛、不是物、相公作麼生、公曰、低聲低聲、峰曰、也須子細、公曰、描也描不成、畫也畫不就、峰默然、老師嘗言此、因識之。



福州越山法深禪師、本州人、未落髮時、已有見處、依月窟於梅嵒、得度、浙遊至雙徑、無準一見而器之、俾掌翰墨、議者以其年抄、未稱職、爲遠上座、起骨云、末後一着、始到牢關、山遙水遠、火冷雲寒、啞、不是闖髏眼活、進遮一步、也大難大難、衆始伏膺、歸里居梅嵒、十餘年、自號雲山畊叟、樞相鄭公性之、尙書陳公韡、間居日相與講道、白郡致主釣臺、寶祐間、遷越山、未幾而逝、故名不顯著。

祖昌庵主、不知何許人、隱於天目山中、結庵取陳墳、約二十餘里、雙徑榮首座、嘗遊山中、偶至其庵、荆棘蒼密、墻壁傾斜、昌頹然於路口、倚杖而立、雪眉霜髯、壞衲弊履、人物可畫、且欣然揖入共坐、榮視左右、瓶無儲粟、竈有餘煙、心甚異焉、問居山今幾年、遂稱名答曰、不記年矣、益奇之、問粮食誰供、答曰、仰給陳氏、今無矣、問何不如何是隱者家風、答曰、猛虎一聲山月高、遂屏息不敢復問、少焉、昌出茗芽、令掬水嚥之、徐叩雙徑歷代尊宿、咨嗟久之、蓋嘗見典牛塗毒來、若言其見前輩、不翅百齡矣、又曰、路遠宜卽歸、榮明年拉同道訪之、已失其處、豈非世出世間之異人者耶、要當於懶殘西山亮輩中求也。

溫陵黃允字孚中、晚年喜參請、知罪福、嘗言、昔爲護國主首、撰開堂疏、曾受其潤筆資、作懺悔疏、備元物詣寺、供設還謝、叙事簡核、略云、諲長老之住護國、劉大卿之守溫陵、允也時預計偕、當趨省試、開堂撰疏、難逃府命之嚴、潤筆貽資、實出僧儲之有、昔爲貧而受也、今如數以還之、二十三年、常作懷慚之客、七十五稔、方成了事之翁、聞者嗟服。

平江府開元別翁甄禪師、西蜀人也、初入閩見枯禪、悟其機用、後從遊癡絕、得其至要、淳祐間、

開法衢之南禪、臘八上堂、擧世尊正覺山前、夜覩明星、忽然悟道、乃云、奇哉一切衆生、具有如來智慧德相、但以妄想執着、而不能證、拈云、釋迦老子、未覩明星、以前、不妨令人疑着、既覩明星之後、說出許多不才淨、心肝五臟、總被別人覷破、還有爲釋迦老子作主底麼、別翁徒有此語、只知釋迦老子心肝五臟被別人覷破、殊不知、別翁心肝五臟、又被別人覷破了也。

# 枯崖和尚漫錄卷下終



此集所記、皆近世善知識也、中間如柔萬庵元雙杉、皆余舊方外友、曰篠塘賢辟支堅、則余誌其塔矣、悟兄舍儒入釋、其敬慕前輩如此、進進未可量、所論金華元首座、前後話頭、已具眼目、大慧所謂顚倒禪、正道着此病、悟能以是求之、他日與此集諸老、共入僧寶傳矣、竹溪鬳齋林希逸題。

景定四年夏四月

# 國譯兀庵和尙語錄

## 解題

本書は一に兀庵錄とも稱し、宋僧兀庵普寧禪師一代の語要を集めたるものにして、其の內容は、大體師が來朝前の住山錄及び來朝後の語錄・法語幷に歸宋後の法語等の三大部より成る。編者は孰れも師の門下淨韵・淸澤・道昭・景用・禪了等なり。而して本錄の初めて開板せられたる年代は、今明かならざれども、我が寶永年間の刊本の識語に「小師景用 命ヲ工鋟板」とあり、又其の附する處の序跋は皆師が生前のもののみなれば、之は恐らくは師の在世中に景用が開板したるものならんと思はる。而して我が國に於ては室町時代の五山版と德川期の寶永元年版とあれども、今は容易に之を求め難し。

兀庵は當時、幾多の來僧中にて最も特色ある衲僧にして、從つて其の家風も亦他と自ら撰を異にせり。故に本書は斯の硬骨老漢の禪風を窺ふには最良の書たると共に、又鎌倉幕府の執權北條時賴との史的關係や當時に於ける武家の信仰などを知るには實に緊要の書たり。

傳を案ずるに、師、諱は普寧、兀庵は其の號、宋の西蜀の人なり。幼にして出家し、敎場に遊び、尋で峽を出でて遍く智識に參じ、乃ち蔣山（今の江蘇省江寧縣の鍾山）に至りて癡絕道沖禪師の上堂に値ひ、大いに省悟する所あり。轉じて育王山（今の浙江省會稽道鄞縣にあり）に登り、無準師範禪師に隨

ひ、遂に大悟して印可を得、端平の初め、無準に隨つて徑山に遷り住す。無準一日曰く、「得レ道易、守レ道難。須ニ默々守レ之、久々自然感驗」と。師退きて兀々として日を度る。準乃ち兀庵の二字を大書して贈る。因つて以て號となす。已にして靈隱・天童に遷りて第一座に推さる。尋で象山の靈巖寺に出世し、又常州の南禪寺に住す。時に日本の道俗、遙かに書を寄せて聘するに會し、乃ち宋の景定元年（我が龜山天皇の文應元年）、滄溟に泛んで東游し、博多に著して聖福寺に寓す。既にして京都に入り、東福寺の聖一國師が迎へて客位に居らしむ。都下の緇素麕集して瞻禮す。副元帥北條時賴、其の道譽を聆いて鎌倉建長寺に延請す。住持蘭雞和尚は實に其の舊友たるを以て相見て大いに歡ぶ。これより時賴の崇敬日々に加はり、又諸方參玄の雲衲群集す。時賴每に入室して道を問ひ、大いに悟る所あり。斯くして師は建長に止りて大いに禪規を整備したりしが、不幸、時賴は弘長三年冬卒し、且つ又衆中に觸忤するものあるに至りしかば、師は例の癇癪を起して遂に西歸の志を抱き、一日急に鼓を撾つて上堂し、衆を辭して曰く、「無心遊ニ此國一、有心復ニ宋國一。有心無心中、通天路頭活」と。下座、決然として去る。闔府抑留すれども允さず、時宗ために從士を遣はし特に西府に送る。乃ち歸船に乘じて明州に達る。時に省劄を受けて婺州の雙林寺に住し、久しからずして之を捨て、江浙の間に漫遊し、晩に溫州（今の浙江省永嘉縣）の江心山龍翔寺に住し、宋の德祐二年（乃ち元の至元十三年、我が後宇多帝の建治二年）十一月二十四日、龍翔寺に於て晏然として寂す。壽八十。勅して宗覺禪師と謚す。弟子大夢は法嗣なり。

# 國譯兀庵和尚語錄卷首

徑山無準師範禪師手翰

師範㋑和南手白す。

靈巖堂頭長老、別れ去つて許く久し、中旬に信を受けて後、動止を知ること莫し。歲暮忽ちに蘇城の舟中に於て、書幷に信を收む。且た出世して、諸山の公舉より出でたることを知る、甚だ老懷を慰す。既に住持と曰ふ、却つて閑衲子と同じからず、便ち住持の職を有す。從上來大いに軌則あり、當に一一依つて之を行ふべし。緊要の者、惟だ本分の事を以て、廣く未學を攝すること、亦宜しく己が力量に從つて施設すべし。當に過と不及との患を去らば、久々に自然に感驗すべし也。長老久しく叢林にあつて、備に今時の弊を見る、默して省誉すべし。暮冬失脚して其の輩流に墮ちて、識者の爲に笑はる。吾れ老いんたり矣、一たび㋺五峰に住してより今に十七年、開奏の後、漸く閑を求むるの計を理す。只だ早晩を思ふ矣、法衣乙頂付し去る。上堂に遇はば、一たび幻質に披すべし、現成なき者、付して別日に在り。旅中草略奉答す、甚だ子細ならず、餘は宜しく宗乘の爲に自愛すべ

㋑和南。「をなん」とも訓む、稽首、禮拜、敬禮等と譯す。
㋺五峰。天台山にあり、國清寺なり。

し。一ならず。

靈巖堂頭長老

師範和南手白

# 國譯兀庵和尚語錄

## 初住慶元府象山靈巖廣福禪院語錄

侍者　淨韵編

三門を指して、「迷悟の兩門、聖凡の二路。」手を以て劃一劃して云く、「惣に諸人の與に開闢し了れり、普請一時に證入せん。」

佛殿、「一釋迦、二元和、三佛陀、當に甚の❶椀脫丘ぞ。然も是の如くなりと雖も、仁義道中。」便ち燒香して禮拜す。

方丈に據り、横に拄杖を按じて云く、「危亡を顧みざる底有ること莫しや。」良久して云く、「果然。」帖を拈じて云く、「從上來、這の些子の一把に把定せられ、更に身を轉じ氣を吐く處なけん。寧上座、尋常、一味に横に點頭す、此に到つて、平生の伎倆を盡せども、也た擺脫不下。且く道へ、甚に因つてか此の如くなる。公道已に行はる。」

❶椀脫丘。脫は傳燈十四に蹉に作る、椀の底ぬけの意、此の語は傳燈十四卷「鳳翔府法門寺の佛陀和尚、常に一串の數珠を持して三種の名號を念じて曰く、一釋迦、二元和、三佛陀、身餘是れ什麼の椀蹉丘ぞ云云。」又禪家求の下にも出ず。無用の意なり。

法座を指して、「千差を坐斷して當陽烜赫たり、任ひ是れ須彌燈王も、也た須らく空を望んで斫額すべし。」

陞座祝聖、次に州縣を祝する香。次に云く、「此の一瓣の香、無陰陽の地に生じ、絕思慮の鄉に出づ。軟頑中の軟頑、惡辣中の惡辣、端無く一回嗅着して、直に得たり平生を喪盡することを。今日人天衆前、當陽に爇却し、見住徑山佛鑑圓照禪師大和尙の爲に、用つて法乳に酬い奉る。」

據座、〔問答不レ錄〕、乃ち云く、「釋迦出世せず、四十九年の說、祖師西來せず、少林妙訣有り。所以に道ふ、法に古來無く、動轉の相無し。昨朝は乳寶、今日は靈巖、曾て動轉の蹤無し、寧ぞ去來の相有らんや。是の如きんば則ち從上佛祖の眼睛、天下衲僧の鼻孔。驀に拄杖を拈じて卓一下して云く、「總に山僧が拄杖子に一時に穿却せられて、盡乾坤大地、更に纖毫の透漏無し。然りと雖も且く道へ、功何れの所にか歸す。」拄杖を靠けて云く、「四海波平かにして龍の眠ること穩かに、九天雲靜かにして鶴の飛ぶこと高し。」

復た擧す、三聖道く、「我れ人に逢へば卽ち出づ、出づるときは卽ち人の爲にせず。」興化道く、「我れ人に逢へば則ち出でず、出づるときは則便ち人の爲にす。」拈じて云く、「二大老、一人は先づ行いて到らず、一人は末後に太だ過ぐ。檢點し將ち來れば、惣に一着を缺く。寧上座、跡を岩窶に寄せ、隱遁時を過す。端無く人に推奬せられて、出で來つて這の擧止を做す。出づることは則ち出で已る。且く道へ、人の爲にするか、人の爲にせざるか。」乃ち云く、「手に信せて斫れば、方圓、自然に規矩に合ふ。」

當晚小參、如來唯だ一說、二說無し、祖師唯だ心傳、別傳無し。所以に道ふ、鉤を四海に垂れて、只だ獰龍を釣り、格外の玄機、爲に知己を尋ぬと。然りと雖も且く令に據る一句、又作麼生。朔風地を捲いて百草死し、芙蓉花を着けて晚寒を生ず。

復た擧す、德山小參、衆に示して云く、「今夜答話せず。」時に僧有り出づ、德山便ち打つ。僧云く、「某甲話も㊀也た未だ問はず、甚に因つてか某甲を打つ。」山云く、「儞は是れ甚れの處の人ぞ。」僧云く、「新羅の人。」山云く、「未だ船舷に跨がらざるに、好し三十棒を與ふるに。」拈じて云く、「德山老漢、能く放つて能く收めず、能く殺して能く活せず。當時若し令を盡すことを要せば、直に須らく棒じ了つて趂ひ出すべし。」

徑山、法衣を付して到る。師、法衣を拈起して、大衆を召して云く、「大庾嶺頭提不起、什麼に因つてか却つて靈巖が手中に在る、諸人還つて端的を知る麼。若し也た知得せば、便ち從上來、佛佛授手、祖祖相傳、的的私無く、繩繩準有ることを知道せん。其れ或は未だ知らずんば、」復た法衣を擧して云く、「這箇は是れ徑山圓照老人、親しく手づから付し來る底。」便ち披す。

上堂、大衆を召して云く、「野干皮を披して、獅子吼を作す。」喝一喝して下座。

㊀也。一本には「亦」に作る。
㊁爲。一本には「作」に作る。

結制上堂、「過去の諸如來、斯門已に成就す、錯、見在の菩薩諸、今各亦圓明、錯、未來修學の人も、應に當に是の如く學ぶべし、錯。諸人還つて這の三錯の落處を知る麼。若し也た知り得ば、妨げず同じく此に安居することを。其れ或は未だ然らずんば、且く頭より指出することを聽け。一錯は從上の佛祖の眼睛を點開し、一錯は天下の衲僧の鼻孔を捩轉す。且く道へ、更に一錯有り、作麼生。」驀に拄杖を拈じて云く、「拄杖子道ひ得ること莫し麼、試に出で來つて、錯を將つて錯に就いて道へ看ん。」卓一下して云く、「㊁餿飯泥茶爐。」

上堂云く、「教中に道ふ、言說の相を離れ、文字の相を離れ、心緣の相を離れて、畢竟平等、變易有ること無しと。」驀に大衆を召して云く、「這般の說話、蝦㋕跳れども何ぞ曾て斗を出づることを得ん。衲僧門下に向つて、猶ほ重關を隔つ、畢竟して事作麼生。荷葉團團として鏡よりも團に、菱角尖尖として錐よりも尖し。風柳絮を吹けば毛毬走り、雨梨花を打てば蛺蝶飛ぶ。」

中夏上堂云く、「一夏九十日、覺えず已に半を過ぐ、牯牛兒を管帶して、切に忌む物に隨つて轉ずるを。緊しく鼻頭の索を把つて、放つて寬緩ならしむること莫れ。是の如くにして十二時、時時間斷無くんば、牧して純熟を得ん。之れを尽けて去らずんば、人の言語を受けん。不動不變、覿面當機、當機覿面ならん、必竟如何。」良久して云く、「動着することを得ず、動着すれば則ち頭角生ず。」

㊁餿飯。くさつた飯のことなり。

㋕一寫本には「蛂」に作る。

解制小參、「目前法無く、意目前に在り、東西十萬、南北八千。所以に達磨東土に來らず、二祖西天に往かず、點檢し將ち來れば、只だ一㋑邊を見る。設使ひ東去西去、直に萬里無寸草の處に向つて去るも、大いに泥裡に車を推し、陸地に船を行るに似たり。直饒ひ總に道ふ、門を出づれば是れ草と。則ち君子は千里同風と雖も、未だ免れず山を隔てて烟を見ることを。爭か如かん、任運騰騰、騰騰任運、飢飡渴飲、行坐困眠するに、自然に處處朝宗し、頭頭合轍す、縱橫妙を得、八穴七穿ならんには。且く總に不恁麼ならば、又作麼生。」膝を拍つこと一下して云く、「覺えず日又夜、爭か人をして少年ならしめん。」

復た擧す、僧、雲門に問ふ、「秋初夏末、東去西去、前途に或は人有つて問はば、如何が祇對せん。」雲門云く、「大衆退後。」僧云く、「某甲過甚れの處にか在る。」雲門云く、「我れに九十日の飯錢を還し來れ。」師拈じて云く、「雲門老漢、當に斷ずべきに斷ぜず、返つて其の亂を招く。當時纔に問はば、擘脊に便ち棒ず、它の某甲過甚れの處にか在りと道ふを待つて、却つて向つて道はば、人に逢ふて錯つて擧することを得ざれ。」

道舊至る上堂、大衆を召して云く、「沒絃琴指趣深し、尖新の曲調須らく知音に遇ふべし。知音既に遇ふ、試に彈ずること一操し去らん。」遂に拄杖を橫へて、琴を撫する勢を作して云く、「會す麼、高山流水無窮の意、落落たる斷㋒崖千萬尋。」

㋑邊。一本には「變」に作る。

㋒崖。一本には「岸」に作る。

上堂、大衆を召して云く、「寒食清明の節、家家拜掃する時、木人空しく嘆息し、石女泪㋩雙べ垂る。惟だ林下の道人有り、絕學無爲、百不會、百不知、拈起す少林の無孔笛、逆風に吹き了つて順風に吹く。㋙好太哥。」

結制上堂、諸方安居結制す、靈岩結制安居す。是れ一般の規矩と雖も、中に於て大いに差殊有り、作麼生か、趙州㋚東壁に葫蘆を掛く。

端午上堂、拄杖を拈じて衆に示して云く、「拄杖子徧黨無し、遍界曾て藏さず、通身影像無し。」左邊に卓一下して云く、「妖怪盡く勦除す。」右邊に卓一下して云く、「佛魔俱に掃蕩、掃蕩して後如何。」拄杖を擲下して云く、「普天皇道遮障無し。」

徑山㋛圓照先師の訃音至る、上堂。大衆を召して云く、「頑處常に非ず軟頑を放して、偏に能く陸地に船を撑へんと要す。驀然として撑へて龍門に向つて去る。蹤跡知らず那邊にか往く。幾多望斷して空しく惆悵、亦復た嗟嘆して泪潸然。」禪床を拍つこと一下して云く、「安ぞ㋜鸞膠の斷絃を續ぐことを得ん。」

哀を擧し大衆を召して云く、「我れに一句子有り、封にあらず亦樹に非ず、舌頭の邊に在らず、亦思憶の處に㋝非ず。諸人若し知得して親切ならんことを要せば、徑山圓照老人、卽今汝諸人の眼睫上に

㋚雙。一本には「相」に作る。
㋙好太哥。哥は兄なり、好大兄の義なれば、人を尊敬するの語。
㋚東壁。さいのかみと大黑柱とすまうをとりし故事。
㋛圓照先師。無準師範禪師を云ふ。
㋜鸞膠。膠續ぎにかはにてつぐをいふ。
㋝非。一本には「不」に作る。

在つて、大光明を放ち、口を肆にして宣說す、急に須らく諦聽すべし。其れ或は未だ然らずんば、蒼天中に蒼天と哭す。」

雨を祈りて感應あり、上堂。拄杖を拈じて衆に示して云く、「拄杖子化して龍と爲り、雲を拏ひ霧を飛む、妙應窮め難し。霈然洪霆して、四海皆通ず。五穀實を結び、萬物功に歸す。鼓腹謳歌世事を忘る。」拄杖を以て圓相を打して云く、「太陽は舊に依つて海門の東。」拄杖を擲下して下座。

解夏小參、「直下猶ほ會し難し、尋ぬれば言ふ轉た更に賒なりと。若し佛と祖とを言はゞ、特地天涯を隔つ。便ち恁麼に承當するも、已に是れ持論するに堪へず、那ぞ更に休夏自恣して、驗を蠟人に取らん、也た大いに屈なる哉。靈岩恁麼の告報、猛省底有ること莫し麼。」禪牀を拍つこと一下して云く、「端無く夜來の雁、驚起す後池の秋に。」

復た擧す、㋞巴陵、衆に示して云く、「是れ風の動ずるにあらず、是れ㋟旛の動ずるにあらず、既に是れ風旛にあらず、甚れの處に向つてか着けん。人有り祖師の與に主と作らば、出で來れ、巴陵と相見せん。後來雪竇道ふ、是れ風動く、是れ旛動くと。既に是れ風旛甚れの處に向つてか着けん。人有り、巴陵の與に主たらば、出で來れ、雪竇と相見せん。」師拈じて云く、「總に道ふ二古德、平に相擊揚す、金聲り玉振ふ、古に耀き今に騰ぐと。殊に知らず、一人は太だ儉、一人は太だ奢と。人有り二老宿が爲に主と作らば、出で來れ、靈岩と相見せん。」

㋞巴陵。名は灝鑒、雲門に嗣ぐ。
㋟旛。一本には「幡」に作る。

建閣、修造を謝する上堂。「東籬を拆き西壁を補ふ、空に從つて空を架し、楔を以て楔を出す。他時壑に聳え霄に昂る、須らく信ずべし餘力を勞せざることを。這般の説話、直に是れ好笑。何が故ぞ、纔に方に彈子を㋐搓して、便ち要す金剛を揑せんことを。」下座。

上堂、擧す、僧、巴陵に問ふ、「祖意敎意、是れ同か是れ別か。」巴陵云く、「鷄寒うして樹に上り、鴨寒うして水に下る。」圓照老子道ふ、「川僧は蒼苴たり、浙僧は瀟洒たり」と。師拈じて云く、「二老則ち各家風を擅にすと雖も、其れ優劣等しからざるを奈せん。靈岩也た箇の道處有り、或し祖意敎意、是れ同か是れ別かと問はゞ、只だ向つて道はん、鳶飛んで天に戻り、魚因に躍ると。」

上堂、拄杖を拈じて、衆に示して云く、「山僧昨日邑に入りて滿散す、無心の中に於て一物を收め得たり。長短方圓に非ず、赤青黃赤白に非ず、賤きことは則ち價婆婆よりも重く、貴きことは則ち分文にも直らず。敢て囊藏せず。今日歸來、免れず鼓を擊つて堂に陞り、諸人の與に平分し去ることを。」卓一下して云く、「一に三を加へ、二に六を添ふ。」擲下して云く、「收。」

浴佛上堂、擧す、藥山因に遵布衲殿主浴佛の次で、藥山問うて云く、「儞只だ這箇を浴し得、還つて那箇を浴し得る麼。」遵云く、「且つ那箇を將ち來れ。」藥山休し去る。師拈じて云く、「藥山老漢、纔に臭口を開く、㋑便ち見る鄉談、布衲を引き得て、邪に隨ひ惡を逐はしむることを。當時他恁麼に道ふを待つて、但だ香湯を舀んで佛を浴せば、管取せん藥山の口を開き了つて合し得ざることを。靈岩は儞が這箇那箇を問はず、今日正當四月八、敢保す、諸人未だ曾て夢にだも山僧が膽を盖ふ毛を見ざることを在ることをと。」

㋐搓。おしうつことなり。
㋑便。一本には「卽」に作る。

# 廣福語錄・終

# 住常州無錫南禪福聖寺語錄

侍者　清澤　編

三門を指して、「我が此の門風、孤危にして立せず。若し是れ臨濟の兒孫ならば、便ち請ふ單刀直入。」喝一喝。

佛殿、「釋迦彌勒は是れ他の奴、他は是れ阿誰そ。」香を挿んで云く、「且く㋑四稜地を蹋む時を㋺看よ。」大聖殿、「出現して楊州に在り、錫を此の地に留む。寶塔高空を凌ぎ、聲光萬里に動く。物を利して群機に應ず、月の衆水を分つが如し。我れ來つて瓣香を爇し、一瞻一頂禮。從教あれ人は道ふ、自倒還た自起と。」

方丈に據る、横に拄杖を按じて大衆を召して云く、「山僧坐地に待つ、汝構へ去れ。」良久して云く、「諸人還つて頂門の重きことを覺ゆる麼。」拄杖を擲つて便ち起つ。

㋩漕の帖を拈ず、「此れは是れ都運殿撰侍郎、造化を斡旋し、乾坤を掌握す。無心の中に於て當陽に拈出す、未だ信ぜざるものをして信ぜしめ、未だ聞かざるものをして聞かしむ。山僧頂戴奉行す、誰か伏して處分を聞かざらん。」

㋑四稜。稜は木の角、四隅の足をいふ、不動着、又は安心の處に喩ふ。
㋺看。一本には「見」に作る。
㋩漕帖。公文なり。





法座を指して、「向上一路滑かに、壁立千尋險し。南禪堦級を立せず、直に與に當頭に坐斷す。」祝聖、次に州縣を祝するの香。據座、「問答不レ錄」、乃ち云く、「靈山の的旨、少室の眞機、孤迥迥生、風颯颯地。直に得たり、超情離見、蓋色騎聲、揑聚放開、適として可ならざる無きことを。所以に海岸に居するときは、則ち時に潮落ち潮生じ、潮聲の浩浩たるを聞き、梁溪に寓するときは、則ち但だ見る上載下載、來往の幢幢たることを。賓主交參じ、風雲會合す。正恁麼の時、如何が信を通ぜん。」良久して云く、「㋺洞庭七十二峯青し。」

擧す、㋭鳥窠和尚、因に㋩白侍郎問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」鳥窠云く、「諸惡莫作衆善奉行。」侍郎云く、「三歲の孩兒も、也た恁麼に道ふことを解す。」窠云く、「三歲の孩兒も道ひ得ると雖も、八十の老翁も行ずることを得ず。」師拈じて云く、「侍郎、手に㋣仲尼の日月を擎げ、腰に㋤毘盧の金印を佩ぶ、等閑に箇の消息を通ず、迥に常流に出づ。鳥窠は則ち當機直截と雖も、其の見易うして明め難きことを奈せん。諸人還つて古德爲人の處を知る麼。擘開すれば華岳連天秀で、放出すれば黃河一派清し。」

當晚小參、折脚鐺破木杓、柄覇無くして、模索し難し、横拈倒用、二を破つて三と爲す。正按傍提、七穿八穴、靈山密付の後、少室單傳以來、的的私無く、繩繩準有り。若し正眼を以て之れを觀れば、

㋺洞庭。この句、雪竇祖英集に出づ。
㋭鳥窠。國一欽に嗣ぐ。
㋩白侍郎。樂天居士、居易のこと。
㋣仲尼。孔子の字なり。
㋤毘盧。遍一切處と譯す。

當に甚の閑家の破具ぞ。然りと雖も此の意分明ならば、誰と共にか委せん、相同じく扶起す舊家風

復た擧す、㊀芭蕉和尚、僧問ふ、「諸緣に落ちず、請ふ師直指せよ。」蕉云く、「問有れば、答有り。」拈じて云く、「芭蕉接物應機頗る善し、高きを平にし下きに就く。子細に檢點し將ち來れば、未だ免れず㊁拖泥滯水を。若し南禪に、諸緣に落ちず、請ふ師直指せよと問はゞ、棒を拈じて便ち打たん。若し稍痛痒を知らば、必ず恩に負き德に負かず。」

歲夜小參、「㊂心は萬境に隨つて轉ず、轉處實に能く幽なり。流に隨つて性を認得すれば、喜も無く亦憂も無し。山僧㊃官差自由ならず、只だ得たり流に隨つて流に入ることを。所以に新來乍ち到らば、未だ知らず井竈郎忙、舊を送り新を迎へ、未だ改聲換調するに暇あらず。厨に蠅を聚むるの糝に乏しく、囊に蟻を繫くの絲無し。㊄內空外空內外空、多憂多慮多煩惱。歲已に盡き、歲已に除す。㊅窮厮煎じ、餓厮吵す。露柱暗に眉を攢め、燈籠手を拍して笑ふ。且く道へ、箇の什麼をか笑ふ。」良久して云く、「㊆毘婆尸佛早く心を留む、直に如今に至るまで妙を得ず。」

擧す、雲門示衆に云く、「三乘十二分敎、達磨西來、放過卽不可。若し放過せずんば、一喝を消せず、雪竇擧し了つて一喝す。」復た云く、「好喝、大衆若し鼻孔遼天なることを要せば、這の一喝を辨取せよ。」師拈じて云く、「唱高うして和すること寡きは、則ち二古德に無きにあらず、檢點し將ち來れば、當に甚の屎沸聲ぞ。」

㊀芭蕉。名は慧淸、南塔涌に嗣ぐ。
㊁拖泥。拖はひく、人の水中に溺れるを救ふには、自ら泥をかぶり水に濡れて助くるを云ふ、慈悲の爲に自ら其の身の醜を忘れて人を濟度するを云ふ。
㊂心隨。第二十二祖の偈なり。
㊃官差。勅命又は官命を以て住持せしむるを云ふ。
㊄內空。十八空の中なり。
㊅窮厮煎。煎吵は急迫の意なり、困窮し盡して飢餓に迫り、如何ともし難きを云ふ。
㊆毘婆尸佛。過去七佛の第一。

上堂、擧す、「靈雲桃花を見て道を悟るの頌。『三十年來劍客を尋ぬ。「著語して云く、癡狂外邊に走る。」幾回か葉落ち又枝を抽んづ。「曾て霜雪の苦を經て、」桃花を一見してより後、「鐘を喚んで甕と作す。」直に如今に至るまで更に疑はず。「狐狸水を探る。」』設し師無くして自ら悟る底あらば、南禪が與に洗脚せしむるに堪へず。只だ玄沙の諦當なることは甚だ諦當、敢保す老兄の未徹在なることを。と云ふが如きんば、又作麼生。」良久して云く、「曾て浪子と爲つて偏に客を怜む、盃を貪り醉を惜む人を愛するが爲なり。」

三月三、大聖生るゝ日上堂。擧す、泗州の大聖國師、昔日、問有り、云く、「何れの國にか住在する。」答へて曰く、「何れの國ぞ。」「着語して云く、板齒鐵橛の如し。」又問うて云く、「何の姓ぞ。」答へて曰く、「姓は何。」「舌頭に上咢を拄ふ。」拈じて云く、「東涌西沒、七縱八橫は、則ち大聖に無きにはあらず、其の醜惡倶に露るゝを奈せん。玆に誕辰に遇ふ。」拄杖を拈じて云く、「拄杖子未だ免れず、時に應じ節に應じて箇の注脚を下すことを。」卓一下して云く、「遲日江山麗し、春風花草香し。泥融して燕子飛び、沙暖かにして鴛鴦を睡らしむ。」拄杖を擲つ。

徑山佛智㊇偃溪和尚至る上堂。「東溯水淸く且つ泚めり、源遠く流れ長

㊇偃溪。名は廣聞、浙翁琰に嗣ぐ、大惠四世なり。

く、波騰り鼎沸く。這裡より入る、其の幾と云ふことを知らず、是は則ち是、只だ ㋑國一禪師の梁溪を經過して、驀に泗州大聖の鼻孔を將つて一揑するが如きんば、直に得たり氣を出すに處無きことを。復た良を壓して賤と爲すと爲せんか、復た神通遊戲と爲んか。」良久して云く、「㋒君子可八。」

淨慈 ㋓斷橋至る上堂。阿難、迦葉に問うて云く、「世尊金襴を傳ふる外、別に何物をか傳ふ」といふ公案を擧して、師頌して云く、「弟應じ兄呼ぶ、自ら家醜を揚ぐ。刹竿を倒却して、全機漏逗、西湖月晝の如き有りと雖も、何ぞ南禪の鐵苕蕋に似かん。」

天童智 ㋔別山至る上堂。㋕芙蓉實性大師を訪ふ上堂、右手を以て拄杖を拈じて、安じて左邊に向つて云く、「若し是れ芙蓉師兄にあらずんば、大いに委悉し難し。」便ち下座といふを擧す。師拈じて云く、「實性の用處、則ち左之右之すと雖も、其れ特地を翻成するを奈せん。南禪も亦古の作に効はんと欲す、未だ免れず貧を拔いて富と作し、蒿湯禮を備ふるとを。」拄杖を擲下して云く、「若し是れ天童師兄にあらずんば、大いに委悉し難し。」便ち下座。

結制小參、「金烏は急に、玉兎は速なり、百歲の光陰一瞬息。」驀に拄杖を拈じて云く、惟だ拄杖子有り、硬 ㋖葛狙、㋗黑鄰皴、變遷すること勿れ、面目無けん。三月護生、

㋐國一。道欽、牛頭派なり、徑山の開山。
㋑君子可八。伶利の人、悟得底の人を云ふ、八は仁義禮智忠臣孝悌なり。
㋒斷橋。名は妙倫、師の同參、無準に嗣ぐ。
㋓別山。師と同參、無準に嗣ぐ。
㋔芙蓉。名は道楷、投子淸に嗣ぐ。
㋖葛狙。或は獦狙に作る、獦は短喙を有する犬、二字にて畜生といふの意なり、人を罵るに用ふ。
㋗黑鄰皴。眞黑なる拄杖を形容する辭。

九旬禁足、酌然として十二時を使ひ得て、十二時に催促せられず。任他あれ門外、紅塵擾擾、來往幢幢、肥馬碌碌、瘦馬碌碌。驀然として翻變化して龍と爲り、雨と爲り霖と爲る、俱に測る莫し。「卓一下。

復た擧す、僧、㋘智門に問ふ、「蓮花未だ水を出でざる時如何。」答へて曰く、「蓮花」「水を出でて後如何。」答へて曰く、「荷葉。」師拈じて云く、「應機接物、則ち無きにあらず、智門要は只だ能く順水に帆を張つて、逆風に柁を把ることを解せず。南禪に蓮花未だ水を出でざる時如何と問ふもの有らば、答へて云はん、三は平かに二は滿つと。水を出でて後如何。答へて云はん、四角六張と。」

結制上堂、衲僧家兜を擔つて行脚して、那邊に冬を經、這裡に夏を過す。眉を撑へ目を努り、口喃し舌沸す。之れが與に箇の期限を立てて、同じく大光明藏に住し、禁足護生するに及んでは、一へに蛇の竹筒に入るに似たり、伎倆俱に盡く。山僧免れず、些子の活路を撥開し、總に身を轉じ得、氣を吐き得せしめて、山は是れ山なるを見、水は是れ水なるを見、飢ゑ來れば飯を喫し、困じ來れば睡ることを。

祈雨開經佛事、「毘盧舍那佛、願力、法界一切國中に周く、恒に無上輪を轉ず。所謂、一句の內、法界の無邊を包ね、一毫の中、刹土を置いて而して隘に非ず。塵塵爾り、刹刹爾り、巍巍乎、蕩蕩乎、

㋘智門。名は祚、雲門に嗣ぐ。

慈雲を靄かして大千を誘ひ、法雨を霏いで百億を津す。遂に五穀秀實し、萬物滋生して、處處に津を通じ、頭頭轍に合することを得。恁麼に委悉せば、如是我聞開、信受奉行卷、言詮に滯らず。脫し或は未だ然らずんば、切に忌む巡行數墨、黑豆子に淹まることを。是なることは則ち是なり、只だ端明相公と衆官等と、民の爲に祈請して、此の大經を閱し、筵に臨んで證と作すが如き、必竟何の祥瑞か有る。」乃ち云く、「願はくは調羹活國の手を展べて、霖と爲り雨と爲つて人間に沃がんことを。」

上堂、擧す、㊐無着和尚、五臺に往き、路に一老人に逢ふ。無着問うて云く、「是れ文殊なること莫しや。」老人云く、「豈に二文殊有らんや。」無着便ち禮拜す、老人忽然として見ず。趙州代つて云く、「文殊文殊や。」薦福懷云く、「無着只だ先鋒有りて、目つ殿後無し、老人若し隱れ去らずんば、甚の面目有つてか無着に見えん。」師拈じて云く、「二古德、總に是れ邪に隨つて惡を逐ふ、無着、假を認めて眞を認めず、他の豈に二文殊有らんやと道ふを待つて、便ち與に一喝を㋺兜せば、老人縱ひ神通有るも、亦身を隱すに路無からしめん。諸人只今、文殊を見んと要す麼。」拄杖を擲下して云く、「直下來也、急に眼を着けて看よ。」

元宵上堂、大衆を召して云く、「祖佛付授して以心傳心、猶ほ鏡燈の光を交へて互に相照すが如し。燈を一眞心に喩へ、鏡を十法界に喩ふ、燈燈相攝し、鏡鏡交羅る。盡十方佛刹、微塵數世界、重重無盡、無盡重重、炳煥融通し、靈明廓徹す。所以に道ふ、重重交映すること、帝網の垂珠の若く、念念圓融、夕夢の經世に類す。然も是の如くなりと雖も、諸人夜半に、法堂上に東行西行、切に須らく照顧すべし。且く道へ、箇の什麼をか照顧する。」良久して云く、「照顧すれば露柱に撞着す。」

退院上堂、梁渚溪邊下の直鈎、波翻り浪輥じて牽抽を費さず。六年腕頭の力を用ひ盡して、㋩絲綸を收卷して性に任せて遊ぶ。此岸に着せず、彼岸に着せず、中流に滯らず、㋬欸乃一聲天地の秋。

㊐無着。五臺山に住す、牛頭鼬に嗣ぐ。
㋺兜。さわがしの意なり。
㋩絲綸。法柄を形容す。
㋬欸乃。ふなうたの聲。

福聖語錄終

○

(イ)師因に (ロ)日域の法眷、道舊の鄕人、徑山道聚の義を忘れず、屢々閑樂を邀ふ、累に却き復た至る。(ハ)景定庚申に於て、暫く與に一遊す。海舡檣上に龍七大寶珠を獻ず、舉衆瞻仰す。咸く云ふ、東海の龍王來り迎ふと。繼いで卽ち順帆、速かに彼の岸に達す。(ニ)聖福禪寺の住持は乃ち法眷なり。滴開山千光法師の忌辰に値ふ、方丈の大衆、禮請す。陞座、〔問答不レ錄〕、乃ち云く、「毘盧性海、本大小方圓無し、妙淨明心、色空明暗を礙へず。鏡の萬象を含むが如く、月の千江に印するに似たり。曾て出沒の蹤無し、奚ぞ彼此の間を分たん。所以に、宋朝に居しては則ち口に三世佛を呑み、日本に遊んでは則ち喜萬家の春を動す。處處通方、頭頭合轍。適聖福法兄に値ふ、此方他土に雲集して、若しくは聖若しくは凡、圓覺の妙場に宴坐して、爲に摩訶般若を說く。前半夏、前分般若を說き、後半夏、後分般若を說く。前後頓說常說燦然說、間歇無し。只だ要す諸人頓證頓悟、一夏虛しく棄つる底の道理無からんことを。玆に開山和尙千光法師、遠諱の辰に値ふて、衆の爲に闡揚せしむ。且く道へ、箇の什麼をか說かん。」拂子を以て禪床を擊つこと一下して云く、「這裡に見得徹し去らば、釋迦彌勒、氣を飲み聲を呑む。臨濟德山、空

(イ)之より以下、來朝後の語錄也。
(ロ)日域法眷。日域法眷は東福寺の聖一國師其の他を指し、道舊鄕人は蘭溪、無學等を云ふ。
(ハ)景定。宋の理宗の年號、庚申はその元年なり、我國龜山天皇御宇文應元年なり。
(ニ)聖福寺。筑前國博多に在り、今は妙心寺派に屬す、時の住持は聖一國師なり、師と同じく無準に參ず。
(ホ)任公子。古の貴官の子、父の廕に因つて官に任ぜらる、漢書に出づ。



を望んで啓告せん。然りと雖も、是れ(ホ)任公子にあらずんば、徒に釣竿を話するに勞せん。」復た擧す、南泉和尙、示衆に云く、「王老師、小より一頭の水牯牛を牧す、溪東に向つて牧せんと擬すれば、未だ免れず他の國王の水草を食ふことを。溪西に向つて牧せんと擬すれば、未だ免れず他の國王の水草を食ふことを。如かず分に隨つて些些を納れて、總に見得せざらんには。」師拈じて云く、「南泉老漢、則ち水草の恩を忘れずと雖も、其れ脚痕未だ地に點ぜざること在るを奈せん。兀庵力を盡して(ヘ)跨跳すれども、也た他の(ト)綣繢を出づること得ず。則ち這邊那邊應用缺けずと雖も、其れ先に聖福法兄に勘破せらるることを奈せん。然も是の如くなりと雖も、且つ作麼生か是れ些些を納るる底の道理ぞ。」拂子を以て禪床を擊つこと一下して云く、「眼睛纔に定動すれば、未だ(チ)那斯の祈を免れず。」

師、次に(リ)京の東福禪寺に至る、方丈に大衆禮請す。陞座、〔問答不レ錄〕、提綱、佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因緣を觀ずべし、時節既に至れば、其の理自ら彰る。是の故に靈山密付の後、少室單傳以來、諸祖平に興つて、宗を分ち派を列ねて、繩繩準有り、的的私無し、續焰聯芳、直に今日に至る。(ヌ)堂頭法兄、徑山の師席、義聚(ル)屢承の約を忘れずして、正に爲に提持して、(ヲ)羸惰暫く來誡に遵ひ、漢を越えて國の光を

(ヘ)跨。一本には「勃」に作る。
(ト)綣。一本には「圈」に作る。
(チ)那斯祈。方語に「山云、言不知也」と、或は福州の鄕談分曉の謂ひなりと。
(リ)京東福寺。時に師、東福寺の聖一國師に請ぜらる。
(ヌ)堂頭法兄。聖一國師のこと、師と同參なり。
(ル)屢。一本には「屬」に作る。

觀て、卽ち舊隱に回り、殘を畢へんとす。旣にして乍ち此に至る、衆の爲に擧揚せしむ。只だ客は主裁を聽くを得、遂に卽ち大唐國裡に鼓を打ち、日本國裡に陞座す。宗通說通、固無く必無し。人天畢く集り、凡聖交參す。宛爾たり一會、靈山儼然として未だ散ぜず、普く未だ信ぜざる者をして信ぜしめ、未だ聞かざる者をして聞かしむ。人人大方に獨步し、箇箇歸家穩坐せしむ。是を以て之れを佛性の義、時節の因緣と謂ふ。時節旣に至り、其の理自ら彰る。然も是の如くなりと雖も、惟だ向上の一路有り、未だ敢て道着せず。相逢ふて且つ三分の話を說く、未だ全く一片の心を拋つ可からず。

師、關東の㋐部從遠く迓ふ、纔に建長禪寺に到る。㋕掌國最明寺殿香を懷にして先づ來つて參禮す。力めて端坐を勸めて、炷拜を受けしめ了つて、復た進前して覆して云く、「弟子、大宋に在つて曾て和尙を禮拜す、今は多幸にして、再び慈顏を拜す。」〔見ニ其語異ニ〕師卽ち拳を握起して云く、「吾れ年老ゆと雖も、拳頭硬きこと在り。」復た進前して云く、「弟子、兩年の前、曾て夢に和尙の頂相を見る、參禪を敎訓せらる。惺めて後、親しく繪いて供養す、㋙此に慈相を拜するを獲、夢に見ると一同、喜悅の至りなり。」師云く、「且く夢を說く莫れ。」又問ふ、「和尙、尊年多少ぞ。」師云く、「六十三。」云く、「弟子、這箇の年を問はず。」師仍つて拳を竪てて云く、「是れ這箇の年なること莫し麼。」擬議して說無し。師便ち喝くこと三拳。忻然領話して云く、「和尙の

㋐鑁。おそるること。
㋑部從。武臣等を云ふ。
㋕掌國最明寺殿。北條時賴を云ふ。
㋙此。一本には「茲」に作る。



敎打を蒙つて、懽喜無量なり。」師云く、「拳頭の會を作すことを得ざれ。」方に坐に就いて少款して辭す。次朝復た至る、方丈の大衆と同じく禮請す。卽ち寺に就いて、衆の爲に普說す。

據座、垂釣、「年來の佛法關東に播す。兩國喧傳觸處通ず。僕僕來り覲る殊勝の處、果然殊勝にして妙窮め難し。共に相贊揚する者有ること莫し麼。」禪客出でて問うて云く、「綸を收め釣を罷めて扶桑に入る、大海應に測量すべきと難かるべし。道眼從來宇宙を空ず、灼然として遍界曾て藏さず。學人上來、願はくは法要を聞かん。」師云く、「四海波平にして龍の睡ること穩かに、九天雲靜にして鶴の飛ぶこと高し。」進んで云く、「恁麼ならば則ち但に建長秀氣を增すのみに非ず、少林の花木又重ねて新なり。」師云く、「水有り皆月を含む、山として雲を帶びざる無し。」進んで云く、「記得す、昔日臨濟、黃檗の印證を得るの後、往いて徑山に遊ぶ。彼の時、徑山七百餘衆、甚に因つてか星飛び火亂る。」師云く、「客と做ることを會せずんば、主人を煩勞す。」進んで云く、「謂つ可し、眞は僞を掩はず、曲は直を藏さずと。」師云く、「錯つて名言を下す。」進んで云く、「堂頭和尙、五山龍象の首と爲り、巨刹人天の師と作る。海に駕して來る、闔國忻幸す。」師云く、「紫陌花の開くと早きに因らずんば、爭か黃鶯の柳條に下るを得ん。」進んで云く、「恁麼ならば則ち天高うして群象正しく、海濶うして百川朝す。」師云く、「天下の人、仰望すれども及ばず。」進んで云く、「臨濟、徑山に上る、七百餘衆、星飛び火亂る。和尙、日本六十餘郡に遊ぶ、仰德瞻風。且く道へ、臨濟と是れ同か是れ別か。」師云く、「龍、水を得る時意氣を添へ、虎山

色に逢ふて威獰を長ず。」進んで云く、「今古正に應に墜つること無かるべし、分明に目前に在り。」師云く、「猶ほ重關を隔つ。」進んで云く、「今日方丈の大衆、上命を奉じて禮請し、衆の爲に普說す。和尚畢竟、如何が指示せん。」師云く、「更に老僧が拳頭を吃つて始めて得ん。」進んで云く、「恁麼ならば、則ち棒頭に眼有りて明日の如し。眞金を識らんと要せば、火裡に看よ。」師云く、「饒人を得る處、且く人を饒す。」又一僧問うて云く、「德山門に入れば便ち棒ずる時如何。」師云く、「匙挑ぐれども上らず、傍觀を笑殺す。」進んで云く、「臨濟門に入れば便ち喝する時如何。」師云く、「忉怛を翻成す。」進んで云く、「一人は棒を行じ、一人は喝を行ず、那箇か親、那箇か疎。」師云く、「一時に列下す。」進んで云く、「堂頭大和尚、此土に光臨す、必竟棒を行ずるか、喝を行ずるか。」師云く、「總に野狐精の見解を作さず。」進んで云く、「如何が是れ爲人底の一句。」師云く、「三十棒は且く別時を待て。」乃ち云く、「鎌倉路滑かなり、到る者還つて稀なり。巨福山高し、誰か能く頂に到らん。千聖も應に入作し難かるべし、萬靈景仰するに門無し。若し切切相邀ふるに非ずんば、拙者安ぞ能く此に到らん。便ち見る大力量の人、大智慧の者、一悲願を同じうし、一慈力を同じうして、剏めて寶所を新にして、金碧奐然たり、樓閣重重たり。像法濟濟として、一切の人をして、像法を覩て而して心法を悟り、自心を了じて而して佛心を見せしむ。一心に於て而して頓に百千の法門を證し、一法に於て而して無量の妙義を貫通す、以て慢天の網を布いて、萬煅の爐を開き、聖を煅し凡を煅し、佛を烹、祖を烹て、海岳を掀翻し、乾坤を撥亂して、

❷占波と新羅とを拽取して、額を齧はしむるに至る。是は則ち是なり、只だ今日主賓乎に換へ、凡聖交參するが如きんば、賓主歷然たり。合に何事をか談ずべき。」驀に拄杖を拈じて云く、「兩箇の馱子相逢着す、世上元來直人無し。」卓一下。

復た云く、『目前法無し、意目前に在り、是れ目前の法にあらず、耳目の到る所に非ず。是の故に三教の聖人、乎に相出興し、各門庭を立し、眞實の相を示す。只だ天下の人をして、善に遷り惡に遠かり、心を明め性を見ることを要するに非ざるは無し。然も途を殊にすと雖も、究竟同じく一理に歸す。惟だ是れ證悟淺深有り、用處廣略有り、水銀の地に落つるが如く、大なる者は大圓、小なる者は小圓、明鏡の臺に當るが如く、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現ず。且つ老拙、西蜀に生緣し、幼年にして儒を棄てて髮を剃り、冊を講肆に挾むこと數載、究竟に非ざるを知つて、捨て去つて南詢して諸老の門庭を遍歷す。蔣山に到るに及んで、八月二十五、❶癡絕和尚の上堂に値ふ。擧す、覆船に僧有り、雪峯に到る。峰云く、「甚れの處よりか來る。」僧云く、「覆船。」雪峯云く、「生死海未だ度らず、甚としてか船を覆す。渠れ生死無し」といふに、言下に忽然として本來の面目を認得す、憤憤の心稍息む。育王に到るに及んで無準和尚に參ず、上堂に遇ふ。擧す、僧、古德に問ふ、「深山巖崖、還つて佛法有りや也た無や。」古德云く、「有り。」「如何が是れ深山巖崖の佛法。」答へて云

❷占波。虛堂錄の一に、此の解委はしく出づ。
❶癡絕和尚。宋の寧宗嘉定十二年に嘉興府の報恩光孝寺に住し、次いで建康府の蔣山太平興國寺に住す。

く、「石頭大底は大、小底は小。」言下に夢の如く忽ち覺る。自後に凡そ入室に遇ふ、常に下語す。師に侍して徑山に上るに及んで、一日師の昔日、白雲の端和尚、東山の演祖參請する次でに因つて、之れが與に云く、「近ごろ數僧有り、廬山より來る。伊をして禪を說かしむれば亦說き得、下語するも亦下し得、古今を批判することも亦批判し得。」祖の云く、「和尚如何。」端云く、「我れ伊に向つて道ふ、直に是れ未在と。」演祖此の語を聞いて、數日飮食味無し。後七日にして方に厥の旨を諭ると云ふを聞く。是の時、拙者、一び此れを擧するを聞き、言の對す可き無く、只だ未在の處に向つて工夫を做し、久久に輟めず。凡そ入室するも也た下語せず。一日入室に遇ふ、先師把住して云く、「尋常口喃し舌沸く、如何ぞ下語せざる。」打つこと一竹篦、當下に漆桶を打破す、禮拜し了つて退く。然る後、徐徐として師の前に陳す。乃ち云く、「汝徹せり。只だ是れ道を得るは易く、道を守るは難し。須らく要すべし、默默として之れを守つて、久久にして自然に感驗せんことを。」此れより癡の如く兀の如くにして日を度る。先師遺るに兀庵の二大字を以てす。只だ緣に隨つて放曠し、以て殘喘を度らんことを欲す。奈ともする無し、數處に抑へられて衆に首たり、業緣に牽かれて、公選屢小刹を董す、辭避す可からず。衆に在りし ㋐時、曾て蘭溪と同じく首を蔣山徑山千百衆の中に聚む、各己躬の大事を究明すと雖も、時に復た此の道を以て切瑳琢磨し、別を執つてより而來、各天の一涯。伏して聞く航海東來、王公大人、佛法に信向し、心を此の道に留むるに際遇し、悲願を忘れず、同心同力、瘢

㋐時。一本には「日」に作る。



めて ㋑寶所を新にす。日域の魁にして第一の甲刹たり、宋朝第一の徑山と異なり有る無し矣。數年前屢承の約、累に却つて復た至る。故を以て寺事を撤去して、漠を越えて乍ち到る。乃ち遠く迂ふるの禮を荷ふ。伏して承る、㋒謙冲、大衆を領じて、上命を奉じて、請ふて衆の爲に普說せしむと、堅く辭す可からず。普說の二字、何ぞ敢て承當せん。前輩尊宿、圓悟大慧の諸宿德、辯懸河を瀉ぎ、滔滔間無し。具に ㋓方冊に載す、看る者明心見性せざる無し。安ぞ敢て古德萬分の一をも望まん。然りと雖も、故に久參の士は言に在らず、後學初機は、亦須らく親見親聞すべし。故を以て勉めて請ふ所に從ひ、箇の時節に應ず。略聞く此間、古より以來、惟だ敎法を弘む、今に於て始めて宗門を剏む。往往に信と疑と、而も未だ決せざる者衆し。殊に不立文字、直指人心、見性成佛の旨を知らず。從上の無數大劫、千佛萬佛、平に相出世す。惟だ此の心を傳ふ、特に迦文老漢のみ出世して、强ひて此の旨を立つるに非ず、且つ初めて生下し來つて、一手は天を指し、一手は地を指し、天上天下、唯我獨尊と云ふが如き、但だ知らず、此の語は何の經典よりか出づることを。此れ便ち是れ不立文字直指人心底の張本なり。以至金輪王の寶位を棄てて、直に雪山に入り、六年道を修め、菩提月八夜に於て明星を覩見し、忽然として頓悟す。乃ち云く、「奇なる哉一切衆生、具に如來の智慧德相有り、但だ妄想執着を以て、證得する能はず」と。此れは是れ不立文字直指人心底の樣子なり。但だ知らず敎

㋑寶所。寺院の殿堂をいふ。
㋒謙冲。未詳なり。
㋓方冊。ここでは經文、又は禪錄を云ふ。

相の中、以て敎の解釋と爲さん耶、以て禪の解釋と爲さん耶。道を成じてより後、三七中に於て、是の如きの事を思惟す、口を啓く處無し。蓋し下根中根上根の爲に、啓問することを得ず。已に道樹を起して、鹿苑に ㋕ 詣りて、根を觀て敎を逗して機に應じて而して說く。下根の者には爲に小乘法を說く、四諦の法門等是れなり。中根の者には爲に中乘の法を說く、十二因緣等是れなり。上根の者には爲に大乘の法を說く、六波羅密等是れなり。初め有敎を談ず、阿含等の經是れなり。一切衆生、皆有見に着するが爲、次に空宗を演ず、般若等の經是れなり。一切衆生復た空見に着す。有に着し空に着して、病を執すること轉た深し。後に靈山に向つて、始めて中道を開く、非有非空、中道大乘の敎、圓覺楞嚴華嚴等の經是れなり。說き來り說き去りて三百餘會、漸く之れを積むこと多し。龍宮に滿ち、海藏に盈つ。凡そ一切經中、皆不立文字直指人心の理を說く、曉然として纖毫の差殊無し、如何が見得せん。金剛經の首の如き、先づ須菩提、佛に白して言さく、「世尊、如來は善く諸菩薩を護念し、㋙ 善く諸菩薩に付囑す。乃至云何が應に住し、云何が其の心を降伏すべき。」世尊更に周由者也せず、只だ他の ㋚ 身子の上に就いて打劫す。答へて云く、「須菩提、若しくは善男子、善女人、阿耨多羅三藐三菩提心を發せん者、應に是の如く住し、是の如く其の心を降伏すべし。」須菩提當下に首を妥し、耳を貼けて便ち道ふ、「唯然り、世尊、只だ不合にして箇の願樂欲聞す」と道ふて、許多の葛藤を

㋕ 詣。一本には「至」に作る。
㋙ 善。一本には「能」に作る。
㋚ 身子打劫。身子は舍利弗の譯名。打劫は身ぐるみぬきとること。



引き得て地に遍し。此れは是れ諸經中、不立文字直指人心を說く底の影子なり。此の經の語は只だ指して敎相文字の說と爲し得んや。』末後に又云ふ、『云何が人の爲に演說せん。相を取らざれば、如如にして動ぜず、疏鈔解釋有りと雖も、此に到つて亦未だ免れず、㋛ 口磔盤に似たることを。南泉和尚、猶ほ ㋜ 放不過、便ち道ふ、喚んで如如と作す、早く是れ變じ了れるなり。衲僧門下、㋝ 縫罅無き處、縫罅を拶開し、人の憎を得と。這の些子を出づる無し。所以に瞿曇老漢、後來必ず敎に泥む者有るを洞見して、乃ち云ふ、「始め鹿野苑より、終り跋提河に至る、是の二の中間に於て、未だ嘗て一字をも說かず」と。則ち力を盡して敎相に執泥するの病を剗除すと雖も、其れ執病轉た深きことを奈せん。此の處合に不立文字直指人心の要を徹見すべし。後に靈山百萬衆の前に於て、一枝の花を拈ず。獨り迦葉のみ有り、一笑の頃に領ず。便ち跡を拂ひ痕を成ずることを見る。不合にして更に冬瓜の印を使ふ。吾れに正法眼藏涅槃妙心有り、摩訶大迦葉に分付すと。塩坂堆の上に重ねて塩坂を添ふ。當時百萬の衆中、忽ち箇の漢有りて、面皮を翻轉せば、便ち一場の敗缺少からざることを見ん。瞿曇入滅の後、迦葉阿難諸大弟子、從前四十九年の所說の法を結集して、列ねて三乘十二分敎と爲す。豈に特に只だ龍宮に滿ち、海藏に盈つるのみならん耶。其の無著・天親・護法・馬鳴等の諸菩薩有りて、深く小根小智の者の佛理を曉り難きを慮る。是に於て各各論を造りて解釋す、號して經律論の三藏と

㋛ 口磔盤。容易に口をひらかぬたいふ。
㋜ 放不過。はなち得ぬこと。
㋝ 縫罅。ひびわれ則ちすきま。

爲す。漸漸㋑唐土に傳來す、終に未だ足ること能はず。是れに由つて玄牝の諸師、親しく西天に往いて、經律論を請じて東土に歸來す。乃ち一切の人、實に曉解し難きを見て、遂に疏を製し鈔を作りて解釋し、一切の人をして容易に曉解せしむ。積み來り積み去り、堆積して山の如し。此れより後、經律論疏鈔を習ふ者、執して文字の學を爲し、以て究竟の學と爲す。敎外別傳の旨を信ぜず、是れを究竟の道と爲す、深く怜憫す可し。但だ知らず、文字に泥執する者、黑墨白紙を除却して、外、如何が趣向せん。往往に金口玉舌も亦與に分說し難し。藹月三十日に生死到來するに逗到して、前路茫茫として、未だ何くに往くを知らず。方に知る文字の學、果して力を得ざることを。悔ゆとも何をヤ將つてか及ばん。迦葉阿難等、法藏を結集するの後、更に復た眼を着けず、只だ靈山の密付、不立文字、直指人心の要を將つて、祖祖相傳す。是の故に阿難、迦葉に問うて云く、「師兄、世尊、金襴を傳ふる外、別に何物をか傳ふ。」迦葉呼んで云く、「阿難。」阿難應諾す。迦葉云く、「マ門前の刹竿を倒却し着せよ」と。這箇卽ち是れ前來所得底の冬瓜の印子、遞に相傳授して、二十八祖菩提達磨祖師に至る。法を得て六宗を破るの後、讖記を受け、十萬里海に航して來る。梁に遊び魏を歷て、ケ惟だ不立文字、直指人心の要を以て、少林に九年面壁す、コ神光、道を前に求むるを得。其の神光なる者、乃ち學ぶ所の儒敎諸子百家、古を貫き今に通じて、曉了せざる無し。習ふ所の三乘十二分敎、精通せざる無し。法を達磨祖師に問うて云く、「諸佛無上の妙道、聞くことを得可き乎。」達磨祖師答へて云く、「諸佛無上の妙道、豈に小根小智下劣の者の得る所ならん哉。」是に於て神光臂を前に斷つて、雪に立つに腰に齊し、祖師問うて云く、「當に何を以てか求むべき。」神光云く、「我が心未だ寧からず、乞ふ師安心せしめよ。」祖師答へて云く、「心を將ち來れ、汝が與に安んぜん。」神光、儒敎諸子百家、三乘十二分敎中を推窮するに、並に一句の相應する無し。只だ實に據つて祇對して云く、「內外に心を覓むるに、了に不可得なり。」狗を㋓趂ふて墻に逼るが如し、計窮り力盡く。祖師只だ輕輕に冬瓜の印子を以て、面門上に一搭して云く、「汝が與に安心し竟んぬ」と。且く道へ、世尊、須菩提に答ふる、應に是の如く住すべし、是の如く其の心を降伏すべしとの旨と、何れか異なり何れか別なる。試に眼を着けて看よ、神光此の印可を得て、師繩に據つて二祖と爲る。

㋑唐。一本には「東」に作る。
ヤ將。一本には「以」に作る。
マ門。刹竿。前に見ゆ。
ケ惟。一本には「唯」に作る。
コ神光。二祖慧可大師のこと。
㋓趂。一本には「逐」に作る。

繼いで三祖を得。乃ち是れ白衣の居士にして、儒釋の敎、精通せざる無し。忽ち風恙を患へ、特に來つて法を二祖に問うて云く、「弟子、身風恙に纏はる、乞ふ師懺罪せよ。」二祖更に一絲毫子を移易せず、便ち云く、「罪を將ち來れ、汝が與に懺せん。」三祖も亦是の如く推窮するに計無くして、乃ち云く、「內外に罪を覓むるに、了に不可得なり。」二祖仍つて所得底の印子を將つて、一搭して云く、「汝が與に罪を懺し竟んぬ。」佛佛手授し、祖祖相傳す、直に今日に至る。所以に靈山拈花の一節、之を敎外別傳と謂ふ。既に是れ經律論、皆包括して中に在り、更に單單として具に載せず。是に知んぬ、我が此の

宗門、猶ほ大海の如く、百川流を異にするも、同じく一味に歸せざる㋓莫し。太虛空の如く、盡百億恒河沙世界、包容せざる無し。所以に道ふ、未だ世界有らざるに、早く此の性有り、世界壞する時、此の性壞せず、諸佛未だ世に出でず、祖師未だ西來せざるに、人人常光現前し、箇箇壁立千仞なりと。聖に在りても一絲毫を增さず、凡に在りても一絲毫を減ぜず、惟だ是れ迷悟殊なること有り、所以に聖凡異なること有り。遂に文字の學に執泥すること滋多くして、本有の性發現する能はず。覺に背き塵に合し、本を棄て末を逐ふことを致す、蓋し是れに由る矣。儒敎にも亦云ふ、「君子は本を務む、本立つて道生る」と。此の本卽ち是れ自己本命元辰、本來の面目。此の本立つを得て、方に道生るを得べし。本若し立せずんば、何に緣つてか道生るを得ん。此れは是れ儒家膚淺の敎、尙ほ且つ說き得て、此の如く親切なり、何に況んや不傳の妙なる者を耶。是れ汝諸人、若し眞箇參禪學道、生死大事を究明し、徹證を以て期と爲んと要する者も、第一に須らく堅久に身心を具すべし。先づ平昔の學ぶ所の諸子百家、文章四六、習ふ所の經律論、文字の學を將つて、夫の見聞覺知、惡知惡覺、一切の㋔雜毒と與に、他方世界に颺在して、然して後、退步己に就いて、放つて空勞勞地ならしめて、只だ古人の一轉語を將つて、鼻尖子の上に貼在し、晝參夜參、行住坐臥、折旋俯仰、孜孜切切、抵死拚生、之れと㋕斷厓し、纖毫の問斷無し。道ふことを見ずや、暫時も在らざれば、死人に如同すと。提撕し來り、提撕し去りて、日久しく歲深く、因緣純熟せば、忽然として、啐地に折し、曝地に斷じ、大死一回して、己眼豁開せば、本地の風光、頓に現在前す。方に元來只だ自己に在り、別人に在らずと道ふことを知らん。直下に佛を疑はず、祖を疑はず、天下の老和尙の舌頭を疑はず。所以に道ふ、參禪は須らく是れ悟るべし、悟り了らば須らく人に遇ふべし。若し明眼の宗師の印證を求めずんば、譬へば書を讀んで發解及第し了りて、官に轉ずることを得ざるが如くに相似たり。亦只だ徒然なり。既に柄覇手に入ることを得ば、便ち知らん、生、何れよりか來り、死、何れにか去るといふことを。生死去來、絲毫も疑ひ無し。恁麼の田地に到らば、方に之れを大休大歇と謂ふ、生死怖る可き無く、菩提求む可き無し。盡十方世界、通上徹下、是れ箇の眞實の人體なり。豈に見ずや、古德道ふ、「若し一人有り、眞を發して源に歸すれば、十方虛空、悉く皆消殞す」と、信に誣ひず矣。然して後、道香しく果熟して、纏に入り手を垂れ、機に隨ひ物を接す、自然に綽綽として餘裕有らん哉。若し是れ半信半疑、今日一句を問ひ、明日一句を問うて、更に歇むこと數日、又冊子中に看て、兩句を記得し、又如何若何と問ふ。央央庠庠、更に一等薄福の闡提有り、專ら別人を點檢することを要して、並に自己を點檢せず、決して種草と爲るに堪へず。敢保す、此等の人、參じて驢年に到るも、也た未だ夢にだも見ざること在り。豈に見ずや、良遂座主、講じ得て極めて是れ淵源なり。乃ち敎相文字の學、是れ究竟に非ざるを知つて、麻谷和尙の門墻、孤㋖

㋓莫。一本には「無」に作る。
㋔雜毒。一切合さい、善惡ともいふこと。
㋕斷厓。限るの意。
㋖峻。一本には「危」に作る。

峻なるを聞き、文字の學を弃て去り、特に去つて參扣す。麻谷一たび見て、便ち是れ箇の漢なるを知つて、便ち栄園の裡に去る。善知識なる者、是れ大因緣、且く儞が爲に周由者也せず、如何若何せん。只だ要す、箇の人、入作無き處に向つて入作せんことを。第二次に至つて、見ゆるに及んで、麻谷直に方丈に入つて門を閉却す。良遂、忽然として大悟す。直に死邊より過して、便ち死款を供じ出して云く、「和尚、良遂を瞞ずること莫れ、良遂若し來つて和尚に見えずんば、幾乎ど十二本の經論に一生を賺過せられん。」從前、經論文字の學に執泥するの執病、當下に氷消瓦解、講肆中に歸するに及んで、衆に謂つて曰く、「諸人の知處、良遂總に知る、良遂が知處、諸人知らず。」若し回光返照せずんば、安ぞ此れ有らん耶。所以に宗門、僧と俗と、貴と賤とを問はず、皆趣向す可し。所以に從前の大儒、李翺相公、裴相國、東坡内翰、韓文公、張無盡、楊無爲等の諸大朝貴、小より書を讀み、發解及第して官と做り、極則の處に到り了る。故に是れ貫古通今、飛英騰茂、儒教釋教道教、精通せざる無し。亦㋔是れ究竟に非ざるを知り、急急に頭を回し腦を轉じて、知識に參見す。往往に聰明靈利、半信半疑の者、入手を得難し。其れ聰明靈利底は是れ向前せざるを除く、若し鐵石の心身を奮へば、極めて容易に契證す。豈に見ずや、于頔相公、紫玉・藥山の諸老宿に參見す、他尋常、儒釋の教、偏看せざる無し。只だ所疑の句を㋓將つて、以て問端を發す。一日忽ちに問うて云く、「如何なるか是れ㋖黑風其

㋔是。一本には此の字なし。
㋓將。一本には「以」に作る。
㋖黑風。この語は法華經第八の普門品の語なり。



の船舫を吹き、羅刹鬼國に飄墮する。」古德便ち與に直に向上を提げ、頂門に痛く一槌を與へて、答へて云く、「于頔㋗客作の漢、什麼と道ふぞ。」于頔相公、㋘滿面怒れる色あり、古德指して云く、「這箇便ち是れ黑風吹其船舫、飄墮羅刹鬼國」と。于頔言下に忽然として契悟す。須らく信ず可し、佛法は人情無く、除だ是れ大根器の人にして、方に這箇惡辣手段を禁得す。央央庠庠、半信半疑の者と何ぞ啻に天地懸かに殊なるのみならんや。所以に古德道ふ、「參禪は參じて無參の處に到り、參じて無參に到りて始めて徹頭す。」又老宿有り、云く、「參禪は參じて無參の處に到り、參じて無參に到るも未だ徹頭せず」と。一に水上に葫蘆子を捺すに似て相似たり、如何ぞ摸索せん、必竟如何。一拳に拳倒す黃鶴樓、一踢に踢翻す鸚鵡洲、意氣有る時意氣を添ふ、風流ならざる處也た風流。』

復た擧す、㋙蔣山贊元禪師、因に㋚荆公舒王、問うて云く、「如何なるか是れ佛法の大意。」蔣山答へず、舒王之れを扣く。既に久し、已むことを得ずして、之れに謂つて曰く、「公、氣を受くること剛大にして、世緣深厚なり、剛大の氣を以て、必ず能く身天下の重きに任ず。然れども用捨必する能はず、心之れ未だ平かならず、未だ平かならざるの心を以て、安ぞ能く一念萬念ならん哉」と。師拈じて云く、「大小大の贊元禪師、則ち草鞋を着けて、舒王の肚裡に向つて走ること千百匝すと雖も、殊に知らず、剛大の氣卽ち是れ此の道の大本にして、

㋗客作漢。賤人なり、心外に法を求むるを云ふ。
㋘滿面。一本には「面上」に作る。
㋙蔣山。覺海贊元は慈明圓に嗣ぐ。
㋚荆公。王安石なり、嘗淨克文に參じて嗣法す。

佛法の根源なることを。本當面に人を瞞ぜんと欲す、那ぞ自ら瞞ずることを成すことを知識せん矣。當時舒王、若し面皮を裂轉せば、甚れい處にか蔣山を討ねん。然も是の如くなりと雖も、舒王を見んと要することは則ち易く、蔣山を見ることは則ち難し。且く道へ、諸訛什麼の處にか在る、諸人還つて委悉す麼。」拂子を以て禪牀を擊つこと一下して云く、「伯牙と子期と、是れ閑相識にあらず。」便ち下座。

# 住二巨福山建長興國禪寺一語錄

侍者　道昭　景用　禪了　編

陞座、祝聖㊀據坐垂釣、「油㊁缸を出し得て醬缸に入る、通身是れ口、若㊂爲が談ぜん。老拳尙ほ些の筋力有り、命を拚つる來機爲に指南せん。有り麼有り麼。」僧有り出でて問うて云く、「目を極むれば春光水空を照す、岸莎汀草碧茸茸。時願に乘じて慇懃の請に赴く、大いに慈風を展べて祖風を振ふ。學人上來す、願はくは第一義諦を聞かん。」師云く、「杲日空に當り、淸風地を匝る。」進んで云く、「諸佛出世、地金蓮を涌す。和尙此の山に榮鎭す、何の祥瑞か有る。」師云く、「擘開す華岳蓮天の秀、放出す黃河一派淸し。」進んで云く、「但だ建長、瑞氣を增すのみに非ず、八方鼓舞樂んで忻忻たり。」師云く、「春眞國に行り、月千江に印す。」進んで云く、「大唐國日本國、宗風益振つて殊別無し。如何が是れ大唐國の佛法。」師云く、「㊃一棒一條の痕。」進んで云く、「如何なるか是れ日本國の佛法。」師云く、「一摑一掌の血。」進んで云く、「㊄恁麼ならば則ち一處通じて、千處萬處一時に通ず。」師云く、「只だ儞一箇未だ痛痒を知らざること在り。」進んで云く、「只

㊀據坐。一本には「據座」に作る。
㊁缸。かめなり。
㊂爲。一本には「何」に作る。
㊃一棒。一つ打てば一つ痕がつく。
㊄恁麼。寫本に任に作るは「恁」の誤ならん。

だ大檀那國公殿、特に禮請を加へて、和尚に開堂演法せしむるが如きんば、和尚數次、箚を啓して力め辭す。復た十五の偈を進めて控へ免れんとす、甚に因つてか究竟辭免することを得ざる。」師云く、「早く今日の事を知つて、悔らくは當初を愼まざることを。」進んで云く、「謂つ可し、佛佛道同じ、悲願重ねて廣開、利濟蒼生を沃す。」師云く、「好事も無きには如かず。」進んで云く、「玆の辰國公殿、親しく臨んで、㋑拱して法要を聽く、畢竟如何が指示せん。」師云く、「水に近うして樓臺先づ月を得、向陽の花木早く春に逢ふ。」進んで云く、「恁麼ならば則ち錦上に花を舖くこと千萬重。」師云く、「㋺這の一句子、却つて也た相似たり。」

乃ち云く、「諸佛未だ出世せず、祖師未だ西來せず、人人眞智湛然たり。好箇の清平世界、端無く胡種㋩孽を萌す。便ち見る毒惡流行することを。平地の干戈、風無きに浪を起す。遂に疆を分ち界を列ねて、東を移し西を補ひ、荆棘天に參り、葛藤地に遍きことを致す。然も是の如くなりと雖も、只だ世界未だ立せず、佛祖未だ興らざる已前の如きんば、如何が信を通ぜん。」良久して云く、「鯨海水を呑み盡して、珊瑚枝を露出す。」

復た擧す、臨濟和尚、因に王常侍相訪ふて、同じく僧堂に到る。常侍云く、「這の一堂の僧、還つて坐禪す麼。」濟云く、「坐禪せず。」常侍云く、「還つて看經す麼。」濟云く、「看經せず。」侍云く、「也た坐禪せず、也た看經せず、㋥必竟箇の什麼をか作す。」濟云く、「總に伊をして成佛作祖せしむ。」侍云く、「金屑貴しと雖も、眼に落ちては翳と成る。」濟云く、「將に謂へり、是れ箇の俗漢と。」師、拈じて云く、「臨濟老漢、氣寰宇を呑む、只だ一切の人を勘破せんことを要す、却つて王常侍に等閑に勘破せらる。諸人還つて知る麼、且つ箇の注脚を下すことを聽く。一挨復た一拶、一踢復た一拳、今古應に墜つる無くして、分明に目前に在るべし。」

㋺拱。手を拱して敬意を表するたいふ。
㋻這。一本には「此」に作る。
㋼孽。うれへ、又はわざはひなり。

當晚小參、僧有り出でて問うて云く、「空手にして鋤頭を把り、步行にして水牛に騎る。人は橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず、意旨如何。」師云く、「金剛の杵、鐵山を打摧く。」進んで云く、「如何なるか是れ空手にして鋤頭を把る。」師云く、「千聖も摸索し難し。」進んで云く、「如何なるか是れ步行にして水牛に騎る。」師云く、「覷著すれば則ち瞎す。」進んで云く、「人は橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず、又作麼生。」師云く、「却つて些子に較れり。」

乃ち云く、「有句無句は藤の樹に倚るが如し、樹倒れ藤枯れて、句何れの所にか歸す。須らく知るべし、言詮も及ばず、描貌すれども成り難きことを。潙山笑裡に刀有り、遂に叢林の話覇を致す。恁麼恁麼、大難大難、纔に一絲頭有れば、便ち百絲頭有り、獅子一滴の乳、百斛の驢乳を迸散す。然も是の如くなりと雖も、添へ得たり潙山の笑轉た新なることを。」

復た擧す、㋽乳源和尚、衆に示して云く、「西來的的の意、妨げず擧唱し難きことを。」時に僧有り出

㋾必。一本には「畢」に作る。
㋿乳源。不詳なり。

づ、乳源擘脊に便ち打つて云く、「如今是れ什麼の時節ぞ、出頭し來る。」便ち方丈に歸る。師拈じて云く、「正令行ぜず、曲を拗めて直と作す。這の僧若し痛痒を知らば、乳源方丈に歸ること未だ得ざること在らん。」

上堂、千斤の重擔を卸却して、惟だ要す在處淸閑なるとを。老來業債未だ脫せず、復た建長の一關に墮す。語音未だ辨ぜず、酬酢猶ほ艱し。說く者、聞く者、難復た難。只だ一條の白棒に據り、南來の者、北來の者、俱に痛棒を與ふ。忽然として打着す、一箇半箇獨脫底、從敎あれ道を知らん。酌然として說處不說處に在らず、三乘十二分敎、總に是れ空を指し空を話し、土を撒し沙を撒す、必竟如何。摘楊花、摘楊花。」

佛生日上堂、右脇より纔に生じて、便ち拍盲を放す、天を指し地を指し、獨步縱橫。雲門打殺せんと要す、建長助けて坑を掘る、惡種從敎あれ復た萠さざることを。然りと雖も也た是れ賊過ぎて後弓を張る。

結制上堂、昨日は晴れ、今日は雨、春夏交承け、時節序に順ふ。一へに林下の衲僧、規矩を越えず、三月安居し、克期して取るに似たり。西天には蠟人の氷を以てし、雲峰は鐵彈子を以てす。建長も亦一條の活路有り、飢ゑては則ち食ひ、渴しては則ち飲む。閑には則ち坐し、困じては則ち眠る。此れを以て據と爲す、諸人但だ恁麼に參ぜば、決して賺忤せじ。

解夏小參、「佛一音を以て法を演說す、衆生類に隨つて各得解す。敢て問ふ、大衆、且つ那箇か是れ一音所㊊演の法。是れ天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水なること莫し麼。是れ春は生じ夏は長じ、秋は收め冬は藏すこと莫し麼。斯の如きの理論、大いに火を撥ひ、浮漚を覓むるに似たり。且く道へ、是れ那箇の一音ぞ。」拂子を以て禪牀を擊つて云く、「一音既に演ぶ、直に得たり盡乾坤大地、若しくは聖若しくは凡、情と無情と、是の法音を聞いて、悉く悟解することを得るを。然も是の如くなりと雖も、唯だ拂子のみ有りて、這の保社に入らず。何が故ぞ、道ふことを見ず麼、山僧會せず、甲子を輪することを。一葉落ちて天下の秋を知る。」又擊つこと一下。

上堂、布袋頭を解開して、縱橫自由を得、其の住也拘無く束無し、其の去也南州、北州。溈山の水牯牛を放牧し、風流ならざる處也た風流。

兩藏主を謝する上堂、拄杖を拈じて大衆を召して云く、「大藏小藏、盡く這裡より流出す、諸人若し落處を知得せば、一生參學の事畢んぬ。其れ或は未だ然らずんば、且く拄杖子の從頭㋟點出するとを聽け。」左邊に卓一下して云く、「這箇是れ有敎。」右邊に卓一下して云く、「這箇是れ空敎。」中間に卓一下して云く、「這箇是れ中道の大乘經、三段同じからず。此の經を釋せんと欲せば、向下文長し、來日に付在す。」又卓一下。

㋠國公、本寺に就き、滿散祈禱の道場を普說を禮請す。「問答不レ錄」、乃ち云く、「大人大見を具し、大

㊊演。一本には「說」に作る。
㋟點。一本には「拈」に作る。
㋠國公。北條時賴を指す。

智大用を得、六合を胷藏し、乾坤を掌握す。碧油床に坐し、忍辱の鎧を被り、堅固の箭を執り、智慧の弓を乘つて、大千世界を總べて、一戰場と爲し、百億の須彌を指して、一射垜と爲す。百發百中、雙放雙收、百萬の妖魔を掃除し、㋕歩多の惡黨を剿絶す。便ち見る、時清く道泰に、海晏河清、八表仁に歸し、萬邦貢を入る、轡を頓いで自ら樂しみ、坐鎮憂無きことを。謂つ可し、我れ法に於て王たり、法自在を得と。正恁麼の時、且く道へ、功何れの所にか歸す。」良久して云く、「寸刄施さず魔膽碎く、風を望んで先づ已に降旗を竪つ。」

復た云く、「佛一切の法を說く、一切の心を度せんが爲なり。若し一切の心無くんば、何ぞ一切の法を用ひん。蓋し一切衆生、無始より以來、無知にして僻執するに由りて、惑を起し業を造り、五趣に輪廻す。如來出世、宜しきに隨つて爲に處中の妙理を說き、諸有情をして、諸法を了達し、疑執を遠離し、處中の行を起して、各自に修滿し、三菩提を得、寂滅の樂みを證せしむ。皆心の所作に由る。古德云く、『只だ箇の心、心心是れ佛、十方世界最も靈物、縱橫妙用可㋖怜生、一切心の眞實なるに如かず。五戒を持して人道に生じ、十善を修して天道に生ず、皆心の作に由る。有漏を捨てゝ無漏に入り、有爲を棄てゝ無爲に入るに至るまで、皆心の作に由る。蓋し善を造り惡を造る同じからず。所以に諸佛世に出でゝ、根を觀敎を逗めて、三乘の法門を演說す。乃至彼彼の類に隨ひ、彼彼の身を現じ、而も爲に說法す。此の法惟だ只だ一法、蓋し此の

㋕歩多。數多と同じきか。
㋖怜。一本には「憐」に作る。



一切心有るが爲に、機に應じて爲に一切の法を說く。根機に隨つて說くと雖も、人天大會の中に於て、亦㋗無生忍を悟るもの有り、阿耨菩提を證する者有り。亦會中に在りと雖も、聾の如く盲の如く曉解する能はざる者有り。蓋し證悟、淺深有り、得道、優劣有り、或は密に說いて顯に演べ、或は空を談じて實を顯す、或は敎外別傳の旨を指示す。只だ一切の人の自心を明め、自性を見て此の法を證するを要するに非ざる無し。此の法者、有に非ず無に非ず、有無に非ず、無無に非ず。若し說く處に在らずと道はば、一代時敎、甚れの處にか安着せん。若し說く處に在りと道はば、且く此の法作麼生か說かん。須らく是れ夙に靈骨有り、信根堅固にして、方に趣向の分有るべし。是の故に大檀那、夙に願力に乘じ、篤く佛法を信じ、歸敬切切にして、藏典を書寫し、披閱誦持す。究竟に非ざることを知つて、是れに由つて力めて敎外別傳の旨を究む。孜孜捨てず、食息も忘れず、徹證を以て期と爲す。是に知んぬ、大根器、大力量、再來の菩薩にして、方に能く此の如し、又能く大伽藍を搏め、國中第一の甲刹と爲し、廣く多衆を安じ、各大叢林の規式を知らしめ、各己躬の大事を參究せしめ、各敎外別傳の旨有ることを知らしむ。甚深廣大、以て佛の慧命を續ぎ、能く生死の此岸を離れ、菩提涅槃の彼岸に達し、廣く有情を度し、總に成佛せしむ可し。常に此の心を運し、愈堅く愈久しうして、能く是の如くなるを哉。老僧、乃ち獨邦に生長して、道を江湖に訪ふこと年有り、適法眷道舊、

㋗無生忍。委しくは無生法忍といふ、不生不滅の眞如法性を認知して得るところの決定位をいふ。

不忘の義、屢承の約、累却に復た至るに因つて、故を以て寺事を撒去し、暫く良便に乘じ、漠を越えて國の光を觀る。先づ承はるに、國公殿、特に降接を垂れ、一見故の如きことを。語音未だ通ぜずと雖も、凡そ動靜往來、語默酬酢、心眼相照す。只だ此れ吾が道を見るの眷屬なるを以て、然るを致す矣。便ち見る、瞿曇考、漢三百六十餘會、此の法を宣說す。或は人間、或は天上、說く者聽く者、心心相知り、眼眼相照す、今日の說く所聽く所と、等しく異なり有ること無きを。所以に道ふ、過去の一切劫を、未來❶今に安置し、未來の現在劫を、過去世に回置す、灼然として參到して、前後際斷す。三祇劫空にして、塵劫以來を照見し、絲毫も差無し。凡情聖量、一絲毫を覺むるに、了に不可得なり。所謂、一念普く觀ず無量劫、無去無來亦無住。是の如く三世の事を了知すれば、諸方便を超えて十力を成ず。參學の士、這裡に向つて見徹すれば、自己本地の風光、本來の面目、歷歷分明。方に知る、一代時敎、句句字字、別事を說かず、敎外別傳の旨と異無く別無し。或は三乘十二分敎中に於て明め得る者あり、或は敎外別傳の旨に於て明め得る者あり、總べて是れ家に到るの蹊徑。敎中に明め得る者は、終に是れ迂曲、敎の外に明め得る者は、妨げず直截なり。唯だ直截の一路、必ず能く家に到り、必ず大休大歇の場に至り、盡未來際、大自在を得。何が故ぞ、心意識を離れて參じ、聖凡の路を出で、學するを方に直截の者と謂ふなり。除だ是れ大根器大力量にして、方に煅煉するに堪ふ。無常迅速、等閑を作すこと莫れ。古德云く、『努力して

❶今。一本には「劫」に作る。



今生に須らく了却すべし、永劫に餘殃を受けしむること莫れ。決然人身得難く、好時逢ひ難く、知識遇ひ難く、正法聞き難し。既に人身を得て、袈裟體に著く、好時既に逢ひ、知識既に遇ひ、正法既に聞く、地を削つて將つて事を爲す。』蓋し是れ曾て般若の種子を種得せず、聞けども聞かざるに似たり、見れども見ざるに似たり、遇へども遇はざるに似たり、蹉過する者多し。蓋し此の一切心有るが爲に、所以に佛一切法を說く。山僧春夏より秋に至り、意旨を奉じて、國の爲、民の爲、祈禱道場を啓建し、日に初中後三時を以て、大衆を領じ、熏修披閱し誦持して、專ら豐❷稔太平を祈る。今來果して懇祈を遂ぐ。玆の辰滿散、陞座して衆の爲に普說す。此の心を以て此の法を說いて、諸佛龍天を感格するに非ざる無し。玆の誠禱を鑒みるに、吉祥中の吉祥、殊勝中の殊勝なり。乃ち是れ此の心、此の法の靈驗なり。衆中辨道の兄弟、爲に敎中に在つて明め得、爲に敎外に在つて明め得、往往風の樹を過ぐるが如き者多し。灼然として是れ小事にあらず、佛法の下衰、今日より甚だしきは無し。老僧在る處の叢林、衆中辨道の兄弟を見る毎に、孜孜切切、晝夜を捨てず、大事を徹證するを以て期と爲す。或は一箇半箇有り、挨し將ち出で來つて、大法を弘持せば、舊に依つて古今を超出する者多し。若し是れ道念堅からず、力量大ならざれば終に大法を希求し難し。豈に見ずや、趙州云く、「諸人は十二時に使はる、惟だ老僧十二時を使ひ得たり。」且く道へ、他甚れの處にか在つて著到する。是れ汝諸人、若し眞箇に孜孜切切として、只だ己躬の一

❷稔。一本には「年」に作る。

件、生死の大事を將つて、晝參夜參、之れと與に厮厓して、片時も㋟肯て放捨せずんば、灼然として十二時を使ひ得ん。若し只だ今日明日、張三を點檢し、李四を點檢し、人の好を說くを聽いては便ち好と道ひ、人の不好を說くを聽いては便ち不好と道ふ。之れを矮子、戲を看ると謂ふ、人に隨つて上下す。自己に於て舊に依つて黑漫漫地、空しく光陰を喪す、覺えず老病將に至らんとすることを。生死到來せば、何を將つてか抵敵せん。驢胎馬腹、疑ふ可き者無し。蓋し虛しく檀越の信施を消し、枉げて人天の供養を受くるに緣つて、自己の工夫を棄却し、只だ他人の過惡を說く。他人若し過惡無くんば、粧點して强ひて是非を說く。之を以て能と爲す、三塗地獄、如何が逃れ得ん。此れは是れ決定の義、經敎の所說と一同なり。且つ是れ誑謊の語にあらず、信ずるも也た好し、信ぜざるも也た好し。老僧千錯萬錯、漠を越えて乍ち此間に到る。衰晩の質、語音未だ通ぜず、上命を却け難きを奈ともすること無くして、勉め力めて住持の職を支撐す。陞堂入室、示衆普說、曾て缺けずと雖も、垂手の際、自ら嘆く、枉げて精神を費すことを。大凡そ出家の士、身を叢林の中に置き、佛袈裟を披し、佛屋に住し、佛飯を喫す。須らく是れ佛戒を持し、佛行を修し、佛法を弘め、佛の慧命を續ぐ可し。或は出で來つて事を辨じ、叢林を補佐せば、須らく是れ始め有り終り有り、善を盡し美を盡すべし。叢林の典刑を成就せば、卽ち是れ自己を成就す。方に禪和子と名け、方に佛弟子と稱す可し。若し然らざる者は、何に緣つてか大事千了百當することを

㋟肯。一本には「敢」に作る。



得ん。臘月三十日到來せば、謂つ可し、緇田、一簣の功無く、鐵圍、百刑の苦に陷ると、是れ誰が過ぞ歟。蓋し是れ道念壁からず、力量大ならずして、此の差別有り、所謂佛法下衰すること、今日より甚だしきは無しと云ふもの是れなり。若し此の心此の法を說かば、說いて盡未來際に到るも、窮盡有ること無けん。在會の聽く者、聞く者、俱に龍華の記別を受く。一頌子有り、願心を圓滿せんが爲に、大衆に擧示し奉る。國の爲、民の爲に此の心を運す、果符虔んで禱る豐榮を得んことを。時淸く道泰にして封疆闊し、合國歡呼して太平を賀す。」

上堂、「一塵正定に入れば、諸塵三昧起る、諸塵正定に入れば、一塵三昧起る。三昧と正受と、土塊を泥裡に洗ふ。咦。白日堂堂たり眼に鬼を見る、非も非にあらず、是も是にあらず。甲子乙丑海中の金、丙午丁未天河の水。諸人若し也た會せずんば、且く拄杖子の當陽に指示するを聽け。卓一下して云く、「今朝是れ九月一、明日は是れ初二。」又卓一下。

諸山至る上堂、云く、「開爐の節、何をか說く可き、無賓主の話、口に霜雪を含む。既に知音に遇ふ、謾に且つ拈掇す。是れ汝諸人、切に胡亂に挑撥す可からず、默默として之れを守る、忽然として冷灰豆爆す。方に知る道ふことを、文武の火種磨滅し難し。」

㋠別山　㋡斷橋二法兄の訃音至る上堂。南山白額の蟲、太白峰に撞倒す。直に得たり西湖底に徹して枯渴し、東海の㋢怒濤空に翻ることを。安漢の

㋠別山。前に見ゆ。
㋡斷橋。前に見ゆ。

㋙圭峯掌を㋚拊ち、天台の尊者胸を搥つ。郎忙たり、日本國裡に鼓を打つて、大唐國裡に鐘を撞く。何ぞや、兄弟十字を添ふ、此の意孰か能く窮めん。」膝を拍つこと一下して、噓一聲して下座。

㋛東福法兄到る上堂。同じく㋜龍困を飲み、同じく師席に依る。切蹉琢磨、相滋し相益す。袂を東西に分つて、各祖令を提ぐ。漠を越えて來り投じ、心膽傾け盡す。別を執る恰恰として一周、千里俯して輝映を垂る。衆を擧げて再び慈光に奉ず、雲を撥つて日を見るに異なる無し。若し是れ向上向下ならば、總に將つて之れを一壁に靠く。何ぞ也。憶ひ得たり㋝凌霄蠱毒の家、水も也た曾て他の一滴をも沾さず。呵呵呵。會す麼。青山鎖さず長飛の勢、滄海合に知るべし來處の高きことを。

上堂、「吾れ本茲の土に來り、傳法して迷情を救ふ。一花五葉を開き、結果自然に成る。」拈じて云く、「老胡、般若多羅の讖記を受け、區區として十萬里より海に航して來つて、梁に遊び魏を經て、冷座すること九年、以至、皮を分ち髓を分つ。將に謂へり、多少の奇特有りと。付法の一偈に及んでは、便ち見る敗缺少からざることを。建長は是れ他の的傳正脈の兒孫なりと雖も、曾て脚を將つて他界を踏まず。茲に至つて遠忌の臨みに遇ふ、齋に因つて慶讃す。亦一偈有り、大衆に擧示せん。吾れ本茲の土に來る、法の人に與へて傳へしむる無し。蛇と成つては草に入り、龍と成つては天に上る。」

㋞怒濤。一本には「怒浪」に作る。
㋟圭峰。宗密禪師なり。
㋠拊。一本には「拍」に作る。
㋡東福法兄。聖一國師、師と同じく無準範に嗣法す。
㋢龍困。徑山の丈室の銘なり。
㋣凌霄。徑山にあり、故にここでは徑山の無準をいふ。



㋤天台山萬年寺の二㋥童行㋦化主至る上堂。「人は天台より來る、却つて西川の信を得。報道す、萬年の松は生ひて石橋の頂に在り、豐干不合にして饒舌、累拾得寒山に及ぶ。奮つて身を顧みず、南に奔り西に走る、直に東海龍王の窟宅に趍き、蒼龍頷下の明珠を探抉す。懷抱して歸つて、廣く利益を作す。惟に十虛を照徹して、光萬象を呑むのみにあらず、直に大海をして變じて桑田と作さしむ。千手大㋧悲、重ねて光彩を增して、五百大士を驚起す、各各定よりして起ち、蒸餅峯を擘開し、斷橋の水を吸盡す。合掌して贊して言ふ、善哉善哉、希有希有と。大唐國、日本國、千古の光、能く超越することを得。然も是の如くなりと雖も、」拄杖を以て一圓相を打して云く、「諸人還つて此の大寶珠の來處を知る麼。」卓一下して云く、「若し容易に得せしめば、便ち等閑の看を作さん。」拄杖を擲つて下座。

㋨西巖の訃音至る上堂。「近ごろ遠來口傳の信を得、報道す年來頗る安靜と。有り、虛空を撞破して百雜碎。西川大蓬山上の石女を驚起して、涙雙び垂る。扶桑巨福山中の木人を引き得て、空しく嘆息す。甚に因つてか此の如くなる。」良久して云く、「同じく龍困無義の水を呑んで、手足義重きこと膠漆の如し。」膝を拍つて云く、「斷紘安ぞ鸞膠の續ぐことを得ん。」冬節小參、圓なること太虛に同じく、無缺無餘、良に取捨に由る、所以に不如なり。豈に道ふこと㋩唯だ太白瑞巖翁のみ

㋤天台山。國清寺のこと。
㋥童行。未得度の僧を云ふ。
㋦化主。勸募を掌る役をいふ。
㋧悲。一本には「士」に作る。
㋨西巖。名は了惠、無準範に嗣ぐ、師と同參なり。
㋩唯。一本には「只」に作る。

を見ずや、我が指を按ずるが如き、海印光を發すと。這裡に眼鬼を見去ること差事と爲さず、設し或は汝暫く心を擧すれば、便ち見る塵勞先づ起ることを。須らく知るべし、群陰剝盡すれども、而も剝盡の蹤無し。一陽復生すれども、而も復生の㋓跡無し。既に蹤跡無し、迥に承當を絕す。鐵樹花を開いて鼻を撲つて香し。

復た擧す、雲門和尚上堂、僧問うて云く、「請ふ、師答話せよ。」雲門、大衆を召す、衆、頭を擧ぐ。雲門卽ち下座。師拈じて云く、「雲門、恁麼の答話、已に是れ舌頭、地に拖き了れり。然りと雖も未だ擧せざる已前に薦得するも、早く是れ持論するに堪へず。何に況んや蓋覆し將ち來るをや。」乃ち高聲に大衆を召す、衆、頭を擧ぐ。復た云く、「果然。」便ち下座。

冬節上堂、「冬至の寒食一百五、中に一轉平實の語有り、缺齒の老胡擧して全からず、他の雪に立つ人を賺して莽鹵ならしむ。諸人知らんと要す麼。」良久して云く、「猫兒偏に老鼠を捉ふることを解す。」

上堂、「臘月八夜眼鬼を見て、便ち大口を開いて道理を說く。若し衲僧の門下に向つて過ぎば、爛槌に一頓せられんこと疑無けん。拳を助け踢を助くる底有り麼。」日本の鄕談を操つて云く、「和蘇嚕之。」

㋒最明寺殿、夢に應じて、本寺に就いて、僧に命じて金剛經萬卷を看せしめて、天下太平を保せんことを祈る。滿散陞座を請ふ。〔問答不レ錄〕、乃ち云く、「一切有爲の法、夢幻泡影の如く、露の如く

㋓跡。一本には「蹤」に作る。
㋒最明寺殿。北條時賴なり。



亦電の如し。應に是の如きの觀を作すべし。」纔に大衆を召して云く、「是の觀を作す者をば、名けて正觀と爲す、若し他觀する者をば、名けて邪觀と爲す。若し唱教門中に於ては、神を瞞じ鬼を誑く可きに足る。若し衲僧門下に於ては、大いに鄭州に、曹門を出づるに似たり。則ち瞿曇老人、般若會上に於て、無中に唱へ出すと雖も、豈に謂はんや後五百歲、盲驢に繫縛せられて、自由の分無けんと。豈に見ずや、㋐葛獠故無くして、應無所住而生其心と誦するを聞いて、言下に錯つて㋑驢鞍橋を認めて、阿爺の下頷と作し、累㋔周金剛に及ぶ。一擔の疏鈔を焚却し、便ち敢て胡撼亂打、也た大いに端無し。殊に知らず、我が王庫の內、是の如きの刀無し。須らく知るべし、三世の諸佛夢を說き、歷代の祖師夢を說く。一人虛を傳へて、萬人實を傳ふ。西天東土に遍滿して、能く止遏すること莫し、覺えず知らず、日本に流傳す。最明寺殿、白日靑天に、眼を開いて夢を說く、一に靈山會上に親見親聞するに似たり。無異無別、建長氣有れども出す處無し、從つて好惡を㋕識らず。大集殿に向つて、衆に對して之れが與に說破す。淸平世界、切に訛言を忌む。直に天下太平、兵戈戰を絕ち、國安く民泰に、歲稔り時豐に、飢ゑては則ち飡ひ、渴しては則ち飲す。閑なれば則ち坐し、困ずれば則ち眠る。事に於て無心なり、事に無心にして無欲無依ならしむ、豈に慶快ならずや。然も是の如くなりと雖も、水を掬すれば月手に在り、花

㋐葛獠。六祖惠能大師を指す、或は獦獠に作る。
㋑驢鞍橋。驢馬の背骨、これは妄想分別を認めて佛性となすことなかれとなり。
㋔周金剛。德山を指す。
㋕識。一本には「知」に作る。

を弄ずれば香衣に滿つ。」

復た擧す、舍利弗、須菩提に問ふ、「夢中六波羅密を說く、覺むる時と同か別か。」須菩提云く、「此の義幽深なり、吾れ說く能はず。此の會中に彌勒大士有り、汝彼に往いて問へ。」拈じて云く、「舍利弗、眼を開いて夢を說く、須菩提寐語嚪言す。建長憤氣甘はずして一時に按過す。因に一頌を成して、大衆に擧示す。夢中演說す六波羅、覺むる時と同別苦に他に問ふ、今日最明重ねて演說す、更に一字も誦訛有ること無し。阿呵呵。會すや也た麼や。好し是れ太平無事の日、酌然として許さず干戈を動すことを。」喝一喝。

㋐徑山佛鑑忌拈香に云く、「毎年三月十八、憶着すれば痛恨骨に入る。巨福山上に凌霄を望めば、萬重の山海烟波濶し。謾に一炷の兜羅木を爇いて、唵。」引く、「噴噴嚴嚴。」

㋑樗寮の字、阿彌陀經に偈を書して最明寺殿に送る。

我れに大經卷有り、量三千界に等し、親しく最明殿に付して、壽を祝するに滄海の如くならん。但だ願はくは此の經を得て、當下に此の心を明めんことを。的に知る胡達磨、元少林に在らざることを。

最明寺殿契悟の因緣

㋐徑山佛鑑。無準師範を指す。

㋑樗寮の字。字は「寫」の字の誤ならずや。原本の寫本に「字」を「あざな」とあるも不審なり、何となれば、樗寮は宋の張卽之の號なり、恐らくは卽之の書寫せし彌陀經か、卽之は師と同時代の人なり。



㋒壬戌十月十六の朝、最明、啓問して曰く、「弟子近日坐禪、非斷非常底を見得す。」師云く、「參禪は只だ見性を圖る、若し見性を得れば、方に千了百當することを得ん。」最明曰く、「和尚方便指示せよ。」師云く、「天下に二道無く、聖人に兩心無し。若し聖人の心を識得せば、卽ち是れ自己の本源自性なり。」最明曰く、「弟子㋓道崇無心なり。」師云く、「若し眞箇無心ならば、竪に三際を窮め、横に十方に遍からん。燭を指して云く、「譬へば蠟燭の未だ澆成せざる以前の如き、卽ち是れ本地の風光、本來の面目なり。澆成して點熱輝耀するに至るに及んで、雅に㋔明暗を照徹し、人人瞻望するを觀る。末期に燭盡き光極まる、舊に依つて前の如き消息なり。佛出世して人を度するも亦復た此の如し。未だ出世せざる以前、淨法界身、本出沒無し、大悲願力を以て示現し、出世成道、上中下の根機に隨つて、三乘十二分教を演說す。花を拈じて衆に示し、爲に聖凡人天の大衆をして、明心見性せしむ。末後に無餘涅槃に入る、亦一條の蠟燭の如し。二無く別無し、萬古流通して、直に今日に至る。若し此の性を見ば、直下に便ち見ん。」良久して云く、「見る麼。」最明曰く、「森羅萬象、山河大地、自己と無二無別。」師云く、「青青たる翠竹盡く是れ眞如、鬱鬱たる黃花般若に非ざるは無し。」最明言下に忽然として契悟し、通身汗流る。乃ち曰く、「弟子二十一年旦暮に望む、今一時に已に滿足す」と。感淚數行、作禮九拜す。師卽ち起つて、佛前に燒香す。之れが與に印可し、卽ち自身の法衣一頂を以て之れ

㋒壬戌。龜山天皇弘長二年なり、時賴はその翌年十月に卒す。

㋓道崇。時賴の法名なり。

㋔明。一本には「冥」に作る。

を付して祝して云く、「公箇の田地に到り易からず、宜しく善く護持して、法をして久住せしむ可し。親しく法衣を付して、以て燈燈相聯り、佛の慧命を續ぎ、以て末運を光し、萬世愈榮えんことを表す。」次に爲に付法の偈を說く。

我れに佛法の一字も說く無し、子も亦無心無所得。無諍無得無心の中、釋迦親しく燃燈佛を見る。

最明寺殿悟道の後、師之れに助道の偈五首を贈る。

老僧初めて到つて三拳を與ふ、恨を胸中に埋めて此の寃を結ぶ。痛恨忽ち消して正眼を開く、方に知る吾れ妄に宣傳せざることを。

悟了還つて未悟の時に同じ、着衣喫飯時に順つて宜し。起居動靜曾て別無し、始めて信ず拈花の第二機なることを。

二十一年曾て苦辛す、經を尋ね論を討ねて枉げて精神。驀然摸着す娘生の鼻、翻つて笑ふ胡僧吻唇を弄ずることを。

治國治民共に外事、存心存念自ら工夫。心思路絕えて瞻觀看す、佛も也た無し兮法も也た無し。

壬戌十月十六朝、虛空拳踢相饒さず。等閑に疑團を打破して後、大地の黃金も也た合に消すべし。

最明、一善知識を夢む、堅固の叅禪を敎訓せらる、惺めて後繪いて供養す。兩年を越えて、老僧の到るに値ふ。先づ來つて參禮す、果して夢に見ると一同なり。契悟して後、畫く所の頂相を捧呈して ㊆ 讃を求む。

千煅萬煉工夫熟す、感得す夢に善知識を見ることを。力め勸めて工を加へ用つて行修す、果して契悟を得て心滿足す。自ら醜惡を彰し自ら搔糊す、佛祖仰望 ㊇ 俱に色を失す。老僧更に與に一重を添ふ。咄。 ㊈ 急急如律令、勅。

長書、最明寺殿に上る

昨に使者の云く、「最明寺殿、乃ち大風に百物を損せられ、天下萬民辛苦するに因りて、御心中憂悶して樂しまず。」此れを以て見る可し、人を憂へて己を憂へざることを。乃ち是れ佛菩薩の用心も此の如し。老僧病中に在りと雖も、亦己を憂へず、惟だ衲子の己事未だ明めざるを憂ふ。所謂天下に二道無く、聖人に兩心無しといふもの是れなり。佛在世の時、瞿曇の種族、將に大風火難の侵す所に遭はんとするに因りて、急に來りて佛に投じて之れを免れんとす。佛云はく、「免るること得じ。」何を以ての故に、衆生造業の多く、共業の感ずる所、之れを定業逃れ難く、劫數逃れ難しと謂ふ。若し一向安樂にして如意なる者は、罪福の來源を知らざるなり。繼いで卽ち瞿曇の種族、風火に爇き盡さる。所以に佛に三能三不能有る者なり。記得す、古德、衆に示して云く、「昨日洪水大いに作る、華山崩倒す、數萬の人家を湍壞し了る。儞が輩後生、什麼をか知らん、茄子と瓠子と、語中に ㊀ 理有

㊆ 讃。一本には「贊」に作る。
㊇ 俱。一本には「共」に作る。
㊈ 急々如律令。必ず守るとの誓言なり。
㊀ 理事。差別と平等と。

り事有り、憂有り憂へざる有り。當時若し通方作略の者有らば、只だ好く他の㊐與に禪牀を掀倒して、便ち一場の敗缺を見ん。」又記得す、老東山演祖云く、「諸莊旱澇することを憂へず、惟だ禪和子の狗子無佛性の話を會せざるを憂ふ。」老東山纔に臭口を開いて、㊅便ち鄉談するを見る、㊆尅由㊇耐なり。又記得す、㊈太宗皇帝、蝗蟲大いに作りて、天下萬民の稻苗を喫盡するに因り、帝人をして蟲を捉へ來らしめ、自ら之れを喰ふて云く、「只だ朕が心肝を喫せよ。我が天下萬民を苦しむる莫れ。」是れに由つて蝗蟲便ち息む。此れも亦是れ民を憂ひて己を憂へず、老東山と手を把つて共に行くが若し。猶ほ三歩に較れり、五濁惡世に在つて、成劫・住劫・壞劫・空劫、輪轉して息まざれば、便ち大の三災有り、風災・火災・水災之れに隨ふ。欲界の天、色界の天、尙ほ免れざるなり。又小の三災有りて之れに隨ふ、病苦・飢苦・儉苦なり、五濁世中必ず逃れ難し矣。惟だ前身に福を作す有れば、今身に受くるなり。若し前身に業を成す者は、定定今身後身更に後身に受くるなり、絲毫も差ふ無し。所以に佛出世して、人を勸めて福を作し罪を避け、貪嗔癡の妄念の業を息め、戒定慧の三無漏の學を修せしむ。淺より深に至り、凡より聖に至り、劫より劫に至り、乃至無數劫まで、功㊉行圓滿、必ず能く佛の大果を證す。五濁世間に却來して、機に隨つて爲に最上乘の法を說き、悉く阿耨菩提に證入せしむ。亦菩提の得可き無く、亦證入の理無

㊐與。一本には「爲」に作る。
㊅便。一本には「卽」に作る。
㊆尅由㊇耐。尅由は「したがひよる」なり、㊇耐は「たふる」なり。
㊈太宗皇帝。宋の第二祖なり。
㊉行。一本には「業」に作る。



し。所以に、千佛萬佛、唯だ此の法を以て傳持して、佛佛祖祖、無二無別なり。況んや今末劫の時、道古に及ばず、道を說く者多く、道を行ずる者少きをや。日本に宗門を興し掀むること、唯だ我が最明寺殿、再來の佛にして、心を佛法に留め、道念堅固にして上古の聖人に超越すること一頭地なり矣。禪衲中、道に向ふ者多し、堅固の者少し。老懷唯だ向後の弊を憂ひ、古に及ばざるを恐るるなり。諸莊旱澇するも亦憂ふ、大の三災、小の三災も亦憂ふ。禪和子の狗子無佛性の話を會せざることも亦憂ふ、自己の老病も亦憂ふ。未だ脫げて宋に回り、㊊老するを得ざるも亦憂ふ。此の千憂萬憂、直に憂へて阿逸多の下生に至る、又更に一重の憂を添ふること在り。能く老僧が興に、此の憂を免れ得んや否や。憂と樂と、好と惡と、是と非と、古と今と、佛と祖と、一劃に劃斷して、便ち天下太平を見るに若くは莫し。病を扶けて筆に信せて上る。希はくば一覽せよ矣。

最明、夢に寺中の僧堂、盡く是れ高僧羅漢にして、上頭の一箇大棟梁なることを見る。惺めて後卽ち發心して、重ねて新に㊋鋪蓋の工畢る。

上堂云く、「檀那夢に大棟梁なることを見る、高僧羅漢雲堂に滿つ、慷慨重ねて新に鋪蓋して就る。之れを兜率に比するに更に尤も强なり、衲子辨道長久に耐ふ。成佛作祖法中の王、下等愚迷にして正念無し、鎔銅口に灌いで鐵床に臥せん。」

結制小參、「有處是れ有に非ず、無處是れ無に非ず、有無到らざる處、馨香道塗に滿つ。」驀に大衆を

㊋鋪蓋。やれがへのこと。

召して云く、「縱饒ひ窮めて此に到るに及ぶとも、猶ほ未だ是れ衲僧が安身立命の處に非ず、更に什麼の三月護生、九旬禁足とか說かん。大いに布袋裡の老鴉に似たり、活すと雖も死の如し。若し是れ丈夫の志氣ならば、必然として別に通方の作略有らん。」良久して云く、「有り麼。」禪牀を擊つこと一下して云く、「將に謂へり春歸つて覓むる處無しと。那ぞ知らん轉じて此の中に入り來ることを。」

復た擧す、金峰和尚、衆に示して云く、「二十年前、老婆心有り、二十年後、老婆心無し。」僧有り出でて問うて云く、「如何なるか是れ二十年前、老婆心有る。」峰云く、「凡を問へば凡を答へ、聖を問へば聖を答ふ。」僧又問うて云く、「如何なるか是れ二十年後老婆心無き。」峰云く、「凡を問へば凡を答へず、聖を問へば聖を答へず。」師拈じて云く、「金峰年老いて心孤なり、這の僧眼有りて耳無し。他の恁麼に道ふを待つて、便ち與に禪牀を掀倒せん、豈に俊快ならざらんや。建長が這裡、縱ひ猪狗を咬む手脚有る底出で來るも、棒折るゝとも未だ放過せざること在り。」

上堂、擧す、智門和尚、僧問ふ、「蓮華未だ水を出でざる時如何。」答へて云く、「蓮華。」「水を出でゝ後如何。」答へて云く、「荷葉。」頌に曰く、「水を出づるも未だ水を出でざるも、心に疑へば暗鬼を生ず。㋟鞏縣に茶瓶を造る、一隻三箇の觜。」

上堂、擧す、趙州、僧問ふ、「萬法一に歸す、一何れの處にか歸す。」趙州答へて云く、「我れ青州に在りて一領の布衫を作り得たり、重きこと七斤。」師頌して曰く、「青州の布衫重きこと七斤、由來錯つて

㋟鞏縣茶瓶。多口多嘴。



定盤星を認む。那ぞ知らん富士山孤俊にして、頂に到ることは須らく行くこと三日程なるべし。」

達磨祖師忌拈香、大衆を召して云く、「東のかた大乘の器を望んで、區區十萬里、這の一着の錯に因りて、累に人の臂を斷つに及ぶ。」香を以て祖師を指して云く、「彼の錯猶ほ且つ可なり。」復た自ら指して云く、「此の錯巴鼻無し、彼錯此錯、之れを誰にか訴へん。」香を挿んで云く、「倒に鐵笛を拈じて逆風に吹く。」

徑山の㋠偃溪・玨荆叟、國淸の源㋡靈叟等の訃至る上堂。「澗東の一脈、滔滔聒聒、偃溪を接して波騰嶽立、甬東西湖、奔湍迅速にして、本に返り源に還る。龍淵の窟宅、直に得たり凌霄起つて舞ひ、五峰唱拍することを。引き得たり天台山國淸寺東廊の上、寒山拾得、生笻箒を颺下して、掌を拊つて呵呵たり。金華の傅大士、空手鋤頭を把り、涕淚悲泣することを。正恁麼の時、諸人還つて三大老、人の爲にする親切の處を知る麼。」膝を拍つこと一下して云く、「憶着すれば人をして肝膽裂せしむ。」

上堂、擧す、乾峰和尚、僧有り、問うて云く、「十方薄伽梵、一路涅槃門、未審し路頭什麼の處にか在る。」乾峰、拄杖を以て畫一畫して云く、「這裡に在り。」僧有り、雲門に請益す、門云く、「扇子㋛跨跳して、三十三天に上り、帝釋の鼻孔に築着す。東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨、盆を傾くるに

㋠偃溪。名は廣聞、浙翁琰に嗣ぐ。荊叟の名は玨なり。
㋡靈叟。名は道源、無準に嗣ぐ。
㋛跨。一本には「勃」に作る。
㋜崑崙吞棗。方語に「其の味を知らず」とあり。

似たり。」師拈じて云く、「兩箇の老凍儂、一人は㋐崑崙にして箇の棗を呑み、一人は雪を蘸して冬瓜を喫す。這の僧の口裡水碌碌地なることを引き得たり。」驀に拄杖を拈じて云く、「建長が拄杖子、忍俊不禁にして、總に各各三百六十の骨節、八萬四千の毛竅を㋒將つて、一時に穿却す。」卓一下して、「然も是の如くなりと雖も、諸人還つて甘ふ麼。」良久して云く、「其れ或は未だ然らずんば、妨げず重ねて注脚を下すことを。」乃ち云く、「冬天日短く、兩人一椀を共にす。唵阿盧勒繼娑婆訶。」拄杖を擲つて下座。

臘八上堂、夜夜明星現じ、時時兩眼開く。如何が臘月八、特地に奇哉と嘆ずる。引き得たり、邪に隨ひ惡を逐ふもの、今に至るまで一味に狗、腮に來ることを。

㋓退院上堂、「無心にして此の國に遊び、有心にして宋國に復る。有心無心の中、通天路頭活す。」拄杖を擧して云く、「拄杖頭邊に日月を挑ぐ。」

合國悲泪勸留す、師堅く執つて允さず、㋔部從遠く送つて舡に上り、列拜泣別、順帆卽ち舊隱に復る。

又公選を被つて、婺州の雙林に住持す、七次控辭すれども得ず。

㋒將。一本には「以」に作る。

㋓退院。時賴の卒する弘長三年なり。

㋔部從。時宗公はその部從を差遣し、博多に到らしむ。

# 住婺州雲黃山㋑寶林禪寺語錄

侍者　景用　編

三門を指して、「衲僧門下、活路通天、脚頭脚底、能く方能く圓。」大衆を召して云く、「照顧せよ當住の磚を踏破することを。」

佛殿、「如何が是れ佛。殿裏底。咄。端無く口を開けば、便ち臭氣鼻を掩ふに及ばず、只だ五體地に投ずることを得たり。」

㋺傳大士殿、「七佛其の前を引き、維摩其の後を接す。一盲衆盲を引く、今に至るまで㋩不唧溜。咄。」

方丈に據る、拄杖を拈じて衆に示して云く、「吽吽。」擲下して云く、「道ふことを信ぜずや。」便ち起つ。

㋥省箚を拈じて云く、「靈山の佛法、國王大臣に付囑す、有力の檀那、燈燈相續ぎ、綿綿絕えざらしめ、直に今日に至る。愈光り愈顯る。汝等諸人、各難遭の想を生じて、拱して首座の宣讀することを聽け。」

㋑寶林寺。傅大士を開山とす。
㋺傅大士。又善慧大士といふ。
㋩不唧溜。馬鹿もの。
㋥省箚。一本には「雀箚」に作る。又「付囑」を「咐囑」に作る。

法座を指して、「向上の一路、千聖不傳、等閑に踏著すれば、半錢に直らず。」祝聖、次に香を拈じて、「太傅平章國公の爲に、祿位を增崇し奉る。」次に香を拈じて、「判府殿撰侍郎、判縣軍正寶謨郎、鄉府縣、文武官僚の爲に、各祿算を增し奉る。」據座、「問答不錄」、拄杖を拈じて云く、「拄杖頭邊、草鞋跟底、緣に隨つて放曠し、隱遁して時を過す。豈に謂はんや業債逃れ難く、復た他家の總續に落ちんとは。病を扶けて拖泥帶水、只だ竪四橫三、時に乘じて㋕正續山と雲黃山とを拽取して、額を鬪はしむるを得。復た是れ神通遊戲と爲んか、復た是れ法爾如然と爲んか。道ふことを見ずや、浙東の山、浙西の水、四海五湖皇化の裏。」卓一下。

㋕正續雲黃。徑山と寶林と。

復た擧す、世尊初めて生下し來つて、一手は天を指し、一手は地を指して云く、「天上天下唯我獨尊。」後來雲門道ふ、「我れ當時若し見ば、一棒に打殺して、狗子に與へて喫せしめんには。貴ぶらくは天下太平を圖らん」と。拈じて云く、「跛脚の阿師、徒に此の語有り、雙林は則ち然らず。我れ當時若し見ば、便ち與に一喝を兜せん。復た向つて道はん、黃口の小兒什麼をか道ふ、淸平世界、切に訛言を忌むと。」

當晚小參、久しく雙林と響く、曾て歷遊するに可なりと。到り來るに及んで、果して是れ殊別なり。山環り水繞りて、寺廣く人稀なり。內空外空、無彼無此。彷彿たり威音那畔、分明なり古佛の家風。

妨げず雲頭を按下して、鉢囊暫く且つ高く掛く。坐すれば則ち同じく坐し、行けば則ち同じく行く。苦を同じうし甘を同じうし、憂を同じう〜樂を同じうす。必竟事作麼生。但だ看る人情若し好ければ、自然に水を喫するも也た肥ゆ。

復た擧す、南泉の道く、「我れ十八上にして、便ち活計を作すを解す。」趙州道く、「我れ十八上にして、便ち破家散宅を解す。」拈じて云く、「二古德、各家風を擅にすと雖も、未だ免れず天下の衲僧の鼻孔を笑破することを。雙林力を出して跨跳すれども、也た他の總續を出で得ず、纔に門に入り來れば、乃ち見る之れを破つて又破り、之れを損して又損し、淨裸裸赤洒洒として把る可き㋩沒きことを。亦未だ免れず天下の衲僧の鼻孔を笑破することを。然も是の如くなりと雖も、或は東君の力を借るに遇はゞ、便ち意を生ずること有らん、如何が見得せん。前村深雪の裡、昨夜一枝開く。」

冬夜小參、「破砂盆、漏燈盞、偸心を死し、正眼を滅す。之れに近づけば則ち愈遠く、之れに親しめば則ち愈疎なり。之れを瞻れば前に在るかとすれば、忽然として後に在り。全明全暗、雙放雙收、㋟番つて復た看來れば、甚の熱大にか當らん。是は則ち也た是、只だ進前叉手し、叉手進前するが如きんば、又作麼生。」良久して云く、「冬春の令を行ず。」

復た拄杖を拈じて衆に示して云く、「雲門大師道ふ、『從上の諸聖、甚麼と爲てか這裡に到らざる。』㋠

㋩沒。一本には「無」に作る。
㋟番。翻の誤か。
㋠蓮花峰庵主。奉先深に嗣ぐ、雲門三世なり。

蓮華峰庵主道ふ、『古人這裡に到る、甚麼と爲てか ㋕肯て住まらざる』と。」拈じて云く、「要津を把斷して凡聖を通ぜざることは、則ち二老に無きに非ず、要且つ人の爲にする底の道理無し。雙林は則ち然らず、到ると到らざると。」㋖拄杖を卓すること一下して云く、「一時に截斷す。且く道へ、還つて爲人の處有りや也た無や。」拄杖を擲つて下座。

冬至上堂、「一陽來復して、暖、幽谷に回る、雲黃山上、喜氣空に浮び、綉水溪頭、疎影玉を含む。老胡轉身の句を會せず、無節目の中に節目を生ず。」拄杖を拈じて云く、「累拄杖子に及ぶ、皮膚脫落し盡して、通身㋙烏律漆。」卓一下。

臘八上堂、「雪に値ふ、」㋚正覺山前、星月燦然、雲黃山上、霜雪凝然。普天率土、今古常然、如何が臘八、忽然として然る。汝等諸人、各宜しく娘生の鼻孔を照顧し、自己の眼睛を打失せしむる莫れ。斯の旦に逢ふ每に、天下の叢林を惑亂せしむることを致すことを免れん。謹んで白す。

化主を請ずる上堂。雲門の一曲、調千古に高し、子細に推窮すれば、從來譜無し。此の曲只だ應に天上に有るなるべし、大士得來るも本據無し。今日當陽に、新年の諸路の化主に分付す。在處に富んで知音有らん、知音に遇着せば舉似せよ。舉似することは則ち無きにあらず、且く道へ、是れ何の曲調ぞ。臘月二十五。

㋕肯。一本には「敢」に作る。
㋖卓拄杖一下。一本には「拈拄杖」に作る。
㋙烏律漆。眞黑氣。
㋚正覺山。成道の菩提樹下をいふ。



歲除小參、「有處是れ有ならず、無處是れ無ならず、有無到らざる處、馨香道途に滿つ。古德恁麼の說話、前村に迭らず、後店に迭らず、未だ善を盡さず矣。只だ舊歲是れ舊にあらず、新歲是れ新ならず、新舊及ばざる處、堂堂獨り眞を露すといふが如きんば、且く作麼生か論量せん。或は箇の漢有りて、恁麼の說を聞いて便ち道はん、正に古人の綣繢裏に落在して、又作麼生か支遣せん。恁麼の時に當つて、却つて箇の道處有り㋛麼、且く作麼生か道はん。」良久して云く、「舊來今宵去る、新年明日來る。」拂子を㋜もつて禪床を擊つこと一下す。

復た擧す、趙州道ふ、「老僧二時の粥飯、是れ錯用心なることを除く。」拈じて云く、「三十年㋝來繩床を下らず、將に謂へり多少の奇特有りと。元來只だ黑山下鬼窟裡に在つて活計を作す、今に至るまで未だ轉身の路有らず。若し是れ朝に三千、暮に八百なる底ならば、雙林が這裏に着け㋞得ず。」

無準忌拈香に云く、「這箇の老漢、軟頑希罕にして、煨すれども而も熟せず、煑れども而も爛せず、沒興に他の負累に遭ふて、雲黃の苦難に陷らる。之れを怨んで已まず、之れを恨んで休せず。」香を燒いて云く、「且く這箇を將つて寃讎を雪がん。」

結制小參、「去年十月十七、命を被つて來つて敗席を尸る。陳遘幣積山の如し、中外倉庫赤立す。勉めて佛在世の時に倣ふて、持鉢して門に沿つて乞を求む。險に涉り危に登るを憚らず、波波として

㋜麼。一本には此の字なし。
㋛以。一本には此の字なし。
㋝來。一本には此の字なし。
㋞得。一本には此の字なし。

衆の爲に力を竭す。四月十五に到逗して、恰も六箇月日に滿つ、諸方禁足安居す、雙林豈に禁足を容さんや。衆を領じて展轉して賢を求む。然して後求め已つて的實なり、心空及第して歸り來つて、這の自己に和して抛擲す、更に一事有り、告報せん。古聖言端しく語的かなり。寧ろ熱鐵を身に纏ふ可くも、信心の人の衣を受けず、寧ろ鎔銅を口に灌ぐ可きも、信心の人の食を受けず。飯を喫すれば、忽ちに砂に咬着して、一生參學の事畢る。若し彼の來處を量らずんば、水も也た一滴を消し難し。且く諸訛、什麼の處にか在る。」拂子をもつて禪床を擊つこと一下して云く、「直に得たり當來彌勒に問ふことを。」

擧す、靈樹和尚、僧問ふ、「如何なるか是れ和尚の家風。」曰く、「千年の田、八百の主。」「如何なるか是れ千年の田、八百の主。」曰く、「郎當たる屋舍人の修する ㋑沒し。」妙喜曰く、「愁人、愁人に向つて說くこと莫れ。」師云く、「正に雙林が痒處に抓着す。」

㋑沒。一本には「無」に作る。

結制上堂、「諸方此の日安居禁足、雙林禁足安居を說き難し。厨に聚蠅の糝に乏しく、廩に隔宿の儲無し。策杖遍く檀度を叩いて、我が一衆の飢虛を免る。蠟人を以て驗と爲すことを休めよ。但だ願はくは處處渠に逢はんことを。」膝を拍つこと一下して云く、「噁、早く今日の事を知つて、悔ゆらくは當初を愼まざりしことを。」

## 天童前堂首座寮結夏秉拂

「太白峰高く、佛祖仰望すれども及ばず、玲瓏岩險に、衲僧足を措くに門無し。縱ひ四大海を掀翻し、五須彌を踢倒する底の作略有るも、此に到つて、總に須らく崖を望んで退くべし。中に就いて、隰州の古佛、些子に較れり。平易中の險峻、險峻中の平易、檢點し將ち來れば、猶ほ半途に在り、終に未だ能く頂に到らず。寧上座、固に敢て仰視せず。今夏現前の一衆と及び此方他土、微塵刹海、若しくは凡、若しくは聖、情と無情と、其の間に於て平かなれども留らず、險なれども取るに非ず、同じく大光明藏に住し、圓覺の妙場に宴坐して、三期の內、菩薩乘に據り、寂滅の行を脩す。壁立萬仞、萬仞壁立、水洒げども着かず、風吹けども入らず、是の如くにして住し、是の如くにして修し、是の如くにして行じ、是の如くにして證することを得。是は則ち是、必竟喚んで什麼とか作さん。平等性智。」拂子を以て禪床を擊つこと一下して云く、「玲瓏八面自ら回合す、峭峻たる一方誰か敢て窺はん。」

擧す、米胡、僧に問ふ、「近離甚れの處ぞ。」僧云く、「藥山。」胡云く、「藥山老子、近日如何。」僧云く、「大いに一片の頑石に似たり。」胡云く、「恁麼に鄭重なることを得。」僧云く、「也た儞が提撥する處無し。」胡云く、「但だ藥山のみに非ず、米胡も亦恁麼。」僧、近前顧視して立つ。胡云く、「看よ看よ頑石動く。」僧便ち出づ。師拈じて云く、「米胡斷ずるに當つて斷ぜず、㋺返つて其の亂を招く。者の僧を負累して、頑石邊に蹲坐して、轉動することを得ざら

㋺返。一本には「却」に作る。

しむ。當時他の也た儞が提撥する處無しと道はんを待つて、棒を拈じて便ち打たん。若し甚に因つてか某甲を打つと㋝云はば、却つて他に向つて道はん、頑石動くと。」

冬節秉拂、「道遠い乎哉、事に觸れて眞なり、目前法無く、意目前に在り。聖遠い乎哉、之れを體すれば則ち神なり、是れ目前の法にあらず、耳目の到る所に非ず。所以に、靈山の密付、聲を取つて篋中に安置し、少室の單傳、網を吹いて氣をして滿さしめんと欲す。自餘行棒行喝、全提半提、總に是れ土を撒し沙を拋つ、賢を欺き聖を罔す。衆中猛烈の丈夫、各各氣斗牛を衝く、豈に屈辱を甘受す可けんや。時に乘じて面皮を裂轉し、當陽に決斷す。貴ぶらくは君子道長じ、小人道消することを要す。從敎あれ暑運推し移る、日南長至、氷河焰を起し、寒谷春を回す、一塵蜚んで天に翳し、一芥墮ちて地を覆ふことを。然りと雖も甚に因つてか玲瓏岩、舊に依つて青㋞空に聳ゆ。」良久して云く、「直に恐る心を虛しうして自ら天意、人間の穿鑿枉げて工夫せんことを。」

㋝云。一本には「道」に作る。
㋞空。一本には「天」に作る。

擧す、道吾、藥山を離れて南泉に到る。〔着語に云く、門內に君子有り、門外に君子至る。〕南泉問うて云く、「閣梨名は什麼ぞ。」吾云く、「宗智。」〔相見は好を得易く、共住は人の爲にし難し。〕南泉云く、「智到らざるの處、作麼生か宗。」〔賊、賊に促はる。〕吾云く、「切に忌む道着することを。」〔一欵に便ち招くに。〕南泉云く、「灼然として道着すれば頭角生ず。」〔賊、種無くして相鼓籠す。〕三日の後に至つて、道吾後架に在り、雲岩と把針する次で、南泉過ぎ見て、乃ち再び問うて云く、「前日道ふ、智到らざる處、切に忌む道着することを、道着せば卽ち頭角生ずと。合に作麼生か行履すべき。」〔貧兒舊債を思ふ。〕道吾、身を抽んでて僧堂に入る、南泉便ち去る。〔君は西秦に向ひ我れは東魯に之く。〕道吾却り來つて坐す、雲岩乃ち問うて云く、「師弟適來、甚と爲てか和尙に祇對せざる。」吾云く、「儞恁麼に怜悧なることを得。」〔磚頭來瓦子報。〕岩薦まず、却つて去つて南泉に問うて云く、「適來の因緣、智頭陀作麼生か和尙に祇對せざる。」南泉云く、「他却つて是れ異類の中に行く。」〔一擔の懵懂を擔し得て、一擔の骨懂に換へ得たり。〕岩云く、「如何なるか是れ異類中に行く。」泉云く、「道ふことを見ずや、智不到の處、切に忌む道着することを、道着せば卽ち頭角生ずと。直に須らく異類中に向つて行くべし。」〔第二杓の惡水。〕岩亦會せず、道吾、岩が薦まざるを知つて、乃ち云く、「此の人の因緣此に在らず」と。便ち㋜與に藥山に回る。〔一盲衆盲を引く、相牽いて火坑に入る。〕藥山二人の回るを覩て、乃ち雲岩に問ふ、「汝甚れの處にか到り去り來る。」岩云く、「南泉に到り來る。」藥山云く、「南泉何の言句か有りし。」雲岩、遂に前話を擧す。〔封皮を拾得して信と作して讀む。〕藥山云く、「子作麼生か他の這箇の時節を會して便ち㋟回り來る。」雲岩對無し、藥山乃ち大いに笑ふ。〔盡く道ふ、藥山笑裏に刀有りと、殊に知らず兒を怜んで醜きことを覺えず。〕雲岩便ち問ふ、「如何なるか是れ異類の中に行く。」藥山云く、「今日困ず、別時に來れ。」〔舌頭地に拖く。〕雲岩云く、「某甲特

㋜與。一本には「共」に作る。
㋟回。一本には「歸」に作る。

に此の事の爲に歸り來る。」藥山云く、「且く去れ。」雲岩便ち出づ。「休せしむれども肯て休せず、直に雨霖頭を待つ。」道吾力丈の外に在り、雲岩の薦まざるを聞いて、覺えず指頭を咬得して血出づ。「他の閑事の爲に無明を長ず。」道吾却つて下り來つて雲岩に問うて云く、「師兄去つて和尚に那の因緣を問ふ、作麼生。」雲岩云く、「和尚、某甲が㊃與に說かず。」道吾便ち頭を低る。「臨袁、虔吉、頭上に笔を挿む。」後雲岩遷化す。遺書を遺して至る、道吾覽了りて曰く、「雲岩有ることを知らず、悔ゆらくは當時伊に向つて道はざりしことを。然も是の如くなりと雖も、要且つ藥山の子に違はず。」「同死同生君が爲に決す。」師拈じて云く、「道吾雲岩、謂つ可し蚌鷸相持して、俱に漁人の手に落つ。南泉藥山、正令行ぜず、曲を拗めて直と作すと。當時若し德山の令を行ぜしめば、曹洞の一宗、未だ地を掃ふに至らず。」復た一頌を成す、「往復して人の綣繢の間に落つ、那ぞ知らん步を同じうして行を同じうせざることを。當初に乍めて容質無かる可くんば、別に心腸を作して一生を過さん。」

㊃與。一本には「爲」に作る。

### 靈隱前堂首座寮結夏秉拂

「漸を語る也、常に返いて道に合ふ、方木圓孔に逗る。頓を論ずる也、朕跡を留めず、泥裡に土塊を洗ふ。所以に一機一境、總に是れ響に接し虛を承く、古を擧げ今を擧げ、特地に風無きに波を起す。豈に道ふことを見ずや、耳目を胎殼に杜ぢ、玄象を霄外に掩ひ、宮商の異を責め、玄素の殊を辨ず。則ち力を盡して跨跳すと雖も、要且つ前村に迭らず、後店に迭らず。縱ひ菩薩乘に據り、寂滅の行を修し、高く毗顚頂に步して、釋迦文に稟けざらしむるも、亦未だ靈山の綣繢を出でざること在り。是は則ち是、只だ五祖和尚の羅邏招、羅邏搖、羅邏送、恠む莫れ空疎なることを。伏して惟れば珍重と道ふが如きんば、又作麼生。」良久して云く、「別者に逢はず、終に拳を開かず。」

擧す、㊆保福因に長生、庵を卓つる時に去つて相訪ふ。茶話の次で、長生云く、「僧有り、某甲に問ふ、如何なるか是れ祖師西來意と、某甲拂子を竪起す、知らず得か不得か。」保福云く、「某甲爭か敢て得と不得とを道はん。箇の問有り、人有つて此の事を讚歎すれば、虎の角を帶ぶるが如し、人有り て此の事を輕毀すれば、分文にも直らず。一等に是れ焦麼の事、甚と爲てか讚毀同じからざる。」長生云く、「適來偶爾より出づ。老宿有りて云く、「毀又爭か得ん。」老宿有りて云く、「眉毛を借取せん。」後來雪竇都て別して云く、「若し和尚の證明に非ずんば、拂子一生用ふること無けん。」玄覺云く、「一等に是れ與麼の事、什麼としてか得有り不得有る。」㊇孚上座云く、「若し智眼無くんば、得失を辨じ難し。」師拈じて云く、「雪竇玄覺、等しく是れ口甜く心苦し、半は輕毀に似たり、半は讚歎するに似たり。引き得たり孚上座、蹦無く觜を挿むことを。拂子忍俊不禁、今夜衆に對して破決す。讚と毀と、得と不得と。」拂子を以て禪床を擊つこと一下して云く、「甚れの處よりか得來る、然も是の如くなりと雖も、眉毛を㊁借取せよ。」

㊆保福。從展なり。
㊇孚上座。太原なり。
㊁借。一本には「惜」に誤る。

# 法語

關東の法孫に示す

關東掌國法孫、諗至佛法を信向し、只だ己躬の一大事を發明せんと欲し、香を懷にし紙を袖にして、法語幷に袈裟を拜求し、究道の助と爲さんとす。勉めて爲に筆を引きて云ふ。

信は道源功德の母たり、一切の諸善根を長養す。所以に、諸佛の法は皆信心より生ずる所なり。但だ信心堅固ならば、則ち善心堅固なり、若し善心堅固ならば、則ち道心堅固なり、若し道心堅固ならば、則ち佛心堅固なり。天地と同根、萬物と同體なり、人を利し物を利し、古に亘り今に亘る、一毫の差別無き者也。信心とは佛法僧の三寶を信向して、天地神人を敬信し、父母師長に孝養す。一切事皆能く敬信して、退失有ること無し。信は能く必ず如來地に到る者なり。信向の心是の如くなれば、便ち能く五戒を持ち、十善を修す。若し五戒を持つこと堅固なれば、善根斷ぜず必ず人道に生ず。若し十善を修すること堅固なれば、必ず天道に生ず。若し生生信心堅固にして、善根の斷えざる者は、卽ち是れ㋑三資粮、㋺四加行の位、菩薩十住の位、十行の位、十回向の位、煖頂忍世第一位是れなり。是れより凡に從ひ聖に入る。十地の位の菩薩、乃至金剛㋩心後、解脫の道、初めて方に且つ漸次にして等覺位、妙覺位に至る。十地の位より此の妙覺位に至る、之れを如來地と謂ふ。法を說くこと雲の如く、生を利すること雨の如し、自利利他、未だ度せざるを度するなり。如來地なる者は、卽ち自己の信向堅固の心是れなり、五戒を持ち、十善を修するは、堅固の心是れなり。但だ心心堅固なれば、位位增修す、退失有ること無き者は、卽ち是れ佛心なり、必ず如來地に到るなり。縱饒ひ修習して此に到るとも、却つて執着することを要せず、直に須らく彼の前來の位名を沒し、但だ自己の實行を彰す、吾れ亦吾れは是れ誰なるを知らず、天地と同根、萬物と同體にして、方に少分の相應有るべし。戒律の中、敎相の中、說く所と一同なり。若し向上の一着を參透せんと要せば、須らく是れ心意識を離れて參じ、聖凡の路を出でて學んで、方に趣向の分有るべし。豈に見ずや、趙州和尙、僧有り、問うて云く、「狗子に㋥還つて佛性有りや也た無や。」州答へて云く、「無」と。古より今に及ぶまで、天下の衲僧を惱亂して、休する日有ること無し。法孫㋭但だ十二時中、行住坐臥、只だ無の一字に向つて、切切心を留め、念念捨てず、食息にも忘れず、日久しく歲深うして忽然として參透せば、歷歷分明にして、絲毫も疑無く、自己本來の面目、本地の風光、頓に前に現在せん。便ち從上の諸佛諸祖の所得所證と別無けん。此生他生、大自在を得、大解脫を得ん。便ち見ん、從前の信心、善心、佛心、自己心、他人心、天地同根の心、萬物同體の心も、一毫の差別無く、盡大

㋑三資粮。敎家の立つところ。
㋺四加行位。同上。

㋩心。一本には「身」に作る。
㋥還。一本には「却」に作る。
㋭但。一本には「只」に作る。

千世界、日月星辰、山河大地、亦一毫の差別無きことを。無差別中に於て、千差萬別、信心も亦是の如し、善心も亦是の如し、佛心も亦是の如し。乃至菩薩心、緣覺聲聞の心、天地人飛走、山河大地の心も、亦是の如し。心心既に是の如くなれば、以て國を治め、家を治め、人を利し物を利す可し、盡未來退失有ること無けん。此の說を作す者、此の說を聞く者、誰か復た誰そ乎。咄。從前の汗馬人の識る無し、只だ重ねて蓋代の功を論ぜんことを要す。

源淸藏主に示す

靈山の密付、猶ほ月を話するが如し、曹溪の竪拂、猶ほ月を指すが如し。遞代相承けて、炎天に雪を求む。吾れ徑山の圓照老師に侍して、多載を歷ると雖も、曾て一法の得可き無し。唯だ飢飽寒溫、能く自ら之れを知る、世を涉り徒を匡すに至つて、亦毫髮の差別無し。屢法眷の約を承けて、因に東のかた扶桑に大乘の根器有ることを望んで、險を冒し漠を超えて、國の光を觀る。復た世緣の所陷に遭ふ、悒悒の氣而も釋くる能はず。源淸藏主、叢社を贊佐し、多衆に表儀して、超卓偉偉たり。紙を袖にし語を(へ)需めて、以て究道の助と爲さんとす。堅く却く容からず。凍を呵して此れを書し、之れを祝して云く、鼻端若し通天の竅有らば、吾が與に此の氣を出す可し也と。

隆覺藏主に示す

(へ)需。一本には「求」に作る。



隆覺藏主、久しく叢林を歷て、心を參學に留む、老僧が衆に示す語中に、無の一字有るを以て、四威儀の中に於て、提撕して輟めず。昨五月八日夜、四更の四點、床に就くの時、豁然として頓に息む。自ら嘆じて曰く、「菩提の妙果、成じ難からず、眞の善知識、實に遇ひ難きなり。脚に(ト)信せて床に上り、手に任せて服を整ふるに、更に別念無し。身心如如、彼此の非無し、如如復た如如、專一に之れを守る、諸緣自ら空じて唯だ自己のみ。然も是の如しと雖も、正邪如何を知らず。伏して乞ふ慈悲(チ)開示したまへ」と。老僧之れが是の說を覽て、欣然として喜有り。元來殘羹餿飯、亦人の心を留む る有り。既に些子の蹊徑を認得す、方に道に入る可し、所謂道を見て方に道を修す、見ずんば復た何ぞ修せん。但だ專一に之れを守つて、杖を執り牛を牧するが如く、放逸せしむる(リ)勿れ。相應不相應、正邪不正邪を管すること莫れ。此を出で彼に沒す、盡未來際、動ぜず變ぜず、始めて是れ工夫純熟し、始めて是れ力を得る處なり。亦淨潔の毬子を打つことを得ざれ。更に須らく知るべし、南泉道ふ、「喚んで如如と作す、早く是れ變じ了れり也。須らく這の無の一字に和して、如如復た如如、勝妙の境界、一時に颺却して始めて得べし。豈に道ふことを見ずや、法身に三種の病、二種の光有り、一一透得して、(ヌ)應に始めて穩坐することを解すべし、更に須らく向上の一竅在り有ることを知るへし」と。此の語大いに人を賺する處有り、若し檢點得出せば、却つて再び來つて、老僧が手裡に棒

(ト)信。一本には「任」に作る。
(チ)開。一本には此の字なし。
(リ)勿。一本には「莫」に作る。
(ヌ)應。一本には此の字なし。

を請ふて喫せよ。

## 松島の圓海長老に示す

佛法遍く一切處に在り、一切の衆生及び國土、豈に東土西天宋朝日本、疆を分ち界を列する者有らん耶。所以に百億四天下の佛法は、始め靈山よりの所傳、靈山の佛法は、乃ち七佛よりの所傳、七佛の佛法は、乃ち賢劫千佛よりの所傳、賢劫千佛の佛法は、乃ち過去莊嚴劫よりの所傳、過去莊嚴劫の佛法は、乃ち未だ世界有らず、未だ佛祖有らず、威音王已前よりの所傳なり。其の傳ふる所のもの、本法として傳ふべきもの無し。但だ心を以て心に傳ふ、水を器に傳ふるが如し、無傳の傳なり。所以に流傳今に至るまで、絲毫も增さず、絲毫も減ぜず。若し有傳の傳あらば、便ち斷常の法と成り、終に敗壞を成す、今日の盛んなる者有ること無けん。我れ燃燈佛の所に於て、實に一法の得可き無しと。誠なる哉是の言、所以に參禪は只だ見性を圖る、掌の上を觀るが如し。若し見性せずんば、盲人の象を摸るに異なること無く、何の益か有らん哉。我が宗に語句無く、亦一法の人に與ふる無し。若し一法の人に與ふる有らば、便ち斷常の法と成る、正法に非ざるなり。從上の佛佛授手、祖祖相傳、只だ貴ぶらくは所得所證、正知正見、廓然蕩豁として、本源を徹見することを。方に之れを正知正見と謂ふ。繩繩準有り、法法融通す。或は十二分敎に於て明め得る者、或は敎外に於て明め得る者、或は未だ擧せずして先づ知り、未だ言はずして先づ領ずる者有り、或は師無くして自ら悟る者有り。



蓋し根性優劣等しからず、只だ自心を明め、自性を見んことを要す。宗眼明かに、敎眼明かにして、杲日の空に當るが如く、百億の四天下、幽として燭さざる無し、何ぞ曾て絲毫の隔礙有り來らん。若し是れ所得所證、半明半滅なれば、何に緣つてか本源に徹見することを得ん。既に本源に徹見せずんば、終に斷常の法と成る、正法に非ざるなり。死工夫を拵て得て、方に生活計を學得せよ。工夫到らずんば、何ぞ周圓なることを得ん。參は須らく實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし。棒、石人の頭を打つ、嚗嚗として實事を論ず。既に實證實悟の處を得ば、從上の諸佛諸祖と、無異無別、隨機應變、揑聚放開に至るまで、自然に大自在を得ること、雷の如く霆の如し、何の隔礙か有り來らん。以至、死を出でて生に入り、此を出でて彼に沒す、何の隔礙か有り來らん。松島の圓海長老、曩に宋朝に遊んで、復た舊邦に回り、法社を贊佐す。近ごろ禪刹を董す、既に住持と曰ふ、便ち主法の稱有り、後學の規模と爲る。須らく吾が宗の來源を明め、人天の正眼を開かんことを要すべし。方に且く徒を匡すの職を枉げざれ矣。紙を袖にして語を需む、筆に信せて覺えず ㊊ 忉怛。

## ㊐ 成道大師に示す

成道大師、住持に肥後州報恩寺に任ぜらる。已に數載を經、內外亨合し、緇白歸向す。切に自己一段の大事因緣の爲に、胸次礙膺の物未だ釋けず、往年曾て師の指 ㊐ 迷を求むと雖も、蓋し歲月の蹉跎するに緣つて、未だ與

㊊ 忉怛。うれへ悲むこと。

㊐ 成道。未考なれども、已に尼となれる貴族出の女人と見ゆ、又大師は禪門の信仰ふかき女人を稱す、大姉に同じ。

に決することあらず。之れを思ふに世間名利の役、休歇有ること無し、自己に於て全く益する所無し。是れに由つて㋕暫假して、數千里の遙なるを遠しとせず、㋖僕僕として來參す。只だ此の一事を決すること、了了分明にして、虛生浪死の苦を致すを免れ、出家の志に辜負せざらんことを要す。只だ直截を求む、數句繁多ならば記し難し矣。老僧、言を尋ね句を逐ひ、玄を求め妙を求むる者を見る毎に、痛く之れを掃つて特地なることを欲せず。道ふことを見ずや、我が宗に語句無く、亦一法の人に與ふる無し。若し只だ數句を求めば、亦是れ繁にし了る。若し一句の汝に到るあらば、卽ち汝を埋沒するなり。若し一句の汝に到る無くんば、卽ち老僧に辜負せん。有句無句、一時に截斷せよ。昔日㋗寂壽道人、昭覺の圓悟禪師に參ず、不是心不是佛不是物を指示す。提撕既に久し、忽然として契悟す。凡そ問答有れば、流の滯無きが如し。直に淮西に往き、五祖演和尚に參ず。乃ち圓悟の法嗣の師なり。纔に參禮し了る。五祖問うて云く、「汝什麼人にか參じ來れる。」寂壽云く、「昭覺和尚に參じ來れり。」祖遂に問うて云く、「釋迦彌勒是れ他の奴、他は是れ阿誰そ。」寂壽、掌を拊ち、大いに笑つて云く、「大小大の五祖老翁、元來他を識らざること在り。」五祖㋙便ち是れ了徹底の人なることを知つて、遂に與に印可す。此れより七縱八橫、大自在を得、佛と祖と、他の面前に到りて、一笑を滿てず、更に何の生死の疑慮か有りて、胸中に掛けん耶。成道大師、但だ此の不是心不是佛不是物を將つて、十二時中、行住坐臥、喜怒憂樂、片時も放捨せんことを要せざれ、久久に便ち見倒斷えん。但に他の總持、末山、劉鐵磨、寂壽の輩を超ゆること一頭地のみに非ず、亦乃ち翻つて建長老翁、恣に陳年の橘皮を將つて、之れを以て火と爲して、人家の男女を鼓弄して、敗闕少からざることを笑はん。法位大師、既に是れ手足、必ずしも別紙にせず。

㋚正傳長老に示す

嗣法の小師慧安長老、東巖と號す、建長に首を聚めて、孜孜道を究めて請益して輟めず。別れて後聞けば、開法住持、大いに宗社を興すと、甚だ老懷を慰す。㋛頌書㋜遠く投じて、懇ろに法語を求む。用侍者、捧呈して云く、「節次請益す、㋝伏して開示の因緣を蒙り、親染を乞ふて之れを寶とせんと欲す。」答へて云く、「今老懶、煩を厭ふが爲に、㋞之れを却くれども重ねて復た啓請す。㋟筆に信せて以て贈る。」云く、「語底默底不是なり、非語非默更に非なり、重重の關棍を透出す。㋠而るを況んや猶ほ厘微に涉るをや。豈に見ずや、靈山の拈起、迦葉眉を攢む。便宜を得る是れ㋡便宜に落つ、是れ苦心の人にあらずんば知らず。所以に毎に問答酬㋢倡に遇ふ、

㋕迷。一本には「命」に作る。
㋕暫假。しばらくの暇を請ふこと、一夏のをはり、又は中に於ていとまごひをする。又假を一本には「暇」に作る、相通ずるなり。
㋖僕僕。煩らはしきこと。
㋗寂壽。圓悟勤の法嗣か。
㋙便。一本には「乃」に作る。





㋚正傳。文永五年創立し、もと洛中の上京にありしを、後に山城國愛宕郡西賀茂に移す、吉祥山といふ、弘安五年なり、兀庵を勸請して開山とす、東巖を開基とす、巖は師に嗣ぐ、元寇に蒙古降伏の祈禱文を製して有名なり、此の法語の眞蹟、近ごろ東京に於て鄕男爵家所藏となりし由、その後他に賣物になると云ふ、今その寫眞に依りてこの文の異同を正す。

空谷響に答ふるが如くなり、豈に㋔噫啄に容れん哉。達磨震旦に來らず、老僧日本に遊ばず、單傳東巖に直付す、廣く人天の爲に宣演せよ。咦。機に輸る是れ算人の本。」復た侍者を指して云く、「我が宗に語句無し、甚の閑公案をか說かん。」筆を擲つて噓一聲、侍者破顏微笑す。復た云く、「老僧の今日失利。」

㋕ 院豪長老に示す

佛法を弘持すること、人に在りて法に在らず、人能く道を弘む、道の人を弘むるに非ずと是れなり。既に住持と曰ふ、却つて閑衲子と同じからず、須らく當に己を潔うして精專に、後學の者の法たるべし。應機接物、亦須らく己か力量に隨つて、切に過と不及とを防ぐべし。從上來大いに規則有り、當に一一依つて之れを行ずべし。乃ち善長老、多年を經歷して、必ず能く薰煉して失せじ。若し是れ未だ大法を證徹すること能はずんば、亦須らく歩を退けて己に就くべし。窮め究めて徹せしめて、方に是れ千了百當す。若し只だ言句を記持して、胷中に蘊在し、以て我れ能くし我れ解すと爲ば、最も是れ道を障ふるの本なり。大法發明するに由無けん。終に事を濟さじ、且く住院の一事の如きんば、終日に役役たるも、了期有ること無けん。但だ其の綱紀の大概を按じて、㋖細事は一邊に撥向して、忙裡に閑を偸む。直に僧、雲門和尙に問うて云く、「一念を起さず、還つて過有りや也た無や。」答へて云く、「須彌山」と云ふを將つて、但だ此の一轉語を將つて、時時に提撕せば、十二時中、絲毫も退失せしむること勿れ。日就しく月將くして、噫地一聲せば、便ち能く本有の性、本來の面目を徹見せん。虛にして靈、空にして妙ならん。超然獨脫して、從上の佛祖と、手を把つて共に行いて、出生入死、大自在を得ん。豈に偉ならず歟。世良田の當代の住持院豪長老、昨冬老僧、乍ちに建長に到る、先づ遠訪を辱うす。春を越えて、紙を袖にして語を求む、以て究道の助と爲す。筆に任せて姑く其の誠を塞ぐ矣。

小師景用に示す

徒弟景用侍者、執侍すること既に久し、奉養懃渠、始終節を守り、雜交を併去して、顓ら切に道に向ふ。炷拜して一語を求め、懷抱して己躬の一大事を決了せんとす。卽ち答へて云く、「我が宗に語句無し、亦一法の人に與ふる無し。參禪は只だ見性を圖る、若し見性を得ば、方に是れ千了百當ならん。從上無數大劫より而來、諸佛諸祖、千聖萬聖、亦只だ自心を明かにして、自性を見て、此の法を傳ふ。此の法は、無傳の傳、是れを眞傳と爲す、正法と名くるなり。若し有傳の傳ならば、是れを

㋕ 院豪。上野國世良田長樂寺に住す、法を佛光に嗣ぐ。
㋖ 細。一本には「碎」に作る。





㋔ 顓書。寫眞によると、この二字の上に「忽」の字あり、顓は統と同じ、又すみやか、には か等なり。
㋕ 遠投。同上によると、この投の字を「臨」の字に作る。
㋖ 伏。同上によると、この字なし。
㋗ 却之。同上によると、この二字は「固却」に作り、その下に「不允而」の三字あり。
㋘ 信筆以贈。同上によると、この四字は「勉爲引筆」に作る。
㋙ 而況。同上によると、「而」の字なし、況の字の下に「乃」の字あり。
㋚ 落便宜。同上によると、この三字より以下は缺損して見えず、爲に異同不明なり。
㋛ 倡。一本には「唱」に作る。
㋜ 噫。くちばしなり。
㋝ 今日失利。失利は失敗、これはしまつたとなり。

妄傳と爲す、正法に非ざるなり。但だ毎日苦樂逆順、逐旋消遣す、惟だ自己を參究せんことを要す。工夫片時も輟めずんば、久久にして必ず感驗を獲ん。驀然として自心を明め、自性を見れば、盡乾坤大地、總に是れ自己全體の作用なり、更に何の疑慮なる者か有らん哉。今老病力怯きが爲に、書するに及ばずして之れを却く。」侍者忽ち問うて云く、「昔日馬大師不安なり、院主進前して、徐徐として問うて云く、『和尚近日尊候如何』と。馬祖答へて云く、『日面佛、月面佛』といふの時如何。」老僧答へて云く、「賊に和して捉敗す。」卽ち頌して之れに示して曰く、「日面佛月面佛、賊賊に捉へられて贓物を見す、賊賊一時に推勘すること圓なり。漢州の姜と分州の鐵と。」復た頌して曰く、「日面佛月面佛、病勢元自ら執着するに因る、只だ三片漢州の姜を消す、一服に煎じ取つて應に藥を驗すべし。呵呵。」卽ち書して以て遺る。

法語終

# 序跋

## 性空の序

❶撥草瞻風、只だ見性を圖る。果して能く性を見れば、十方虛空、悉く皆消殞す。山河大地、依つて建立し、㊁八解六通、玆れに依つて發現す。豈に見ずや、碧眼胡云く、「不立文字、直指人心、見性成佛」と。端無く牙に粘じ齒に帶す。衲僧門下、猶ほ重關を隔つ。義侍者、性空と號す、叙語を求む。因つて之れに詰して云く、「既に性空と曰ふ、是の中還つて㋩元字脚を着得すや否や。」義默して答へず、復た之れを指して云く、「錯、姑く與に筆を引く。」

敬侍者の頌軸に㋥跋す

㋭妙喜老漢、初め發足して遊方せし時、先づ四句の偈を以て之れが受業を辭す。其の後句に云く、「且喜すらくは今朝火坑を離る、前輩の標格、打頭に便ち佛を呑み祖を呑む底の氣概有り。若し是の㋬川巴子にあらずんば、如何が羅籠し得て住せん。」自後花木瓜の種族、其の類を出でて、其の萃を

❶撥草瞻風。行脚の大事なり、草を撥ひ風を瞻るの意、深山幽谷を遍歷するをいふ。
㊁八解六通。八解脫、六神通をいふ。
㋩元字脚。一の字の義、元の字脚は、乙の字なり、乙は一に同じ。
㋥跋。この跋は支那に在りての作なり。
㋭妙喜。大惠禪師を云ふ。
㋬川巴子。圓悟克勤禪師を云ふ、大惠の師なり。

拔く者有ること罕なり焉。敬侍者、鄉談一同なり、九華の豐林に經を受く、仙骨亦能く格を越ゆ。初め發足せし時、府僉秘書、贈るに伽陀を以てし、其の鋭志を嘉尙す。龍游雙徑に到るに及んで、群英其の韻を次して之れを美す。一家纒かに事有れば、百家の忙しきを引き得たり。一語を其の後に需む、卽ち其の韻に就いて、一字之れに酬いて云く、「休。」

奕東睨、常州橫林の淨慈に住する賀頌の軸に跋す

澗東の一脈、曲曲灣灣たり。枝を分ち派を列ねて、奉川を接す。正に東睨を出でて、滔滔聒聒たり。注いで梁溪に入る、浪打ち濤翻る、蝦蟹魚龍、游泳自若なり。西湖の群英を引き得て、淸を揚げ濁を激して、風波地に遍し。余其の源源已まざるを見て、姑く以て ㋕坯土し て之れを塞ぐ。

大火中に金剛經を燒く、壞せざるに跋す

最明寺殿信心堅固、金中の剛の如し、親ら金字の金剛般若經を染む。直に得たり、水に入れども溺ること能はず、火に入れども燒くこと能はざることを。只だ此を以て堅固の心、盡未來際、金剛に等しうして壞せざることを見る者なり。因に火中の經を觀て、合掌頂戴して、未曾有なることを嘆ず。故に其の後に書すと云ふ。

了侍者の頌軸に跋す

㋕坯土。屋後の牆壁なり。

禪了侍者、宋朝に遊歷して、遍く諸老に參ず、湖海の同流、寂巖の號をもて、之れが德を揄揚す。頌、巨軸と成る、幷に歸帆の帙、併せて捧呈す。蓋し老眼矇矓として略彷彿を觀る。其の中一句子有り、直に是れ巴鼻無しと。是れに由つて急に卷いて而して復た之れを還す。

大衆、最明寺殿の悟道を賀する頌軸に跋す

靈山の密付、只だ密傳を要す。地を剗つて密ならず、惡聲流布す、遞に相鈍置し、浩浩として今に至る。昨來密室に、最明寺殿に付授す。只だ密傳を要す、地を剗つて密ならず、言下に忽然として鼻孔を打失し、㋟案沓すること牛腰の如し。且く道へ、誰に因つてか致し得ん。咄。來つて是非を說く者は、便ち是れ是非の人。

安忍子の ㋬大智律師、草書の心經に跋す

㋭竺皇先生、四處十六會、慈悲の故に、落草の談有り。其の ㋮旨歸八十餘科を掬ぶに、一紙を出でず。㋯靈芝老子、南山の家法を守る外、筆陣雲烟を掃ふ、故無く後に隨つて、草窠裡に輒ず。則ち古を貫き今に通ずと雖も、正眼に看來れば、草氣太甚だし。

序跋終

㋟案沓。この執故、不詳なれども、案は檢案の意か。
㋬大智律師。靈芝律師の賜號。
㋭竺皇。釋尊を指す。
㋮旨。一本には「指」に作る。
㋯靈芝。大智律師の所居の山號なり。

# 佛祖贊

出山の相

山に入り山を出づ、何れか異何れか別。六年成ずる所、一時に漏泄す。那ぞ堪へん滿口に氷雪を嚼むに。

渡江の達磨

箇の不識と道ふ、自ら荆棘を生ず。悽悽として江を渡つて、羞を忍んで面壁す。賴に神光有り、與に屈を雪ぐ。

寒山拾得

東を指し西を畫す、眠笑ひ眉垂る。心秋月に似たり、髮亂絲の如し。句を吟ずれども句を成さず、詩を題すれども是れ詩にあらず。豐干輕しく饒舌し、敗缺一時に知る。善哉苦なる哉、敢て七佛の師と稱す。

行道、數珠を持する觀音

聞思修より、三摩地に入る。八萬の行門、一十九類。聲を尋ね苦を救ひ塵沙を越ゆ、一串の數珠數へ已まず。

布袋

杖頭に百億の乾坤を挑げ、布袋に三千世界を貯ふ。鬧市聚中箇の人を等つ、知らず誰か是れ知音の者ぞ。咄。

普化

飯床を踢倒して、特地に乖張す。空を指し空を話す、顚を徹し狂を徹す。㊀木槵拈じ來つて人の眼を換ふ、贏ち得たり惡聲の大唐に滿つることを。

魚婦觀音

活潑潑を提起して、馬郎も亦惑はさる。度生願重しと雖も、那ぞ知らん敗缺を成す。

靈照女

破笊籬を拈じ將つて、風前誰にか賣與せん。攙いて奪市の處に行く、獨り㊁老爺のみ知るに非ず。

無準和尚の頂相

文武の火人を濃殺す、千衲子恨伸べ難し。五處に法を主り、雙徑再び新なり。內底に敷演して、號を賜ふこと倫に超えたり。自ら正續梵苑を掬め、雲水の高賓を延納す。將に謂へり多少の奇特と、依

㊀木槵。數珠をいふ、木槵子の實を集めて作るもあり。
㊁老爺。靈照の父の龐蘊居士をいふ。

前として滿面の埃塵。咦。

義簡禪人、圓相を畫いて贊を請ふ

圓なること太虛に同じく、缺くることも無く餘ることも無し。良に取捨に由る、所以に不如なり。恁麼の說話、早く是れ模を起し樣を畫き了る。殊に知らず纔に恁麼ならんと擬すれば、便ち不恁麼、更に如何若何と問はば、笑倒す嵩山の破竈墮。

最明寺殿の眞像

國土を掌持して、天下安堵す。佛法を信㋩向して、心を運ぶこと堅固なり。德丘山より重く、名寰宇に播く。淸白家に傳へて、望今古に隆し。吾が宗を參透して、眼眉卓竪す。末後の一機、佛を超え祖を超ゆ。咦。汝吾れに辜負す、吾れ汝に辜負す。

㋩向。一本には「仰」に作る。

佛祖贊終



## 自讃

㋑正傳寺住持安東巖、贊を請ふ

西蜀に生緣し、獨り日本に遊ぶのみに非ず、十方國土の中、當頭に俱に坐斷す。

㋺宏海侍者、贊を請ふ

這の㋩川藎苴、全く仁者にあらず。老拳を握起すれば、佛祖も也た怕る。

小師景用、贊を請ふ

贊せんと要すれども而も德の贊すべき無し、罵らんと要すれども而も過の罵る可き無し。贊と罵と及ばざる處、大地も載する能はず。

㋑正傳。この自贊の頂相、現今正傳に存在せり。寺傳長嘉の筆、國寶に編入せらる。

㋺宏海。南洲と號す、師の法嗣なり、淨智に住す。

㋩藎苴川。川は四川、卽ち蜀の生れなればなり。

## 自讃終

## 偈頌

無錫劉相幹佑、篤く佛法を信じ、常に來つて參請す。自ら雪竇の罌粟の頌を和し、來つて老僧に呈す。卽ち韻に次いで之れに酬ゆと云ふ。

一實に包含す萬點の春、收め來れば粒粒是れ家珍。些兒の圓轉誰か能く委するや、唯だ一身百億の身を分つ。

公讀み了りて、忽然として契悟す。衆皆賀喜す。乃ち知る、佛法を信向する靈驗之の如くなることを。

### 鐵壁

剛然として太虛空を隔斷す、縫罅渾べて無し拶すれども通ぜず、頑頓の碓夫覷れども破れず、人を倩つて書する處轉た宗に乖く。

### 鐵牛

骨格純剛蹄角全し、軒然として鼻孔自ら遼天。貪らず陝府欄邊の草、肯て遍く祖父の田を ❶耕翻せん。

❶耕。一本には「畊」に作る。



### 海月

金波涌出す爛銀盆、黑白虧盈湛として痕せず。謂ふこと莫れ淸波透路無しと、珊瑚枝上影團團。

### 竹溪

空腹高心歲寒に耐ふ、滔滔たる聲價遮攔を沒す、南北枝派を分ちてより、攪動す江西の十八灘。

### 雪竇前堂首座寮、煉指

㊐行人有り、頌を求む

未だ根源に徹せずんば肯て便ち休せんや、三種を煉磨して愈精修す。自己の光明藏を發輝して、俱胝の一指頭を抹過す。

### 華嚴經を寫して頌を求む

一微塵を破して此の經を出す、因は果海を該ね果は因を該ぬ。端無く却つて管城子に、名句文俱に錯つて指陳せらる。

### 髑髏、人我檐を擔ふ者を畫いて頌を求む

塵却より今に至る、無明人我の心を執着す。驀忽として眼睛俱に突出せば、乾坤大地㊅孰か知音。

### 栽松道者

栽培地を得て、節操蒼然、死して而して復た活す。身後身前、栽樑肩に横へて ㊁阿剌剌。再來半文錢にも直らず。

㊐行人。一本には「道人」に作る。
㊅孰。一本には「誰」に作る。
㊁阿剌剌。俗語の「おやおや」と同じ、驚駭の語。

亮知客「出世して戒香に住す。」

主中賓の句來端を驗す、四海の禪流總べて瞞ぜらる。鐵磨の機輪比擬し難し、人に逢へば卽ち出して舌瀾を翻す。

㋚南洲

瞻部那邊沙際の間、閑然として魔子恣に縱横。周金剛不平の氣を帶び、勘破して却つて潭上に從つて行く。

偈頌終

㋚南洲。前に見ゆ、宏海なり。



# 小佛事

尤木石相公薨ず、背上の香

「此の一炷の香、根蒂穩實、枝葉繁榮し、骨に透る馨香、遼天價重し、寶爐に爇向して、以て供養を伸ぶ。共しく惟みるに宋の故侍讀提史端明相公、淸白家に傳へて、儒釋通貫す。詞源浩汗にして、而して三峽の水を涌し、講讀㋑琮琤として、而して九重の天に對す。史を修して今古の是非を決し、㋺麻を操つて人我の邪正を定む。紀と爲り綱と爲る兮霜風凜凜、人を利し物を利す兮春日融融。妙喜の語句を觀るに因つて、脫然として如如を契證す。內典の眞乘を披閱して、驀忽に唯唯を點頭す。總に㋩道ふ、㋥坡仙の再世と、宛然として㋚普覺の後身、來るや兮月の室に行くに似たり、去るや兮雲の壑に散ずるが如し。南禪每に藥誨を叨にす、懷抱して爰ぞ忘れん、荐く奠禮の芹を伸ぶ。徒を領じて薰誦す、神靈㋭歆け格る、本來を昧さず。」香を挿んで云く、「願はくは此の香雲、刹塵に遍く、一切を饒益して正覺を成ぜんことを。」

㋑琮琤。玉と玉とのすれあふ聲の形容。

㋺操麻。麻は詔書をかく黃麻紙のこと、或は麾の字の誤ならんか、麾は將帥の旗なり、三軍を指揮するものなり。

㋩道。一本には「云」に作る。

㋥坡仙。蘇東坡のことなり。

㋚普覺。大慧禪師の賜號なり。

㋭歆。享と同じ。

奠茶

錫蘢の英、上苑の春、山川秀發し、雨露重ねて新なり。石銚に烹來りて味別なる。快なる哉壯爽たる精神、睡魔退舍して、兩腋風淸し。翻つて笑ふ趙州錯つて人を喚ぶ。

奠湯

地道收來す、精麄揀擇、牛(ト)溲馬(チ)勃、藍毒砒霜、情を竝して細末にし將ち來りて、變じて醍醐上味と作す。常陽點出すれば、滿座馨香なり。其の他の薑杏湯に比せず。

潮西堂の鎖龕

「靈峰に正令を全提し、太白に風月を平分す。佛祖の玄關を碎き、衲僧の窠窟を掃ふ。活中の全死、死中の全活。」鎖子を擧して云く、「白雲の鎖口訣に何似れ。」

覺禪客の起龕

奮つて身を顧みず、丁字に脚を着く。玄關を拶透して、死生夢覺む。便ち恁麼にし去る時如何。切に忌む語脈裏に轉却することを。

明侍者の起龕

明明有ることを知つて道ひ得ず、明明道ひ得て有ることを知らず。一回目前の機を喪盡す、(リ)八角の磨盤空裡に走る。

(ト)溲。すゝぐなり。
(チ)勃。いかるなり
(リ)八角。石臼を磨盤といふ、八角では轉ばぬに、空裡に走るとは情識分別を絕する宛轉自在をいふ。

嵩知客の下火〔福州の人。〕

(ヌ)飛猿嶺太白嶺、須らく信ずべし平夷の中險峻なることを。區區を憚らず親しく到來す、等閑に踏斷すれば蹊徑無し。去來を泯じ途轍を忘ず。六月火空を燒く、烏龜頭に雪を帶ぶ。

蒙庵主の下火〔浙翁の小師、天童に在りて死す。〕

「佛心宗愚蒙に賑ふ、生死を出でて羅籠を絕す。泥牛海に入つて覓むるに蹤無し。」火把を以て圓相を打して云く、「扶桑舊に依つて一輪紅なり。」

普・淳二上座の起骨

「普通年の後、淳祐年の初め、則ち公案有り、實に非ず虛に非ず、之れを擬すれば則ち心膽喪す、戲着すれば則ち眼睛枯る。中間優有り劣有り、如何が判得して恰好なる。」骨を撫し一下して云く、「(ル)一狀に領過す。」

安危峯藏主の起骨〔中秋後。〕

舌底に風雷を(ヲ)卷いて、胷中に錦綉を蟠す。機輪轉碌碌、古今都べて穿透す。常流に墮せず、骨格渾べて別なり。獨り瘦馬に騎つて殘月を踏む。

藏上座の入骨

(ヌ)飛猿嶺。嵩山なり。
(ル)一狀領過。方語に「衆人同罪」と。
(ヲ)卷。一本には「捲」に作る。

汝と與に往來する者は是れ藏、死語人を誑して自ら誑すことを成す。往來せざる者も亦是れ藏、火亂れ灰飛んで收むれども上らず、收得上誰と與にか論ぜん。夜は巖溜の響を聽き、朝には嶺雲の屯まるを看る。

清・圻二上座の入塔

二は一に由つて有り、一も亦守ること莫れ。空劫の前を抹過し、涅槃の後を超出す。攪すれども濁らず澄ませども清まず、圻岸を沒し空平に等し、酌然として雙暗復た雙明、山河を認めて眼睛と作すことを休めよ。

端知客の秉炬

衲僧を驗する句如何が擧似せん、端的を知らんと要せば言外に領取せよ。驀然として當下偸心を死す、鐵鑽通紅蟲に蛀さる。

小佛事終

○

越州の兵衞主將官、二月初一日夜、忽ち夢に一大寺を見る。殿堂深廣にして樓閣重重たり、莊嚴眞に奇特なり。裏面に去ること得ず、外に一人有つて立つ。兵衞主將問うて曰く、「這裡をば什麼の所と か名くる。」人答へて曰く、「此の間巨福山建長禪寺と名く。善法堂彼岸の時なり、十方の諸佛、這裡に來つて、法を說いて人を度す、中間第一尊は便ち是れ巨福山の長老なり。如今便ち是れ彼岸なり、裏面の人の去り得る無し。儞且く長老の出で來るを待つて看よ。」少時にして便ち長老の出で來るを見るを得、年六十餘歲に及ぶ、身相圓滿にして短からず長からず。兵衞見了りて、心中如法歡喜す。夢覺めて後、屋裡の人に語げて曰く、「我れ夢に是の如き事を見る、儞等曾て巨福山の長老を見る麼。」屋裡の人、答へて曰く、「未だ曾て見ず。」兵衞云く、「我れ自ら巨福山に去つて、長老に參見せん。」卽ち自ら建長寺の侍者寮に來り、上の如く夢の事を說き了る。便ち兀庵和尚、佛殿に在り、衆を領じて行道諷經するを見るを得たり。果して夢に見るが如くと一同なり。始めて夢事の眞實なるを信ず、見る者聽く者、手舞ひ足踏む。

時に❶景用侍して傍に在り、衆と同じく親しく是の事を見る。卽ち之

❶景用は宋人なり、兀菴の弟子。

れを略記す。

國譯兀庵和尚語錄終



# 後序

寧侍者、育王より雙徑に至るまで、首尾相從ふこと已に數載を經たり。其の孜孜として道の爲にするを見るに、眞の本色の衲子なり。秋風衣を吹いて、忽ちに來つて別を告ぐ。且た帋を袖にして語を求めて、而して㋑蔣山に謁せんとす。我れ特地ならんことを欲せず、固く之を却く。而るに請益する所堅し、因つて之に謂つて曰く、「昔㋺太師祖、鍾阜に據り、大慧㋩五峰に居る、一時の龍象、㋥二開士の門に往來するもの、㋭憧憧として武を道に交ふ。又多少人家の男女を悞了することを知らず、吾れ㋬故に敢て前輩を仰視せず、而して癡絕兄は實に當世の宗匠なり。此の行若し空しく去らば、後必ず實にして回らん。若し實にし去らしめば、必ず須らく空しく回るべし、斷じて疑なけん矣。或は恐る、此間の如何若何を問着せん、却つて妄に消息を通ずることを得ざれ。何が故ぞ、彼此㋣老大なり。」㋠端平乙未中秋、徑山無準叟、㋡凌霄閣に書す。

㋑蔣山。太平興國禪寺、十刹の一なり、開山は寶誌和尚。ここでは癡絕を指す。
㋺太師祖。應菴を指す。
㋩五峯。前に見ゆ。
㋥二開士。大慧と應菴。
㋭憧憧。心の定まらざること。
㋬故。この字、佛鑑錄には「固」の字に作る。
㋣老大。老は尊敬の意。
㋠端平。乙未は二年なり。
㋡凌霄閣。徑山にあり、主山を凌霄峯といふ。

# 跋

無準老、寧侍者を送りて予に謁せしむ。且つ妄に消息を通ずることを得ざれとの訓あり、兒に敎ふ迷子の訣、自ら當に是の如くなるべし。殊に知らず、子未だ五峯頂を下らず、此の消息、已に四天下を塞破す、儞が左遮右掩の處なけん。況んや無準老、三千里外、殺訛を定むる底の眼目あり。早く已に予が人家の男女を悞了することを知れり。子歸らば當に自ら之れを知るべし矣。㋑端平丙申大寒、金陵北山㋺道冲、正傳に書す。

㋑端平丙申。南宋の理宗の年號なり、その三年、日本の四條天皇嘉禎二年に當る。
㋺道冲。凝絶の諱なり。



# 跋

㋑歐峯、亭あり、見山と曰ふ、乃ち昔人啓關悟心の所なり。㋺戊辰嘉定、余適吾が㋩燦祖の演心銘を其の上に會す。兀爾として緣を忘ずれば、歸き復た自然なりといふ處に至つて、余覺えず耳を掩ふて退く。三十年來毎に毎に兀坐して、卽ち其の然るを知り、亦其の然る所以を知る。終に未だ能く其の然して然る所以を見ず。徑山の無準大長老、兀庵の二字を書して、寧侍者に付するを見るに及んで、命名の意を問ふに因つて、曰く、他なし焉と。唯だ癡兀にして自ら守るなり。若し果して此の如くならば、曷ぞ徑山の書する所に從つて、兀をもて庵と爲して、兀兀然として、燦祖に從つて遊ぶを愈れりと爲るに若かん也。

㋑歐峯。雲居山の一名、支那江西省南康府建昌縣西南三十里にあり。
㋺嘉定戊辰。元年なり、宋の寧宗の年號なり、日本の土御門天皇承元二年なり。
㋩燦祖。三祖僧燦大師の信心銘をいふ。
㋥心月。石溪心月、掩耳開に嗣ぐ、徑山に住す、[illegible]三世なり。

㋥心月書す

## 跋

這の暗號子は、是れ當陽の主將にあらずんば、他人一字も不會。而今大唐國裏、棊布星羅す。吾が兀庵の如きは、叢林の傑出、正續の眞傳、言句流布して、人の眼目を活す。余覽觀することを獲て、平生を痛快す。故に其の後に書すと云ふ。❶寶祐六年季夏望日、晉陵尤煜。

❶寶祐六年。南宋の理宗の年號なり、日本の後嵯峨天皇正喜二年に當る。

國譯兀庵和尚語錄跋終



# 兀庵和尚語錄序

徑山無準師範禪師手翰

師範和南手白。

靈巖堂頭長老、別去許久、中旬受信後、莫知動止、歲暮忽於蘇城舟中、收書幷信、且知出世出自諸山公舉、甚慰老懷、既曰住持、卻與閑衲子不同、便有住持之職、從上來大有軌則、當一一依而行之、緊要者、惟以本分事、廣攝末學、亦宜隨己力量施設、當去過與不及之患、久久自然感驗也、長老久在叢林、備見今時之弊、可默省警、暮冬失脚墮其輩流、爲識者笑、吾老矣、一住五峰、今十七年矣、開奏後、漸理求閑計、只忠早晚矣、法衣乙頂付去、遇上堂、可一披幼質、無現成者、付在別日、旅中草略奉答、不甚子細、餘宜爲宗乘自愛、不一。

師範和南手白

靈巖堂頭長老

# 兀庵和尚語錄

侍者淨韵編

## 初住慶元府象山靈巖廣福禪院語錄

指三門迷悟兩門、聖凡二路、以手劃一劃云、惣與諸人開闢了也、普請一時證入。

佛殿、一釋迦、二元和、三佛陀、當甚椀脫丘、然雖如是、仁義道中、便燒香禮拜。

據方丈、橫按拄杖云、莫有不顧危亡底麼、良久云、果然拈帖云、從上來、被這些子一把把定、更無轉身吐氣處、寧上座、尋常一味橫點頭、到此盡平生伎倆、也擺脫不下、且道、因甚如此、公道已行。

指法座、坐斷千差、當陽烜赫、任是須彌燈王、也須望空斫額。

陞座祝　聖、次祝州縣香、次云、此一瓣香生無陰陽之地、出絕思慮之鄉、軟頑中軟頑、惡辣中惡辣、無端一回嗅着、直得喪盡平生、今日人天衆前、當陽爇卻、奉爲見住徑山佛鑑圓照禪師大和尚、用酬法乳。

據座、問答不錄、乃云、釋迦不出世、四十九年說、祖師不西來、少林有妙訣、所以道、法無去來、無

動轉相、昨朝乳竇、今日靈巖、曾無動轉之蹤、寧有去來之跡、如是則從上佛祖眼睛、天下衲僧鼻孔、驀拈拄杖、卓一下云、總被山僧拄杖子一時穿卻、盡乾坤大地、更無纖毫透漏、雖然、且道、功歸何所、靠拄杖云、四海浪平龍睡穩、九天雲靜鶴飛高。

復擧、三聖道、我逢人則出、出卽不爲人、與化道、我逢人則不出、出則便爲人、拈云、二大老、一人先行不到、一人末後太過、檢點將來、惣缺一着、寧上座、寄跡岩竇、隱遁過時、無端被人推將、出來做這擧止、出則出已、且道、爲人不爲人、乃云、信手斫方圓、自然合規矩。

當晚小參、如來唯一說無二說、祖師唯心傳無別傳、所以道、垂鉤四海、只釣獰龍、格外玄機、爲尋知己、雖然且據令一句、又作麼生、朔風捲地百草死、芙蓉著花生晚寒。

復擧、德山小參、示衆云、今夜不答話、時有僧出、德山便打、僧云、某甲話也未問、因甚打某甲、山云、儞是甚處人、僧云、新羅人、山云、未跨船舷、好與三十棒、拈云、德山老漢、能放不能收、能殺不能活、當時若要盡令、直須棒了趂出。

徑山付法衣到、師拈起法衣、召大衆云、大庾嶺頭提不起、因什麼、卻在靈巖手中、諸人還知端的麼、若也知得、便知道從上來佛佛授手、祖祖相傳、的的無私、繩繩或準、其或未知、復擧法衣云、這箇是徑山圓照老人、親手付來底、便披。

上堂、召大衆云、披野干皮、作獅子吼、指東爲西、將無作有、驚起法身藏北斗、喝一喝、下座。

結制上堂、過去諸如來、斯門已成就、錯見在諸菩薩、今各亦圓明、錯未來修學人、應當如是學、錯、諸人還知這三錯落處麼、若也知得、不妨同此安居、其或未然、且聽從頭指出、一錯點開從上佛祖眼睛、一錯捩轉天下衲僧鼻孔、且道、更有一錯、作麼生、驀拈拄杖云、拄杖子莫道得麼、試出來、將錯就錯道看、卓一下云、餿飯泥茶爐。

上堂云、教中道、離言說相、離文字相、離心緣相、畢竟平等、無有變易、驀召大衆云、這般說話、蝦蟆何曾出得斗、向衲僧門下、猶隔重關、畢竟事作麼生、荷葉團團似鏡、菱角尖尖似錐、風吹柳絮毛毬走、雨打梨花蛺蝶飛。

中夏上堂云、一夏九十日、不覺已過半、管帶牯牛兒、切忌隨物轉、緊把鼻頭索、莫放令寬緩、如是十二時、時時無間斷、收得純熟、斥之不去、受人言語、不動不變、覿面當機、當機覿面、必竟如何良久云、不得動着、動着則頭角生。

解制小參、目前無法、意在目前、東西十萬、南北八千、所以達磨不來東土、二祖不往西天、點檢將來、只見一邊、設使東去西去、直向萬里無寸草處去、大似泥裏推車、陸地行船、直饒總道出門便是草、雖則君子千里同風、未免隔山見烟、爭如、任運騰騰、騰騰任運、飢飡渴飲、行坐困眠、自然處處朝宗、頭頭合轍、縱橫得妙、八穴七穿、且總不恁麼、又作麼生、拍膝一下云、不覺日又夜、爭教人少年。

復擧、僧問雲門、秋初夏末、東去西去、前途或有人問、如何祇對、雲門云、大衆退後、僧云、某甲過在甚處、雲門云、還我九十日飯錢來、師拈云、雲門老漢、當斷不斷、返招其亂、當時纔問、擘脊便棒、待它道某甲過在甚處、卻向道、逢人不得錯擧。

道舊至上堂、召大衆云、沒絃琴指趣深、尖新曲調須遇知音、知音既遇、試彈一操去也、遂橫拄

杖作撫琴勢云、會麼、高山流水無窮意、落落斷崖千萬尋。

上堂、召大衆云、寒食淸明節、家家拜掃時、木人空嘆息、石女泪雙垂、惟有林下道人、絕學無爲、百不會、百不知、拈起少林無孔笛、逆風吹了順風吹、好太哥。

結制上堂、諸方安居結制、靈岩結制安居、雖是一般規矩、於中大有差殊、作麼生、趙州東壁掛葫蘆。

端午上堂、拈拄杖示衆云、拄杖子無偏黨、遍界不曾藏、通身無影像、左邊卓一下云、妖怪盡勦除、右邊卓一下云、佛魔俱掃蕩、掃蕩後如何、擲下拄杖云、普天皇道無遮障。

徑山圓照先師訃音至、上堂、召大衆云、頑處非常、放軟頑、偏能陸地要撑船、驀然撑向龍門去、蹤跡不知往那邊、幾多望斷空惆悵、亦復嗟嘆泪潸然、拍禪床一下云、安得鸞膠續斷絃。

擧哀召大衆云、我有一句子、不封亦不樹、不在舌頭邊、亦非思憶處、諸人若要知得親切、徑山圓照老人、卽今在汝諸人眼睫上、放大光明、肆口宣說、急須諦聽、其或未然、蒼天中哭蒼天。

祈雨感應、上堂、拈拄杖示衆云、拄杖子化爲龍、拏雲攫霧、妙應難窮、霈然洪霆、四海皆通、五穀結實、萬物歸功、鼓腹謳歌忘世事、以拄杖打圓相云、太陽依奮海門東、擲下拄杖下座。

解夏小參、直下猶難會、尋言轉更賒、若言佛與祖、特地隔天涯、便恁麼承當、已是不堪持論、那更休夏自恣、取驗蠟人、也大屈哉、靈岩恁麼告報、莫有猛省底麼、拍禪床一下云、無端夜來雁、驚起後池秋。

復擧、巴陵示衆云、不是風動、不是旛動、旣不是風旛、向甚處着、有人與祖師作主、出來、與巴陵相見、後來雪竇道、是風動、是旛動、旣是風旛、向甚處着、有人與巴陵作主、出來、與雪竇相見、師拈云、總道二古德、平相擊揚、金聲玉振、耀古騰今、殊不知、一人太儉、一人太奢、有人與二老宿作主、出來、與靈岩相見。

建閣謝修造上堂、拆東籬補西壁、從空架空、以楔出楔、他時聳壑昂霄、須信不勞餘力、這般說話、直是好笑、何故、纔方搓彈子、便要揑金剛、下座。

上堂、擧僧問巴陵、祖意敎意、是同是別、巴陵云、鷄寒上樹、鴨寒下水、圓照老師道、川僧嘗苴、浙僧瀟洒、師拈云、二老雖則各擅家風、其奈優劣不等、靈岩也有箇道處、或問祖意敎意、是同是別、只向道、鳶飛戾天、魚躍于因。

上堂、拈拄杖示衆云、山僧昨日入邑滿散、於無心中、收得一物、非長短方圓、亦非青黃赤白、賤則價重婆婆、貴則分文不直、不敢囊藏、今日歸來、不免擊鼓陞堂、與諸人平分去也、卓一下云、一加三二添六、擲下云、收。

浴佛上堂、擧藥山因遵布衲殿主浴佛次、藥山問云、儞只浴得這箇、還浴得那箇麼、遵云、且將那箇來、藥山休去、師拈云、藥山老漢、纔開臭口、便見鄉談、引得布衲、隨邪逐惡、當時待他恁麼道、但箇香湯浴佛、管取藥山開口了合不得、靈岩不問儞這箇那箇、今日正當四月八、敢保諸人、未曾夢見山僧、盖膽毛在。

## 廣福語錄 終

# 住常州無錫南禪福聖寺語錄

侍者清澤編

指三門、我此門風、孤危不立、若是臨濟兒孫、便請單刀直入、喝一喝。

佛殿、釋迦彌勒是他奴、他是阿誰、揷香云、且看四稜蹋地時。

大聖殿、出現在楊州、留錫於此地、寶塔凌高空、聲光動萬里、利物應群機、如月分衆水、我來爇瓣香、一瞻一頂禮、從教人道、自倒還自起。

據方丈、横按拄杖、召大衆云、山僧坐地待、汝構去、良久云、諸人還覺頂門重麼、擲拄杖、便起。

拈漕帖、此是都運殿撰侍郎、斡旋造化、掌握乾坤、於無心中、當陽拈出、令未信者信、未聞者聞、山僧頂戴奉行、誰不伏聽處分。

指法座、向上一路滑、壁立千仞險、南禪不立堦級、直與當頭坐斷。

祝聖、次祝州縣香、據座、(問答不錄、)乃云、靈山的旨、少室眞機、孤迥迥生、風颯颯地、直得超情離見、蓋色騎聲、揑聚放開、無適不可、所以居海岸、則時聞潮落潮生潮聲浩浩、寓梁溪、則但見上載下載來往幢幢、賓主交參、風雲會合、正恁麼時、如何通信、良久云、洞庭七十二峯青。

舉、烏窠和尚、因白侍郎問、如何是佛法大意、烏窠云、諸惡莫作、衆善奉行、侍郎云、三歲孩兒也解恁麼道、窠云、三歲孩兒雖道得、八十老翁行不得、師拈云、侍郎手擎仲尼日月、腰佩毘盧金印、等閑通箇消息、迥出常流、烏窠雖則當機直截、其奈易見難明、諸人還知古德爲人處麼、擘開華岳連天秀、放出黃河一派清。

當晚小參、折脚鐺破木杓無柄覇、難模索、横拈倒用、破二作三、正按傍提、七穿八穴、靈山密付之後、少室單傳以來、的的無私、繩繩有準、若以正眼觀之、當甚閑家破具、雖然此意分明、誰共委、相同扶起舊家風。

復舉、芭蕉和尚僧問、不落諸緣、請師直指、蕉云、有問有答、拈云、芭蕉接物應機頗善、平高就下、子細檢點將來、未免拖泥滯水、若問南禪不落諸緣、請師直指、拈棒便打、若稍知痛痒、必不辜恩負德。

歲夜小參、心隨萬境轉、轉處實能幽、隨流認得性、無喜亦無憂、山僧官差不自由、只得隨流入流、所以新來乍到、未知井竈郎忙、送舊迎新、未暇改聲換調、厨子聚蠅之糝、囊無繫蟻之絲、內空外空內外空、多憂多慮多煩惱、歲已盡、歲已除、窮厮煎、餓厮吵、露柱暗攢眉、燈籠拍手笑、且道、笑箇什麼、良久云、毘婆尸佛早留心、直至如今不得妙。

舉、雲門示衆云、三乘十二分教、達磨西來、放過卽不可、若不放過、不消一喝、雪竇舉了一喝、復云、好喝、大衆若要鼻孔遼天、辨取這一喝、師拈云、唱高和寡、則不無二古德、檢點將來、當甚屎沸聲。

上堂、舉、靈雲見桃花悟道頌、三十年來尋劍客、(著語云、癡狂外邊走、)幾回葉落又抽枝、(曾經霜

雪苦、百從一見桃花後、喚鐘作甕、直至如今更不疑、狐狸探水、設有無師自悟底、不堪與南禪洗脚、只如玄沙云、諦當甚諦當、敢保老兄未徹在、又作麼生、良久云、曾爲浪子偏怜客、爲愛貪盃惜醉人。

三月三、大聖生日上堂、擧泗州大聖國師、昔日有問云、住在何國、答曰、何國、着語云、板齒如鐵橛、又問云、何姓、答曰、姓何、舌頭拄上咢、拈云、東涌西沒、七縱八橫、則不無大聖、其奈醜惡俱露、玆遇誕辰、拈拄杖云、拄杖子、未免應時應節、下箇注脚、卓一下云、遲日江山麗、春風花草香、泥融飛燕子、沙暖睡鴛鴦、擲拄杖。

徑山佛智偃溪和尚至上堂、東澗水清且泚、源遠流長、波騰鼎沸、從這裏入、不知其幾、是則是、只如國一禪師、經過梁溪、驀將泗州大聖鼻孔一揑、直得無處出氣、爲復壓良爲賤、爲復神通遊戲、良久云、君子可八。

淨慈斷橋至上堂、擧阿難問迦葉云、世尊傳金襴外、別傳何物、公案、師頌云、弟應兄呼、自揚家醜、倒卻刹竿、全機漏逗、雖有西湖月如畫、何似南禪鐵苕帚。

天童智別山至上堂、擧芙蓉訪實性大師、上堂、以右手拈拄杖、安向左邊云、若不是芙蓉師兄、大難委悉、便下座、師拈云、實性用處、雖則左之右之、其奈翻成特地、南禪亦欲効古之作、未免拔貧作富、蒿湯備禮、擲下拄杖云、若不是天童師兄、大難委悉、便下座。

結制小參、金烏急、玉兎速、百歲光陰一瞬息、驀拈拄杖云、惟有拄杖子、硬葛狙、黑鄰皴、勿變遷、無面目、三月護生、九旬禁足、酌然使得十二時、不被十二時催促、任他門外、紅塵擾擾、來往幢幢、肥馬碌碌、瘦馬碌碌、驀然翻變化、爲龍、爲雨、爲霖、俱莫測、卓一下。

復擧、僧問智門、蓮花未出水時如何、答云、蓮花出水後如何、答云、荷葉、師拈云、應機接物、則不無、智門要且只能順水張帆、不解逆風把柁、有問南禪蓮花未出水時如何、答云、三平二滿、出水後如何、答云、四角六張。

結制上堂、衲僧家擔兜行脚、那邊經冬、這裏過夏、撑眉努目、口噤舌沸、及乎與之立箇期限、同住大光明藏、禁足護生、一似蛇入竹筒、伎倆俱盡、山僧不免撥開些子活路、總教轉得身吐得氣、見山是山、見水是水、飢來喫飯、困來睡。

祈雨開經佛事、毘盧遮那佛、願力周法界一切國土中、恒轉無上輪、所謂一句之內、包法界之無邊、一毫之中、置刹土而非隘、塵塵爾、刹刹爾、巍巍乎、蕩蕩乎、霑慈雲而誘大千、霏法雨而津百億、遂得五穀秀實、萬物滋生、處處通津、頭頭合轍、恁麼委悉、如是、我聞開、信受奉行卷、不滯言詮、脫或未然、切忌巡行數墨、淹黑豆子、是則是、只如端明相公與衆官等、爲民祈請、閱此大經、臨筵作證、必竟有何祥瑞、乃云、願展調羹活國手、爲霖爲雨沃人間。

上堂、擧、無着和尚、往五臺路逢一老人、無着問云、莫是文殊麼、老人云、豈有二文殊、無着便禮拜、老人忽然不見、趙州代云、文殊文殊、薦福懷云、無着只有先鋒、且無殿後、老人若不隱去、有甚面目見無着、師拈云、二古德、總是隨邪逐惡、無着認假不認眞、待他道豈有二文殊、便與兜一喝、老人縱有神通、亦使隱身無路、諸人只今要見文殊麼、擲下拄杖云、直下來也、急着眼看、元宵上堂、召大衆云、祖佛付授、以心傳心、猶如鏡燈交光互照、燈喩一眞心、鏡喩十法界、燈燈

相攝、鏡鏡交羅、盡十方佛刹、微塵數世界、重重無盡、無盡重重、炳煥融通、靈明廓徹、所以道、重重交映、若帝網之垂珠、念念圓融、類夕夢之經世、然雖如是、諸人夜半、法堂上東行西行、切須照顧、且道、照顧箇什麼、良久云、照顧撞着露柱。

退院上堂、梁渚溪邊下直鈎、波翻浪輥費牽抽、六年用盡腕頭力、收卷絲綸任性遊、不着此岸、不着彼岸、不滯中流、欸乃一聲天地秋。

# 福聖語錄 終

師因、日域法眷、道舊鄉人、不忘徑山道聚之義、屢邀閑樂、累卻復至、於景定庚申、暫與一遊、海紅檣上、龍獻七大寶珠、擧衆瞻仰、咸云、東海龍王來迎、繼卽順帆、速達彼岸、聖福禪寺住持乃法眷、適値開山千光法師忌辰、方丈大衆、禮請。

陞座、(問答不錄、)乃云、毘盧性海、本無大小方圓、妙淨明心、不礙色空明暗、如鏡含萬象、似月印千江、曾無出沒之蹤、奚分彼此之間、所以居宋朝、則口呑三世佛、遊日本、則喜動萬家春、處處通方、頭頭合轍、適値聖福法兄、雲集此方他土、若聖若凡、宴坐圓覺妙場、爲說摩訶般若、前半夏說前分般若、後半夏說後分般若、前後頓說常說熾然說、無間歇、只要諸人頓證頓悟、一夏無虛棄底道理、玆値開山和尚千光法師遠諱之辰、俾令爲衆闡揚、且道、說箇什麼、以拂子擊禪床一下云、這裏見得徹去、釋迦彌勒、飲氣呑聲、臨濟德山、望空啓告、雖然不是任公子、徒勞話釣竿。

復擧、南泉和尚示衆云、王老師自小牧一頭水牯牛、擬向溪東牧、未免食他國王水草、擬向溪西牧、未免食他國王水草、不如隨分納些些、總不見得、師拈云、南泉老漢、雖則不忘水草之恩、其奈腳跟未點地在、兀庵盡力跨跳、也出他綣繢不得、雖則這邊那邊應用不缺、其奈先被聖福法兄勘破、然雖如是、且作麼生是納些些底道理、以拂子擊禪床一下云、眼睛纔定動、未免那斯祈。

師次至京東福禪寺、方丈大衆禮請。

陞座、(問答不錄、)提綱、欲識佛性義、當觀時節因緣、時節既至、其理自彰、是故靈山密付之後、少室單傳以來、諸祖平興、分宗列派、繩繩有準、的的無私、續焰聯芳、直至今日、堂頭法兄、不忘徑山師席、義聚屢承之約、正爲提持、靈惰暫遵來誡、越漢觀國之光、卽回舊隱、畢殘、既乍到此、傳令爲衆舉揚、只得客聽主裁、遂卽大唐國裏打鼓、日本國裏陞堂、宗通說通、無固無必、人天畢集、凡聖交參、宛爾一會、靈山儼然未散、普使未信者信、未聞者聞、人人獨步大方、箇箇歸家穩坐、是以謂之佛性義、時節因緣、時節既至、其理自彰、雖然如是、惟有向上一路、未敢動着、何故、相逢且說三分話、未可全拋一片心。

師、關東部從遠迓、纔到建長禪寺、掌國最明寺殿、懷香先來參禮、力勸端坐、受炷拜了、復進前覆云、弟子在大宋、曾禮拜和尚、今者多幸、再拜慈顏、(見其語異、)師卽握起拳云、吾雖年老、拳頭硬在、復進前云、弟子兩年前、曾夢見和尚頂相、敎訓參禪、惺後親繪供養、此者獲拜慈相、與夢見一同、喜悅之至、師云、且莫說夢、又問、和尚尊年多少、師云、六十三、云、弟子不問這箇年、師仍竪拳云、莫是這箇年麼、擬議無語、師便掣三拳、忻然領話云、蒙和尚敎打、懽喜無量、師云、不得作拳頭會、方就坐少疑而辭、次朝復至、同方丈大衆禮請、卽就寺爲衆普說。

據座、垂釣、年來佛法、播關東、兩國喧傳觸處通、僕僕來觀殊勝處、果然殊勝妙難窮、莫有共相贊揚者麼、禪客出問云、收綸罷釣入扶桑、大海應難可測量、道眼從來空宇宙、灼然遍界不曾藏、學人上來、願聞法要、師云、四海浪平龍睡穩、九天雲靜鶴飛高、進云、恁麼則非但建長增秀氣、少林花木又重新、師云、有水皆含月、無山不帶雲、進云、記得、昔日臨濟得黃檗印證之後、往遊徑山、彼時徑山七百餘衆、因甚星飛火亂、師云、不會做客、勞煩主人、進云、可謂眞不掩僞、曲不藏直、師云、錯下名言、進云、堂頭和尚、爲五山龍象之首、作巨刹人天之師、駕海而來、闔國忻幸、師云、不因紫陌花開早、爭得黃鶯下柳條、進云、恁麼則天高群象正、海濶百川朝、師云、天下人仰望不及、進云、臨濟上徑山、七百餘衆星飛火亂、和尚遊日本六十餘郡、仰德瞻風、且道、與臨濟是同是別、師云、龍得水時添意氣、虎逢山色長威獰、進云、今古應無墜、分明在目前、師云、猶隔重關、進云、今日方丈大衆、奉上命、禮請、爲衆普說、和尚畢竟如何指示、師云、更吃老僧拳頭、始得、進云、恁麼則棒頭有眼明如日、要識眞金火裏看、師云、得饒人處且饒人、又一僧問云、德山入門便棒時如何、師云、匙挑不上、笑殺傍觀、進云、臨濟入門便喝時如何、師云、翻成切怛、進云、一人行棒、一人行喝、那箇親那箇疎、師云、一時列下、進云、堂頭大和尚、光臨此土、必竟行棒耶行喝耶、師云、總不作野狐精見解、進云、如何是爲人底一句、師云、三十棒且待別時、乃云、鎌倉路滑、到者還稀、巨福山高、誰能到頂、千聖應難入作、萬靈景仰無門、若非切切相邀、拙者安能到此、便見大力量人、犬智慧者、同一悲願、同一慈力、刱新寶所、金碧奐然、樓閣重重、像法濟濟、令一切人覩像法而悟心法、了自心見佛心、於一心而頓證百千法門、於一法而貫通無量妙義、以至布幔天網、開萬煆爐、煆聖煆凡、烹佛烹祖、掀翻海岳、撥亂乾坤、拽取占波與新羅、鬪額、是則是、只如今日主賓平換、凡聖交參、賓主歷然、合談何事、驀拈拄杖云、兩箇馱子相逢着、世上元來無直人、卓一下。

復云、目前無法、意在目前、不是目前法、非耳目之所到、是故三教聖人、互相出興、各立門庭、示眞實相、無非只要天下人、遷善遠惡、明心見性、雖然殊途、究竟同歸一理、惟是證悟有淺深、用處有廣略、如水銀落地、大者大圓、小者小圓、如明鏡當臺、胡來胡現、漢來漢現、且老拙生緣西蜀、幼年棄儒、剃髮、挾冊講肆、數載、知非究竟、捨去南詢、遍歷諸老門庭、及到蔣山、八月二十五、值癡絕和尚上堂、擧、覆船有僧、到雪峰、峰云、甚處來、僧云、覆船、雪峰云、生死海未度、爲甚覆船、渠無生死、言下忽然認得本來面目、憤憤之心稍息、及到育王、參無準和尚、遇上堂、擧僧問古德、深山巖崖還有佛法也無、古德云、有、如何是深山巖崖佛法、答云、石頭大底大、小底小、言下如夢忽覺、自後凡遇入室、常下語、及侍師上徑山、一日聞師云、昔日白雲端和尚、因東山演祖參請次、與之云、近有數僧、自廬山來、教伊說禪、亦說得、下語亦下得、批判古今、亦批判得、祖云、和尚如何、端云、我向伊道、直是未在、演祖聞此語、數日飲食無味、後七日方諭厥旨、是時拙者、一聞擧此、無言可對、只向未在處、做工夫、久久不輟、凡入室也不下語、一日遇入室、先師把住云、尋常口喃舌沸、如何不下語、打一竹篦、當下打破漆桶、禮拜了退、然後徐徐陳於師前、乃云、汝徹也、只是得道易、守道難、須要默默守之、久久自然感驗也、自此如癡如兀度日、先師遺以兀庵二大字、只欲隨緣放曠、以度殘喘、無奈、數處被抑首衆、業緣所牽、公選屢董小刹、不容辭避、在衆時、曾同蘭溪聚首於蔣山徑山千百衆中、雖各究明己躬大事、時復以此道、切磋琢磨、執別而來、各天一涯、伏聞航海東來、際遇王公大人、信向佛法、留心此道、不忘悲願、同心同力、剏新寶所、日域魁爲第一甲刹、與宋朝第一徑山無有異矣、數年前屢承之約、累卻復至、以故撤去寺事、越漢乍到、乃荷遠迓之禮、伏承謙冲領大衆、奉上命、請爲衆普說、不容堅辭、普說二字、何敢承當、前輩尊宿、圓悟大慧諸宿德、辯瀉懸河、滔滔無間、具載方冊、看者無不明心見性、安敢望古德萬分之一、雖然久參之士、故不在言、後學初機、亦須親見親聞、以故勉從所請、應箇時節、略聞此間、從古以來、惟弘教法、於今始剏宗門、往往信與疑、而未決者衆、殊不知不立文字、直指人心、見性成佛之旨、從上無數大劫、千佛萬佛、互相出世、惟傳此心、非特迦文老漢出世、强立此旨、且如初生下來、一手指天、一手指地、云天上天下、唯我獨尊、但不知、此語出何教典、此便是不立文字直指人心底張本、以至棄金輪王寶位、直入雪山、六年修道、於臘月八夜、覩見明星、忽然頓悟、乃云、奇哉一切衆生、具有如來智慧德相、但以妄想執着、不能證得、此是不立文字直指人心底樣子、但不知教相中、以爲教解釋耶、以爲禪解釋耶、自成道之後、於三七中、思惟如是事、無啓口處、蓋爲下根中根上根、啓問不得、已起道樹、詣鹿苑、觀根、逗教應機而說、下根者、爲說小乘法、四諦法門等是、中根者爲說中乘法、十二因緣等是、上根者爲說大乘法、六波羅密等是、初談有教、阿含等經是、爲一切衆生、皆着有見、次演空宗、般若等經是、一切衆生復着空見、着有着空、執病轉深、後向靈山、始開中道、非有非空、中道大乘之教、圓覺楞嚴華嚴等經是、說來說去、三百餘會、漸積之多、滿龍宮盈海藏、凡一切經中、皆說不立文字直指人心之理、曉然無纖毫差殊、如何見得、如金剛經首、先須菩提白佛言、世尊、如來善護念諸菩薩、善付囑諸菩薩、乃至云何應住云何降伏其心、世尊更不周由者也、只就他身子上打劫、答云、須菩薩若善男子善女人、發阿耨多羅三藐三菩提心者、應如是住如是降伏其心、須

菩提當下妥首貼耳便道、唯然世尊、只不合道箇願樂欲聞、引得許多葛藤、遍地、此是諸經中、說不立文字直指人心、底影子、此之經語、只指爲教相文字之說得麼、末後又道、云何爲人演說、不取於相、如如不動、雖有疏鈔解釋、到此亦未免、口似磉盤、南泉和尚、猶放不過、便道、喚作如如、早是變了也、衲僧門下、無縫罅處、拶開縫罅、得人憎、無出這些子、所以瞿曇老漢、洞見後來必有泥教者、乃云、始從鹿野苑、終至跋提河、於是二中間、未嘗說一字、雖則盡力剗除執泥教相之病、其奈執病轉深、此處今徹見不立文字直指人心之要、後於靈山百萬衆前、拈一枝花、獨有迦葉、領於一笑之頃、便見拂跡成痕、不合更硬冬瓜印、吾有正法眼藏涅槃妙心、分付摩訶大迦葉、塩坰堆上、重添塩坰、當時百萬衆中、忽有箇漢、翻轉面皮、便見一場敗缺、不少、瞿曇入滅之後、迦葉阿難諸大弟子、結集從前四十九年所說之法、列爲三乘十二分教、豈特只滿龍宮盈海藏耶、其有無著天親護法馬鳴等諸菩薩、深慮小根小智者、難曉佛理、於是各各造論解釋、號爲經律論三藏、漸漸傳來唐土、終未能足、由是玄奘諸師、親往西天、請經律論、歸來東土、乃見一切人實難曉解、遂製疏造鈔解釋、令一切人容易曉解、積來積去、堆積如山、自此之後、習經律論疏鈔者、執爲文字之學、以爲究竟之學、不信教外別傳之旨、是爲究竟之道、深可怜憫、但不知執泥文字者、除却黑墨白紙之外、如何趣向、往往金口玉舌、亦難與分說、逗到薦月三十日、生死到來、前路茫茫、未知何往、方知文字之學、果不得力、悔將何及、迦葉阿難等、結集法藏之後、更不復着眼、只將靈山密付、不立文字、直指人心之要、祖祖相傳、是故阿難問迦葉云、師兄、世尊傳金襴外別傳何物、迦葉呼云、阿難、阿難應諾、迦葉云、倒卻門前刹竿着、

這箇卽是前來所得底冬瓜印子、遞相傳授、至二十八祖菩提達磨祖師、得法破六宗之後、受識記、十萬里航海而來、遊梁歷魏、惟以不立文字直指人心之要、少林九年面壁、得神光求道于前、其神光者、乃所學儒教諸子百家、貫古通今、無不曉了、所習三乘十二分教、無不精通、問法達磨祖師云、諸佛無上妙道、可得聞乎、達磨祖師答云、諸佛無上妙道、豈小根小智下劣之者所得哉、於是神光斷臂于前、立雪齊腰、祖師問云、當以何求、神光云、我心未寧、乞師安心、祖師答云、將心來、與汝安、神光推窮儒教諸子百家、三乘十二分教中、並無一句相應、只據實祇對云、內外覓心、了不可得、如趂狗逼墻、計窮力盡、祖師只輕輕以冬瓜印子、面門上一搭云、與汝安心竟、且道、與世尊答須菩提應如是住如是降伏其心之旨、何異何別、試着眼看、神光得此印可、據師繩、爲二祖、繼得三祖、乃是白衣居士、儒釋之教無不精通、忽患風恙、特來問法於二祖云、弟子身纏風恙、乞師懺罪、二祖更不移易一絲毫子、便云、將罪來、與汝懺、三祖亦如是推窮無計、乃云、內外覓罪、了不可得、二祖仍將所得底印子、一搭云、汝與懺罪竟、佛佛授手、祖祖相傳、直至今日、所以靈山拈花一節、謂之教外別傳、既是經律論、皆包括在中、更不單單具載、是知我此宗門、猶如大海、百川異流、莫不同歸一味、如太虛空、盡百億恒沙河世界、無不包容、所以道、未有世界、早有此性、世界壞時、此性不壞、諸佛未出世、祖師未西來、人人常光現前、箇箇壁立千仞、在聖不增、一絲毫、在凡不減、一絲毫、惟是迷悟有殊、所以聖凡有異、遂致執泥文字之學、滋多、本有之性不能發現、背覺合塵、棄本逐末、蓋由是矣、儒教亦云、君子務本、本立而道生、此本卽是自己本命元辰、本來面目、得此本立、方可得道生、本若不立、何緣得道生、此

是儒家膚淺之教、尙且說得如此親切、何況不傳之妙者耶、是汝諸人、若要眞箇參禪學道、究明生死大事、以徹證爲期者、第一須具堅久身心、先將平昔所學、諸子百家、文章四六、所習經律論、文字之學、與夫見聞覺知、惡知惡覺、一切雜毒、颺在他方世界、然後退步就己、放教空勞勞地、只將古人一轉語、貼在鼻尖子上、晝參夜參、行住坐臥、折旋俯仰、孜孜切切、抵死拚生、與之厮厓、無纖毫間斷、不見道、暫時不在、如同死人、提撕來提撕去、日久歲深、因緣純熟、忽然啐地折、嘭地斷、大死一回、己眼豁開、本地風光、頓現在前、方知道元來只在自己、不在別人、直下不疑佛、不疑祖、不疑天下老和尙舌頭、所以道、參禪須是悟、悟了須遇人、若不求明眼宗師印證、譬如讀書發解及第了、不得轉官相似、亦只徒然、既得柄覇入手、便知生從何來、死從何去、生死去來、絲毫無疑、到恁麼田地、方謂之大休大歇、無生死可怖、無菩提可求、盡十方世界、通上徹下、是箇眞實人體、豈不見古德道、若有一人、發眞歸源、十方虛空、悉皆消殞、信不誣矣、然後道香果熟、入纏垂手、隨機接物、自然綽綽有餘裕哉、若是半信半疑、今日問一句、明日問一句、更歇數日、又看冊子中、記得兩句、又問如何若何、央央庠庠、更有一等薄福闡提、專要點檢別人、並不點檢自己、決不堪爲種草、敢保、此等之人、參到驢年、也未夢見在、豈不見、良遂座主、講得極是淵源、乃知教相文字之學、非是究竟、聞麻谷和尙門墻孤峻、弃去文字之學、特去參扣、麻谷一見、便知是箇漢、便去菜園裏、善知識者、是大因緣、且不與爾周由者也、如何若何、只要箇人、向無入作處、入作、及至第二次見、麻谷直入方丈、閉卻門、良遂忽然大悟、直從死邊過、便供出死款、云、和尙莫瞞良遂、良遂若不來見和尙、幾乎被十二本經論賺過一生、從前執泥經論文字之學、執病、當下氷消瓦解、及歸講肆中、謂衆曰、諸人知處、良遂總知、良遂知處、諸人不知、若不回光返照、安有此耶、所以宗門、不問僧之與俗、貴之與賤、此可趣向、所以從前大儒、李翺相公、裴相國、東坡內翰、韓文公、張無盡、楊無爲等諸大朝貴、自小讀書發解及第做官、到極則處了、故是貫古通今、飛英騰茂、儒教釋教道教、無不精通、亦知非是究竟、急急回頭轉腦、參見識識、往往聰明靈利、半信半疑者、難得入手、其聰明靈利底、除是不向前、若奮鐵石身心、極容易契證、豈不見、于頔相公、參見紫玉藥山諸老宿、他尋常儒釋之教、無不遍看、只將所疑之句、以發問端、一日忽問云、如何是黑風吹其船舫、飄墮羅刹鬼國、古德便與直提向上、頂門痛與一槌、答云、于頔客作漢、道什麼、于頔相公、滿面怒色、古德指云、這箇便是黑風吹其船舫、飄墮羅刹鬼國、于頔言下忽然契悟、須信佛法無人情、除是大根器人、方禁得、這箇惡辣手段、與央央庠庠、半信半疑者、何啻天地懸殊、所以古德道、參禪參到無參處、參到無參始徹頭、又有老宿云、參禪參到無參處、參到無參未徹頭、一似水上捺葫蘆子相似、如何摸索、必竟如何、一拳拳倒黃鶴樓、一踢踢翻鸚鵡洲、有意氣時添意氣、不風流處也風流。

復舉蔣山贊元禪師、因荊公舒王問云、如何是佛法大意、蔣山不答、舒王扣之、既久不得、已而謂之曰、公受氣剛大、世緣深厚、以剛大之氣、必能身任天下之重、然用捨不能必、心之未平、以未平之心、安能一念萬年哉、師扣云、大小大贊元禪師、雖則着草鞋、向舒王肚裏走千百匝、殊不知、剛大之氣卽是此道之大本、佛法之根源、本欲當面瞞人、那知識成自瞞矣、當時舒王、若裂轉面皮、甚處討蔣山、然雖如是、要見舒王、則易、見蔣山、則難、且道、諸訛在什麼處、諸人還委

悉麼、以拂子擊禪床一下云、伯牙與子期、不是閑相識、便下座。



# 住巨福山建長興國禪寺語錄

侍者　道昭　景用　禪了　編

陞座、祝　聖、據坐垂釣、出得油缸、入醬缸、通身是口、若爲談、老拳尚有些筋力、拚命來機爲指南、有麼有麼、有僧出問云、極目春光水照空、岸莎汀草碧茸茸、乘時願赴慇懃請、大展慈風振祖風、學人上來、願聞第一義諦、師云、杲日當空、清風匝地、進云、諸佛出世、地涌金蓮、和尚榮鎮此山、有何祥瑞、師云、擘開華岳連天秀、放出黃河一派清、進云、非但建長增瑞氣、八方鼓舞樂忻忻、師云、春行萬國、月印千江、進云、大唐國日本國、宗風益振無殊別、如何是大唐國佛法、師云、一捧一條痕、進云、如何是日本國佛法、師云、一掬一掌血、進云、恁麼則一處通、千處萬處一時通、師云、只儞一箇未知痛痒在、進云、只如大檀那國公殿、特加禮請、和尚開堂演法、和尚數次啓箚力辭、復進十五偈控免、因甚究竟辭免不得、師云、早知今日事、悔不慎當初、進云、可謂佛佛道同、悲願重廣開、利濟沃蒼生、師云、好事不如無、進云、玆辰國公殿、親臨拱聽法要、畢竟如何指示、師云、近水樓臺先得月、向陽花木早逢春、進云、恁麼則錦上鋪花千萬重、師云、這一句子、却也相似、

乃云、諸佛未出世、祖師未西來、人人眞智湛然、好箇清平世界、無端胡種萌孽、便見毒惡流行、

平地干戈、無風起浪、遂致分疆列界、移東補西、荊棘參天、葛藤遍地、然雖如是、只如世界未立、佛祖未興已前、如何通信、良久云、鯨吞海水盡、露出珊瑚枝。

復擧臨濟和尚、因王常侍相訪、同到僧堂、常侍云、這一堂僧、還坐禪麼、濟云、不坐禪、常侍云、還看經麼、濟云、不看經、侍云、也不坐禪、也不看經、必竟作箇什麼、濟云、總教伊成佛作祖、侍云、金屑雖貴、落眼成翳、濟云、將謂是箇俗漢、師拈云、臨濟老漢、氣呑寰宇、只要勘破一切人、却被王常侍等閑勘破、諸人還知麼、且聽下箇注脚、一挨復一拶、一踢復一拳、今古應無墜、分明在目前。

當晚小參、有僧出問云、空手把鋤頭、步行騎水牛、人從橋上過、橋流水不流、章旨如何、師云、金剛杵、打鐵山、摧、進云、如何是空手把鋤頭、師云、千聖難摸索、進云、如何是步行騎水牛、師云、覷著則瞎、進云、人從橋上過、橋流水不流、又作麼生、師云、卻較些些子。

乃云、有句無句如藤倚樹、樹倒藤枯、句歸何所、須知言詮不及、描貌難成、溈山笑裏有刀、遂致叢林話覇、恁麼恁麼、大難大難、纔有一絲頭、便有百絲頭、獅子一滴乳、迸散百斛驢乳、然雖如是、添得溈山笑轉新。

復擧乳源和尚示衆云、西來的的意、不妨難擧唱、時有僧出、乳源擘脊便打云、如今是什麼時節、出頭來、便歸方丈、師拈云、正令不行、拗曲作直、這僧若知痛痒、乳源歸方丈未得在。

上堂、卸却千斤重擔、惟要在處清閑、老來業債未脫、復墮建長一關、語音未辨、酬酢猶艱、說者聽者、難復難、只據一條白棒、南來者北來者、俱與痛棒、忽然打着一箇半箇獨脫底、從教知道、



酌然不在說處不說處、三乘十二分教、總是指空話空、撒土撒沙、必竟如何、摘楊花摘楊花。

佛生日上堂、右脇纔生、便放拍盲、指天指地、獨步縱橫、雲門要打殺、建長助掘坑、惡種從教不復萌、雖然也是賊過後張弓。

結制上堂、昨日晴今日雨、春夏交承、時節順序、一似林下衲僧、不越規矩、三月安居、克期而取、西天以蠟人氷、雲峰以鐵彈子、建長亦有一條活路、飢則飡、渴則飲、閑則坐、困則眠、以此爲據、諸人但恁麼參、決不賺忤。

解夏小參、佛以一音演說法、衆生隨類各得解、敢問、大衆、且那箇是一音所演之法、莫是天是天、地是地、山是山、水是水麼、莫是春生夏長、秋收冬藏麼、如斯理論、大似撥火覔浮漚、且道、是那箇一音、以拂子擊禪床云、一音既演、直得盡乾坤大地、若聖若凡、情與無情、聞是法音、悉得悟解、然雖如是、唯有拂子、不入這保社、何故、不見道、山僧不會輪甲子、一葉落知天下秋、又擊一下。

上堂、解開布袋頭、縱橫得自由、其住也無拘無束、其去也南州北州、放牧溈山水牯牛、不風流處也風流。

謝兩藏主上堂、拈拄杖召大衆云、大藏小藏、盡從這裏流出、諸人若知得落處、一生參學事畢、其或未然、且聽拄杖子從頭點出、左邊卓一下云、這箇是有教、右邊卓一下云、這箇是空教、中間卓一下云、這箇是中道大乘教、三段不同、欲釋此經、向下文長、付在來日、又卓一下。

國公就本寺、滿散祈禱道場、禮請普說、問答不錄、乃云、大人具大見、大智得大用、胷藏六合、掌

握乾坤、坐碧油床、被忍辱鎧、執堅固箭、秉智慧弓、總大千世界、爲一戰場、指百億須彌、爲一射
梁、百發百中、雙放雙收、掃除百萬妖魔、勦絕步多惡黨、便見時清道泰、海晏河清、八表歸仁、萬
邦入貢、頓轡自樂、坐鎮無憂、可謂我於法王、得法自在、正恁麼時、且道、功歸何所、良久云、寸刄
不施魔膽碎、望風先已竪降旗。

復云、佛說一切法、爲度一切心、若無一切心、何用一切法、蓋由一切衆生、無始以來、無知僻執、
起惑造業、輪廻五趣、如來出世、隨宜爲說處中妙理、令諸有情、了達諸法、遠離疑執、起處中行、
各自修滿、得三菩提、證寂滅樂、皆由心之所作、古德云、只箇心、心心是佛、十方世界最靈物、縱
橫妙用可怜生、一切不如心眞實、持五戒生人道、修十善生天道、皆由心作、至於捨有漏入無
漏、棄有爲入無爲、皆由心作、蓋造善造惡不同、所以諸佛出世、觀根逗教、演說三乘法門、乃至
隨彼彼類、現彼彼身、而爲說法、此法惟只一法、蓋爲有此一切心、應機爲說一切法、雖隨根機
道說於人天大會之中、亦有悟無生忍者、有證阿耨菩提者、亦有雖在會中、如聾如盲不能曉
解者、蓋證悟有淺深、得道有優劣、或密說而顯演、或談空而顯實、或指示教外別傳之旨、無非
只要一切人明自心見自性、證此法、此法者、非有非無、非有無、非無無、若道不在說處、一代時
教甚處安着、若道在說處、且此法作麼生說、須是夙有靈骨、信根堅固、方有趣向分、是故大檀
那夙乘願力、篤信佛法、歸敬切切書寫藏典、披閱誦持、知非究竟、由是力究教外別傳之旨、孜
孜不捨、食息不忘、以徹證爲期、是知、大根器大力量、再來菩薩、方能如此、又能擬大伽藍、爲國
中第一甲刹、廣安多衆、各令知大叢林規式、各令參究己躬大事、各令知有教外別傳之旨、甚



深廣大、可以續佛慧命、能離生死此岸、達到菩提涅槃彼岸、廣度有情、總令成佛、常運此心、愈
堅愈久、能如是哉、老僧乃蜀邦生長、訪道江湖、有年、適因法眷道舊、不忘之義、屢承之約、累卻
復至、以故撤去寺事、暫乘良便、越漠觀國之光、先承國公殿特垂降接、一見如故、雖語音未通、
凡動靜往來、語默酬酢、心眼相照、只此以見吾道眷屬、而致然矣、便見、瞿曇老漢、三百六十餘
會、宣說此法、或人間、或天上、說者聽者、心心相知、眼眼相照、與今日所說所聽、等無有異、所以
而、過去一切劫、安置未來今、未來現在劫、回置過去世、灼然參到、前後際斷、三祇劫空、照見塵
劫以來、絲毫無差、凡情聖量覓一絲毫、了不可得、所謂、一念普觀無量劫、無去無來亦無住、如
是了知三世事、超諸方便成十力、參學之士、向這裏見徹、自己本地風光、本來面目、歷歷分明、
方知、一代時教、句句字字、不說別事、與教外別傳之旨、無異無別、或於三乘十二分教中、明得
者、或於教外別傳之旨、明得者、總是到家蹊徑、教中明得者、終是迂曲、教外明得者、不妨直截、
唯直截一路、必能到家、必到大休大歇之場、盡未來際、得大自在、何故、離心意識參、出聖凡路、
學、方謂直截者也、除是大根器大力量、方堪煅煉、無常迅速、莫作等閑、古德云、努力今生須了
卻、莫教永劫受餘殃、決然人身難得、好時難逢、知識難遇、正法難聞、既得人身、袈裟著體、好時
既逢知識既遇、正法既聞、剗地不將爲事、蓋是不曾種得般若種子、聞似不聞、見似不見、遇似
不遇、蹉過者多、蓋爲有此一切心、所以佛說一切法、山僧自春夏至秋、奉意旨、爲國爲民、啓建
祈禱道場、日以初中後三時、領大衆、熏修披閱誦持、專祈豐稔太平、今來果遂懇祈、茲辰滿散、
陞座爲衆普說、無非以此心說此法、感格諸佛龍天、鑒茲誠禱、吉祥中吉祥、殊勝中殊勝、乃是

此心此法之靈驗也、衆中辨道兄弟、爲在教中明得、爲在教外明得、往往如風過樹者多、灼然不是小事、佛法下衰、無甚今日、老僧在處叢林、每見衆中辨道兄弟、孜孜切切、不捨晝夜、以徹證大事爲期、或有一箇半箇、挨將出來、弘持大法、依舊超出古今者多、若是道念不堅、力量不大、終難希求大法、豈不見、趙州云、諸人被十二時使、惟老僧使得十二時、且道、他在甚處著倒、是汝諸人、若眞箇孜孜切切、只將己躬一件、生死大事、晝參夜參、與之厮厓、片時不肯放捨、灼然使得十二時、若只今日明日、點檢張三、點檢李四、聽人說好便道、好、聽人說不好便道、不好、謂之矮子看戲、隨人上下、於自己依舊黑漫漫地、空喪光陰、不覺老病將至、生死到來、將何抵敵、驢胎馬腹、無可疑者、蓋緣虛消檀越信施、枉受人天供養、棄卻自己工夫、只說他人過惡、他人若無過惡、粧點强說是非、以之爲能、三塗地獄、如何逃得、此是決定之義、與經教所說一同、且不是誑謊之語、信也好、不信也好、老僧千錯萬錯、越漠乍到此間、衰晚之質、語音未通、無奈難卻上命、勉力支撑住持之職、陞堂入室、示衆普說、雖不曾缺、垂手之際、自嘆、枉費精神、大凡出家之士、置身叢林中、披佛袈裟、住佛屋、喫佛飯、須是持佛戒、修佛行、弘佛法、續佛慧命、或出來辨事、輔佐叢林、須是有始有終、盡善盡美、成就叢林典刑、卽是成就自己、方名禪和子、方可稱佛弟子、若不然者、何緣得大事千了百當、萬月三十日到來、可謂緇田無一簣之功、鐵圍陷百刑之苦、是誰過歟、蓋是道念不堅、力量不大、有此差別、所謂佛法下衰、無甚今日者是也、若說此心此法、說到盡未來際、無有窮盡、在會聽者、俱受龍華記別、有一頌子、奉爲圓滿願心、擧似大衆、爲國爲民運此心、果符虔禱、獲豐榮、時淸道泰封疆闊、合國歡呼賀太平。

上堂、一塵入正定、諸塵三昧起、諸塵入正定、一塵三昧起、三昧與正受、土塊泥裏洗、咦、白日堂堂眼見鬼、非不非、是不是、甲子乙丑海中金、丙午丁未天河水、諸人若也不會、且聽拄杖子當陽指示、卓一下云、今朝是九月一、明日是初二、又卓一下。

諸山至上堂、云、開爐節何可說、無賓主話口含霜雪、既遇知音、謾且拈掇、是汝諸人、切不可胡亂挑撥、默默守之、忽然冷灰豆爆、方知道、文武火種難磨滅。

別山斷橋二法兄訃音至上堂、南山白額蟲、撞倒太白峰、直得西湖徹底枯渴、東海怒濤翻空、安漢圭峰拊掌、天台尊者、搥胸、郎忙、日本國裏打鼓、大唐國裏撞鐘、何也兄弟添十字、此意孰能窮、拍膝一下、噓一聲下座。

東福法兄至上堂、同飲龍因、同依師席、切磋琢磨、相滋相益、分袂東西、各提祖令、越漠來投、心膽傾盡、執別恰恰一周、千里俯垂輝映、擧衆再奉慈光、無異撥雲見日、若是向上向下、總將靠之一壁、何也、憶得凌霄蠱毒之家、水也不曾沾他一滴、呵呵呵、會也麼、青山不銷長飛勢、滄海合知來處高。

上堂、吾本來茲土、傳法救迷情、一花開五葉、結果自然成、拈云、老胡授般若多羅讖記、區區十萬里航海而來、遊梁歷魏、冷座九年、以至分皮分髓、將謂有多少奇特、及乎付法一偈、便見敗缺不少、建長雖是他的傳正脈兒孫、不曾將脚踏他界、至茲遇遠諱之臨、因齋慶讃、亦有一偈、擧似大衆、吾本來茲土、無法與人傳、成蛇者入草、成龍者上天。

天台山萬年寺二童行化主至上堂、人從天台來、卻得西川信、報道、萬年松生在石橋頂、豐干